



名古屋外国語大学大学院
国際コミュニケーション研究科
博士前期課程・博士後期課程

2024

Nagoya University of Foreign Studies Graduate School

(2025年度入試用資料)

NUFS
Graduate School of International Studies

NUFS

Graduate School of International Studies

学問の理想を追求する
大学院の生活がここにあります。

目次

I 国際コミュニケーション研究科の概要	2
名称・定員・学位等	2
修了要件	3
特色	4
博士前期課程	4
1. 英語・英語教育コース(英語・英語教育プログラム)	
2. 英語・英語教育コース(英語教授法(TESOL)プログラム)	
3. 日本語・日本語教育コース	
4. グローバルコミュニケーションコース	
博士後期課程	6
1. 英語学・英語教育学分野	
2. 日本語学・日本語教育学分野	
3. グローバルコミュニケーション分野	
II 大学院学生の奨学援助について	7
III 教育職員免許状について	8
免許状の種類、教科及び必要単位数	8
IV 海外留学について	8
大学院学生海外留学制度	8
V 授業科目	9
博士前期課程	9
博士後期課程	10
VI 教員略歴一覧	11
専任教員略歴	11
兼任講師(非常勤教員)略歴	16
コース別教員一覧	19
VII 授業科目の概要	20
博士前期課程	20



名古屋外国語大学長

亀山 郁夫



私たちはいま、ウィズ・コロナ時代という不安に満ちた時代を生きています。また、ロシアによるウクライナ侵攻に端を発する危機的状況によって、グローバル社会の姿は大きく様変わりし、日本社会もまた、他の国々と等しく、これまでとは異なる《競争》と《共存》の二つのベクトルが交差する厳しい状況のなかでの戦いを迫られています。思うに、この状況が、私たちに語りかけているのは、「原点に戻れ!」の精神です。「原点に戻れ!」とは、私たち人類にとっての「理想」とは何なのかを、改めて見直せ、のサインです。しかし、時代がどう変わろうとも、つねに理想とされる人材があります。それこそは、高い教養と良識、優れたコミュニケーション能力を備えた創造的な個性です。また、どんな困難にも耐えていける強い精神力、強いリーダーシップと共感力も大切です。むしろ、これらを一度に身に着けることは困難ですが、私たちの人生と学びの目標として、見失わない心がけが大切です。

他方、日本の学術研究にもまた、大きな変化のきざしが現われています。領域を問わず、「研究のための研究」という態度は通用しにくくなりました。むしろ、社会が身近に抱える矛盾や課題を解決し、地域の人々の生活に広く貢献できる研究が求められているのです。「人間教育と実学」を建学の精神とする本学の大学院が理

想とするのも、まさに世界に通用する実学的な研究であり、リアルな問題意識に裏付けられたテーマの発掘です。

さて、私たちの名古屋外国語大学では、1997年4月、大学院 国際コミュニケーション研究科を設置して以降、多くの優れた高度専門職業人、教育者を養成してきましたが、2020年4月に、新たな時代の要請に即して改革に踏み切りました。前期課程では、英語・英語教育コース、日本語・日本語教育コース、グローバルコミュニケーションコースの、従来よりもはるかに明確化された3コース制をとり、同じかたちを後期課程につなげる改革です。それぞれのコース、分野は、現代の日本社会に役立つ高度な学識を修得させるカリキュラムの構成を持ち、学生ひとり一人を大切に温かい指導体制を誇りとしています。この改革をととして、本学における大学院教育の姿が、より鮮明にアピールできると同時に、これまで以上に専門性の高い教育を実現できるものと確信します。

最後に、創造性にあふれるテーマの発見と実りある研究生活を心より祈念します。



国際コミュニケーション研究科長

早津 恵美子

大学院での学修の最大の特徴は、自分が探求したいテーマを自ら探し、その分野の研究を深め、独自の研究成果をうみだすことです。

学部時代に学んだ専門知識や経験をもとに、最新の研究成果に数多く触れ、自身の研究課題を明確にし、研究課題の探求につとめることが肝要です。研究を深めるためには、研究書や研究論文を数多く読むことが基本ですが、批判的に読むことが大切です。研究を深める中で、教員や他の大学院生と議論を重ね、自分の研究成果を精緻化し、それをわかりやすく他者に発信することも必要です。

本学の学位授与方針では、学修成果として、高い教養、優れたコミュニケーション能力、学際的で豊かな専門性、確かな研究能力を提示しています。本学大学院で学びを究め、文理の枠を超えた広い視野で、グローバル教養人として世界で活躍することを期待しております。

入学者受け入れの方針（アドミッション・ポリシー）

大学院国際コミュニケーション研究科

国際コミュニケーション研究科では、学園の建学の精神である「人間教育と実学」に立ち、言語を中心にすえて、国際理解に必要な知識・技能を総合的に研究・教授する機関として、研究者養成とともに、現代国際社会で活躍する高度な専門知識を持った職業人の育成を目的としています。

このため、入学者の受け入れについては、本学大学院での学修についての関心、意欲とともに、入学後の学修に必要な資質・能力を有する人を求めます。そのための選考方法は、書類審査、本学大学院での研究計画等についての口頭試問を基本として、課程、試験種に応じた選考方法を実施します。

■博士前期課程

博士前期課程では、外国語や日本語の運用能力、専門分野の基礎的な知識、研究能力の基礎とともに、研究意欲を持ち、研究者、高度専門職業人を目指し、広い視野に立って研究をとおして国際社会で貢献しようとする人を求めます。

このため、入学者の受け入れについては、本学博士前期課程での学修についての関心、意欲とともに、入学後の学修に必要な資質・能力を有する人を求めます。そのための選考方法は、書類審査、研究計画等についての口頭試問とともに、試験種によっては外国語、専門科目の筆記試験を実施します。ただし、英語教授法（TESOL）プログラムについては、書類審査とともに、英語による口頭試問、小論文（英文）及び研究計画書に関する試問を行います。

■博士後期課程

博士後期課程では、外国語や日本語の高度な運用能力、専門分野の高度な知識とともに、高い目標意識、豊かな研究能力、強い研究意欲を持ち、教育や研究で指導的立場に立ち、世界を相手に活躍できる研究者、高度専門職業人を目指し、研究をとおして国際社会で十分に貢献しようとする人を求めます。

このため、入学者の受け入れについては、本学博士後期課程での学修についての関心、意欲とともに、入学後の学修に必要な資質・能力を有する人を求めます。そのための選考方法は、書類審査とともに、研究計画書、修士学位論文等についての口頭試問を実施します。

I 国際コミュニケーション研究科の概要

名称 定員 学位 等

研究科名称……………国際コミュニケーション研究科

専攻名称……………国際コミュニケーション専攻

課程と入学定員……………博士前期課程／2年／入学定員20名
博士後期課程／3年／入学定員5名

学位

■博士前期課程

- ◆ 英語・英語教育コース……………修士（英語・英語教育）
（英語・英語教育プログラム）
- ◆ 英語・英語教育コース……………修士（英語・英語教育） ※現職英語教員対象
（英語教授法（TESOL）プログラム）
- ◆ 日本語・日本語教育コース……………修士（日本語・日本語教育）
- ◆ グローバルコミュニケーションコース…修士（国際文化）

■博士後期課程

- ◆ 英語学・英語教育学分野……………博士（英語学・英語教育学）
- ◆ 日本語学・日本語教育学分野……………博士（日本語学・日本語教育学）
- ◆ グローバルコミュニケーション分野…博士（国際文化）





修了要件

■ 博士前期課程

【英語・英語教育コース(英語・英語教育プログラム)、日本語・日本語教育コース、グローバルコミュニケーションコースの各コース】

前期課程に2年以上在学し、コース共通科目から8単位以上、専門教育科目(自コース)から10単位以上の計30単位以上を修得し、修士論文または課題研究の審査及び試験に合格した者に対して修士の学位を授与します。ただし、在学期間に関しては、優れた業績を上げた者については、前期課程に1年以上在学すれば修了を認定することができます。

【英語・英語教育コース(英語教授法(TESOL)プログラム)】

前期課程に2年以上在学し、本プログラムの専門教育科目から30単位以上を修得し、修士論文または課題研究の審査及び試験に合格した者に対して修士の学位を授与します。

〈長期履修学生制度〉

長期履修学生制度とは、職業等に従事しながら、個人の事情に応じて、柔軟に標準修業年限の2年を超えて履修し学位等を取得できるようにする制度です。長期履修学生として認められた場合は、修業年限は最長4年で、授業料は2年分のみ納付します(教育充実費は規定どおり納付します)。長期履修を希望する者は、入学時または1年次2月の所定の期日までに「長期履修申請書」等必要書類を提出しなければなりません。本制度が適用される対象は、社会人を対象とする特別入試及び英語・英語教育コース(英語教授法(TESOL)プログラム)入試により博士前期課程に入学または在学する者で、長期履修申請が認められた者となります。

■ 博士後期課程

【英語学・英語教育学、日本語学・日本語教育学、グローバルコミュニケーションの各分野】

後期課程に3年以上在学し、所定の授業科目を履修・修得し、必要な研究指導を受け、かつ、博士候補資格を取得した上、博士論文の審査及び最終試験に合格した者に博士の学位を授与します。ただし、在学期間に関しては、優れた業績を上げた者については後期課程に1年以上在学すれば修了を認定することができます。

〈博士候補資格〉

博士候補資格とは、博士後期課程における円滑な学位授与を促進するため、学位取得プロセスにおいて学生が一定レベルに達し、学位取得の見込みがあると認められる場合、そのことを明らかにする資格であり、博士論文を提出するためには、博士候補資格の認定を受けなければなりません。なお、本候補資格者は、標準修業年限3年(休学期間を除く)を超えて引き続き在学する場合、授業料、教育充実費は免除されます(学費として指導料(30,000円/年)を納付します)。

博士前期課程

前期課程は本学外国語学部、現代国際学部、世界共生学部及び世界教養学部にもたがる修士課程として設置しています。

カリキュラムは、学部の学習課程を考慮して、英語・日本語及びグローバルコミュニケーションと広範な分野に亘っていますが、研究志向及び就職分野をより明確にすることを意図して、専攻に下記の3コース2プログラムを設け、高い教養と優れたコミュニケーション能力に基づいた学際的で豊かな研究能力を備えた人材育成を目的としています。

なお、大学院独自の奨学金制度や授業料減免制度、大学院生のための共同研究室など、大学院生を支援する制度、施設が充実しています。(詳しくはp.7参照)

英語・英語教育コース (英語・英語教育プログラム)

本プログラムには、英語学、英語圏文化・文学、英語教育の3つの領域があります。最初の英語学は、音声学・音韻論、統語論、意味論、語用論、語彙論等、現代理論言語学の主な領域をカバーし、英語圏文化・文学は、英語圏文学の作品研究や作家研究、またそれらが背景とする社会や文化の研究を含みます。そして英語教育は、英語教育の方法論、指導論や評価論、さらに第二言語習得研究等の応用言語学分野を含みます。

本プログラムでは、英語学、英語圏文化・文学および英語教育学(コミュニケーション論を含む)を専門とする研究者、広い視野と深い学識を備えた高度職業人専門家、卓越した専門性をもつ語学教師を育てることを目指しています。

英語・英語教育コース (英語教授法(TESOL)プログラム)

中学校、高校、英会話学校(個人教授を除く)等の英語教師(外国人教師・ALTを含む)を対象とした社会人対象コースとして、2007年4月に設置されました。生徒の実践的コミュニケーション能力育成のための英語教師の指導能力向上を目的としています。

講義科目は、それぞれの教育現場の状況やそこで学ぶ生徒に合った指導法を開発するためのアクションリサーチ及び研究発表など現場教員のニーズに応える実践的な科目で、すべて英語により行われます。

土曜日や夏季休暇中の集中講義、Webによる個別指導など現職教師が学びやすい環境を整えており、Hawaii Pacific University、University of Newcastle(オーストラリア)及びGriffith University(オーストラリア)の大学院TESOLコースへ1年間の交換留学ができます(留学費用全額支援制度あり)。

Master's programs

◆ 日本語・日本語教育コース

日本語学、日本語教育学、日本文学・日本文化学の3領域に関する幅広い知識をもとに、グローバル社会や多文化共生社会に貢献できることと文化の専門家を育成し、同時に、日本語教育の高度専門職業人養成という社会の要請に応えることを目指します。

日本語学領域においては、日本語の様々な諸領域（文法、音声、談話、語用など）を客観的に観察、分析します。日本語教育学の領域では、学習者の多様性に応じた日本語教育実践、第二言語としての日本語の習得研究、日本語の評価法などを研究します。日本文学・日本文化学領域においては、文化の要素、日本文化の位置づけ、文化の接触・受容・変容・進化等についての知見を得て、日本文化学ならびに日本文学研究の意義を見出します。

◆ グローバルコミュニケーションコース

国際社会で活躍する専門的知見を有するグローバル職業人の育成を目指します。世界の言語・文化・社会・情報などについて文理の枠を超えた視点からグローバル教養を修得し、多様な文化的背景をもつ人々との相互理解を図る多文化理解力を涵養するとともに、世界に向けて情報発信を的確に行う高度なコミュニケーション能力を養成します。外務省職員、国際公務員、国連職員、国際ジャーナリスト等への就職を念頭に、外交官、外務省在外公館専門調査員などの各種資格試験にも積極的にチャレンジするコースです。

Doctoral programs

■ 博士後期課程

博士後期課程には、「英語学・英語教育学」、「日本語学・日本語教育学」、「グローバルコミュニケーション」の3つの専門分野があり、徹底した個別の研究指導を通して高度な専門的職業人、教育者、あるいは研究者を養成することを目的としています。本研究科の特色である総合性、学際性を重視し、前期課程で養われた幅広い視野をさらに深めるとともに、各自の専門領域について高度な研究能力を身につけ、その知識と能力を実社会での実践に生かすことを目指します。

博士後期課程の大学院生を支援する体制も整備されています。博士後期課程に一定期間在籍し、博士候補資格が認められた大学院生は、標準修業年限3年を超えて引き続き在学する場合には、授業料と教育充実費が免除されます。この他にも、大学院独自の充実した奨学金制度と授業料減免制度があり、大学院生のための共同研究室などの施設設備も完備しています。(詳しくはp.7参照)

◆ 英語学・英語教育学分野

英語学や英語教育学の分野を涉猟し、先行研究を批判的に吟味し、有意義な課題を自分で設定、調査、考察し、その成果を博士論文として書くことを通して、自立した研究者や高度な専門職者を育てることを目指します。

この分野には文学(社会論を含む)も密接に関係するので、英語の文学研究も奨励します。

◆ グローバルコミュニケーション分野

言語・文化・社会・政治・情報・ビジネスなどについて文理の枠を超えたグローバル教養の修得に力を入れます。具体的には、1)世界に向けた的確な情報発信、並びに共感を生むコミュニケーション能力の涵養、2)多様な文化的背景をもつ人々との総合理解を図る多文化理解力の向上、3)持続可能な社会発展に向けた問題解決能力やプロデュース力の養成を図ります。博士論文の執筆については、自ら研究課題を設定し、高度な外国語運用能力を駆使して情報を収集し、緻密な分析力と深い洞察力を身につけるよう徹底した研究指導を行います。

◆ 日本語学・日本語教育学分野

国内・海外の高等教育機関で日本語研究、日本語教育研究に従事し、日本語教員の養成に携わることができる高度専門家を育成することによって世界の日本語教育に貢献することを目指しています。具体的には、博士論文の執筆を通して学術研究の能力を伸ばすことに加えて、言語および言語教育一般に関する幅広い知識と深い洞察力、さらには実践的な日本語教育能力を身につけるよう指導します。



II 大学院学生の奨学援助について

本大学院では、次のような奨学援助制度があり、学費への援助、大学院学生の就学環境全般にわたる総合的な支援を行っています。
詳しくは右記からご参照ください。https://www.nufs.ac.jp/faculties/graduate-school/regulations/rule/

1. 奨学金制度

(1) 名古屋外国語大学大学院奨学金

本大学院に在学する学生(但し、外国人留学生を除く)の奨学金で、「名古屋外国語大学大学院奨学金規程」の定めるところによります。本奨学金制度の種別は、特別給付奨学金、一般給付奨学金、貸与奨学金、利息補給奨学金の4種別です。給付奨学金の採用に漏れた場合、貸与奨学金が受給できるよう同時申請が可能です。

(2) 名古屋外国語大学大学院学内推薦入学生奨学金

本大学院学内推薦入学試験により博士前期課程に入学した学生に給付される奨学金で、「名古屋外国語大学大学院学内推薦入学生奨学金規程」の定めるところによります。

種 別	奨学金の金額	採用人員
一般給付奨学金	授業料及び教育充実費の合計の1/2の額	若干名
特別給付奨学金	授業料及び教育充実費の合計額	若干名
貸 与 奨 学 金	授業料及び教育充実費の合計額	若干名
利息補給奨学金	教育ローンの年利息の1/2の額	若干名
学内推薦入学生奨学金	授業料及び教育充実費の合計の1/2の額	該当者 全 員

※採用は、博士前期課程生は在学期間中4回、博士後期課程生は在学期間中6回に限られます。

※英語教授法(TESOL)プログラム生は上記の奨学金を受給できませんが、全員、授業料は25%の減免、教育充実費は50%の減免を受けられます。(在学中4回に限る)

2. 研究援助制度

本大学院学生の研究を奨励・援助するため、「名古屋外国語大学大学院学生の研究費補助に関する規程」により研究費を補助する制度と、本大学院学生の研究活動を奨励し、学修成果をあげるため、「名古屋外国語大学大学院学生の研究旅費補助に関する内規」に

より、学会等において研究発表を行うための研究旅費を補助する制度があります。

3. 私費外国人留学生奨学金制度

本大学院に在学する私費外国人留学生の奨学金制度で、「名古屋外国語大学大学院私費外国人留学生奨学金規程」の定めるところによります。

4. 私費外国人留学生の授業料減免制度

本大学院に在学する私費外国人留学生の経済的負担を軽減し、かつ安心して勉学に専念できるように援助するための授業料減免に関する制度で、「名古屋外国語大学私費外国人留学生の授業料減免に関する規程」の定めるところによります。

5. 長期履修学生制度

長期履修学生制度とは、職業等に従事しながら、個人の事情に応じて、柔軟に標準修業年限の2年を超えて履修し学位等を取得できるようにする制度です。長期履修学生として認められた場合は、修業年限は最長4年で、授業料は2年分のみ納付します(教育充実費は規定どおり納付します)。長期履修を希望する者は、入学時または1年次2月の所定の期日までに「長期履修申請書」等必要書類を提出しなければなりません。本制度が適用される対象は、社会人を対象とする特別入試及び英語・英語教育コース(英語教授法(TESOL)プログラム)入試により博士前期課程に入学または在学する者で、長期履修申請が認められた者となります。

6. T.A.(ティーチング・アシスタント)制度

本大学院学生に教育指導のトレーニングの機会を提供するための制度で、「名古屋外国語大学大学院ティーチング・アシスタント実施要項」の定めるところにより、主に学部授業の教育補助業務を行うことができ、手当が支給されます。

III

教育職員免許状について ―免許状の種類、教科及び必要単位数―

本学大学院前期課程の開講科目のうち、教育職員免許状の教科及び教科の指導法に関する科目または教育の基礎的理解に関する科目を履修することにより、**中学校教諭専修免許状**及び**高等学校教諭**

専修免許状を取得することができます。教員免許状授与の所要資格を取得できる教員免許状の種類、免許教科及び単位数は次のとおりです。

教員免許状の種類	免許教科	必要単位数
中学校教諭専修免許状 高等学校教諭専修免許状	英語	教科及び教科の指導法に関する科目 または教育の基礎的理解に関する科目 から24単位
	国語	

IV

海外留学について ―大学院学生海外留学制度―

1. TESS I（ダブルディグリー）留学

本学と学位取得に関する協定を交わした協定校で留学をすることにより、本学および当該大学の双方から学位を取得する制度です。下の表のとおり、留学にかかる費用は本学からの奨学金でほとんど賄うことができます。なお留学先は天津外国語大学大学院及び大連大学大学院に限られます(2024年2月現在)。

2. TESS II（スタンダード）留学

本学と学生交流協定を締結している外国の大学の大学院課程に、本学の推薦を得て留学する制度です。協定校とは双方が学生を派遣しあうことで築かれた厚い信頼関係があり、安心して学べる環境が確保されています。下の表の通り留学にかかる費用は本学からの奨

学金でほとんど賄うことができます。

3. 交換留学

交換留学とは、学生交流協定を締結している外国の大学の大学院課程に、本学の推薦を得て留学する制度です。留学先の授業料は先方より免除、または本学から支給されます。また下の表の通り規定の奨学金が支給されます。

4. 認定留学

外国の正規の大学院に本学の許可を得て留学する制度です。この制度の最も大きな利点は、学生が留学先をある程度自由に決められることです。留学先大学の学費は自己負担です。下の表の通り規定の奨学金が支給されます。

◇留学制度比較表

名古屋外国語大学留学制度比較表（大学院） ※2024年度募集・2025年度出発用

制度	項目	留学先教育機関	学籍	留学対象学年	単位認定	留学期間	支給対象項目 / 年額奨学金 ※注4)	留学先大学授業料	留学中の本学への学費
TESS 留学 ※注1)	I (ダブルディグリー)	本学とダブルディグリー協定を交わした協定校	在学	2年次 1期以降	15単位 まで ※注5)	1年	居住費、渡航費、保険料、教科書代、ビザ申請料 ※注3)	留学先大学より免除または本学支給	全額納入
	II (スタンダード)	本学と学生交流協定を締結している大学				半年 または 1年	◇奨学金 北中米・ヨーロッパ・オセアニア地域 20万円 アジア地域 10万円 ◇海外旅行傷害保険料	留学先大学より免除または本学支給	
交換留学		本学と学生交流協定を締結している大学					年額20万円～60万円 (地域による) ◇海外旅行傷害保険料	自己負担	
認定留学		海外の学位授与資格のある教育機関、およびその附属機関							
私費留学 ※注2)		問わない	休学	問わない	なし	休学期間内	なし	自己負担	不要

注1) TESSとはTotal Expenses Support System（費用全額支援）の略

注2) 「私費留学」は、本学の留学制度ではないが比較対象のため掲載した。

注3) 居住費：各留学先大学それぞれの標準的な宿舍費を見積もり、支給する。

渡航費：旅行代理店を通して現物支給する。

保険料：海外旅行傷害保険料のほか留学先大学が強制するものや留学ビザ取得に加入が必要なものを支給する。

教科書代：国別の標準金額を支給する。

注4) これら奨学金の財源の一部は、独立行政法人日本学生支援機構（JASSO）海外留学支援制度奨学金による。

注5) 2020年度以前の入学者は10単位まで認定

V

授業科目

博士前期課程

英語・英語教育コース（英語・英語教育プログラム）、日本語・日本語教育コース、グローバルコミュニケーションコース

授 業 科 目 名		サ ブ タ イ ト ル	単 位 数
コ ー ス 共 通 科 目	総 合 研 究 I	研 究 方 法 論	2
	総 合 研 究 II	量 的 研 究 法	2
	総 合 研 究 III	質 的 研 究 法	2
	総 合 研 究 IV	アカデミック・プレゼンテーション	2
	総 合 研 究 V	比 較 教 育 社 会 学	2
	総 合 研 究 VI	比 較 文 化	2
	総 合 研 究 VII	情 報 発 信 の ス キ ル	2
	外国語コミュニケーションI	アカデミック・イングリッシュ	2
	外国語コミュニケーションII	アカデミック・フレンチ	2
	外国語コミュニケーションIII	アカデミック・チャイニーズ	2
	外国語コミュニケーションIV	アカデミック・ジャパニーズ	2
	外国語コミュニケーションV	英 語 通 訳	2
	外国語コミュニケーションVI	英 語 翻 訳	2
	言 語 文 化 研 究 I	文 学 批 評	2
	言 語 文 化 研 究 II	言 語 文 化 史	2
	言 語 文 化 研 究 III	対 照 言 語 学	2
	言 語 文 化 研 究 IV	応 用 言 語 学	2
専 門 教 育 科 目	英 語 学 研 究 I	音 声 学 ・ 音 韻 論	2
	英 語 学 研 究 II	音 声 学 ・ 音 韻 論	2
	英 語 学 研 究 III	統 語 論	2
	英 語 学 研 究 IV	統 語 論	2
	英 語 学 研 究 V	意 味 論 ・ 語 用 論	2
	英 語 学 研 究 VI	意 味 論 ・ 語 用 論	2
	英 語 教 育 法 研 究 I	言 語 習 得 論	2
	英 語 教 育 法 研 究 II	教 育 方 法 論	2
	英 語 教 育 法 研 究 III	外 国 語 学 習 理 論 1	2
	英 語 教 育 法 研 究 IV	外 国 語 学 習 理 論 2	2
	英 語 教 育 法 研 究 V	英語教育と異文化間コミュニケーション	2
	英 語 教 育 法 研 究 VI	英語教育と異文化間コミュニケーション	2
	英 語 圏 文 化 研 究 I	ア メ リ カ の 小 説 と 文 化	2
	英 語 圏 文 化 研 究 II	ア メ リ カ の 小 説 と 文 化	2
	英 語 圏 文 化 研 究 III	イ ギ リ ス 文 化 論	2
	英 語 圏 文 化 研 究 IV	イ ギ リ ス 文 化 論	2
	英 語 圏 文 化 研 究 V	ニ ュ ー ジ ー ラ ン ド 文 化 論	2
	英 語 圏 文 化 研 究 VI	ニ ュ ー ジ ー ラ ン ド 文 化 論	2
	日 本 語 学 研 究 I	日 本 語 学 概 論	2
	日 本 語 学 研 究 II	日 本 語 談 話 研 究	2

授 業 科 目 名		サ ブ タ イ ト ル	単 位 数
専 門 教 育 科 目	日 本 語 学 研 究 III	日 本 語 音 声 学 ・ 音 韻 論	2
	日 本 語 学 研 究 IV	日 本 語 音 声 学 ・ 音 韻 論	2
	日 本 語 学 研 究 V	日 本 語 学 特 論	2
	日 本 語 学 研 究 VI	日 本 語 文 法 論	2
	日 本 語 学 研 究 VII	日 本 語 文 法 論	2
	日 本 語 学 研 究 VIII	日 本 語 語 彙 論	2
	日 本 語 学 研 究 IX	日 本 語 語 彙 論	2
	日 本 語 教 育 学 研 究 I	第 二 言 語 習 得 論	2
	日 本 語 教 育 学 研 究 II	第 二 言 語 習 得 論	2
	日 本 語 教 育 学 研 究 III	日 本 語 教 育 評 価 法	2
	日 本 語 教 育 学 研 究 IV	日 本 語 教 育 評 価 法	2
	日 本 語 教 育 学 研 究 V	日 本 語 教 育 実 践 研 究	2
	日 本 語 教 育 学 研 究 VI	日 本 語 教 育 実 践 研 究	2
	日 本 語 教 育 学 研 究 VII	デ ー タ 分 析 法	2
	日 本 文 化 研 究 I	日 本 文 化 論	2
	日 本 文 化 研 究 II	日 本 文 化 論	2
	日 本 文 化 研 究 III	日 本 文 学 研 究	2
	日 本 文 化 研 究 IV	日 本 文 学 研 究	2
	グローバルスタディーズ研究I	国 際 関 係 と 外 交	2
	グローバルスタディーズ研究II	国 際 マ ク ロ 経 済 と グ ロ ー バ ル ビ ジ ネ ス	2
	グローバルスタディーズ研究III	国 際 政 治 ・ 紛 争 ・ 平 和 構 築	2
	グローバルスタディーズ研究IV	公 共 政 策 と ガ バ ナ ン ス	2
	グローバルスタディーズ研究V	国 際 社 会 と 国 際 法	2
	グローバルスタディーズ研究VI	開 発 と グ ロ ー バ ル イ シ ュ ー	2
	ワールドヒューマニティーズ研究I	グ ロ ー バ ル ヒ ス ト リ ー 研 究	2
	ワールドヒューマニティーズ研究II	多 言 語 多 文 化 研 究	2
	ワールドヒューマニティーズ研究III	宗 教 ・ 民 族 ・ エ ス ニ シ テ ィ	2
	ワールドヒューマニティーズ研究IV	世 界 文 化 と 表 象	2
	ワールドヒューマニティーズ研究V	世 界 文 学 と 批 評	2
	ワールドヒューマニティーズ研究VI	ト ラ ン ス レ ー シ ョ ン 研 究	2
	ワールドヒューマニティーズ研究VII	世 界 の 宗 教 と 文 化	2
	情報コミュニケーション研究I	ジャーナリズム・メディア論	2
	情報コミュニケーション研究II	情 報 シ ス テ ム と A I	2
	情報コミュニケーション研究IV	ス ピ ー チ ・ プ レ ゼ ン テ ー シ ョ ン	2
	情報コミュニケーション研究V	英 語 通 訳 ス キ ル	2
	情報コミュニケーション研究VI	中 国 語 通 訳 ス キ ル	2
研 究 指 導			

英語・英語教育コース（英語教授法（TESOL）プログラム）

授 業 科 目 名		サ ブ タ イ ト ル	単 位 数
専門教育科目	英語教育法研究Ⅰ	Second Language Acquisition	2
	英語教育法研究Ⅱ	Second Language Teaching	2
	英語教育法研究Ⅲ	Materials Development and Classroom Dynamics	2
	英語教育法研究Ⅳ	Teaching English to Young Learners	2
	英語教育法研究Ⅴ	Action Research 1	2
	英語教育法研究Ⅵ	Action Research 2	2
	英語教育法研究Ⅶ	Curriculum Design 1	2
	英語教育法研究Ⅷ	Curriculum Design 2	2
	英語教育法研究Ⅸ	Learner Autonomy	2
	英語教育法研究Ⅹ	Cross-Cultural Communication	2

授 業 科 目 名		サ ブ タ イ ト ル	単 位 数
専門教育科目	英語教育法研究Ⅺ	Discourse Analysis	2
	英語教育法研究Ⅻ	Sociocultural Theory	2
	英語教育法研究Ⅼ	Introduction to Action Research Methods	2
	英語教育法研究Ⅽ	Language Assessment	2
	英語教育法研究Ⅾ	Qualitative Research Methods	2
	英語教育法研究Ⅿ	Introduction to Language Learning Motivation	2
	英語教育法研究ⅰ	Introduction to Quantitative Research Methods	2
	英 語 学 研 究 Ⅰ	Phonetics & Phonology	2
	英 語 学 研 究 Ⅱ	Morphology & Syntax	2
研 究 指 導			

博士後期課程

〈各分野共通〉

授 業 科 目 名	単位数	1期	2期	担 当 教 員	修 得 単 位 数	備 考
特 殊 講 義 Ⅰ	2	○		指 導 教 授 (個別指導)	2科目／4単位	・ 原則として1年次に履修
特 殊 講 義 Ⅱ	2		○			
研 究 指 導	0	○	○			・ 博士候補資格未取得者が每学期履修
論 文 指 導	0	○	○			・ 博士候補資格取得者が每学期履修

VI 教員略歴一覧

専任教員略歴

亀山 郁夫 学 長 文学修士	●専門／ロシア文学、ロシア文化論、表象文化論 ●研究テーマ／ロシアアヴァンギャルド芸術、スターリン時代文化論、ドストエフスキーを中心とする19世紀ロシア文学、ロシア音楽論、現代日本文学 ●略歴／東京外国語大学外国語学部ロシア語学科卒業。同大学大学院外国語学研究科スラブ系言語専攻修了後、東京大学大学院人文科学研究科博士課程単位取得退学。天理大学外国語学部助手、講師、助教授、同志社大学法学部助教授、東京外国語大学助教授、教授、同大学長を経て、2013年4月より本学教授、学長に就任。ワールドリベラルアーツセンター長。
早津 恵美子 教 授 博士(文学)	●専門／日本語学、現代日本語文法研究 ●研究テーマ／使役を中心とするヴォイス、文法と語彙の相関 ●略歴／京都大学教育学部教育心理学専攻卒業、東京外国語大学大学院外国語学研究科修士課程(日本専攻)修了、京都大学大学院文学研究科博士後期課程(言語学専攻)研究指導認定退学後、2006年学位取得。東京外国語大学外国語学部講師、助教授、教授、同大学大学院総合国際学研究院教授、同国際日本学研究院教授を経て、2020年4月本学教授、国際コミュニケーション研究科長に就任。2023年4月より国際日本学科長兼務。
伊藤 達也 教 授 Ph.D.(言語科学)	●専門／フランス言語学、意味論 ●研究テーマ／日仏対照言語学、語彙意味論、意味構築における語彙と文脈の相互作用、翻訳論 ●略歴／慶應義塾大学文学部文学科フランス文学専攻卒、パリ第3大学(ソルボンヌ・ヌーヴェル)に塾派遣交換留学生として留学、パリ第7大学言語学科修士課程修了、慶應義塾大学大学院修士課程仏語仏文学専攻修了。フランス政府給費留学生。パリ第7大学言語学科 DEA、パリ第10大学言語学科博士課程修了。2003年パリ第10大学言語科学博士。2005年本学助教授に就任、2016年より教授。国際教育連携推進機構副機構長。学長特別補佐。2022年4月よりフランス語学科長。
上田 功 教 授 博士(文学)	●専門／音声学・音韻論 ●研究テーマ／音韻獲得と構音障害、成人の外国語訛り、商標登録と音韻 ●略歴／大阪外国語大学大学院外国語学研究科英語学専攻修了。京都大学博士(文学)。静岡大学助教授、大阪外国語大学教授、米国インディアナ大学言語学科・音声言語医学科客員研究員(フルブライト交換研究員)、大阪大学大学院言語文化研究科教授を経て、2018年4月本学外国語学部 英米語学科教授。言語教育開発センター長、英米語学科長。大阪大学名誉教授、大阪大学・金沢大学・浜松医科大学・千葉大学・福井大学連合大学院小児発達学研究科招聘教授。
梅垣 昌子 教 授 修士(文学)	●専門／アメリカ文学、アメリカ文化 ●研究テーマ／アメリカ南部文学、アメリカ南部大衆文化、文学と老いの表象 ●略歴／京都大学大学院文学研究科英語学英米文学専攻博士後期課程単位取得後退学。2009年、フォークナー研究所(サウスイーストミズーリ州立大学)およびミシシッピ大学派遣研究員。2014年より本学外国語学部英米語学科教授。副学長、教学マネジメント推進室長。
エリス 俊子 教 授 Ph.D.(文学)	●専門／文学 ●研究テーマ／日本近代詩、モダニズム ●略歴／東京大学大学院人文科学研究科比較文学比較文化専門課程修士課程修了。同総合文化研究科比較文学比較文化博士課程満期退学。Ph.D.(Monash University)。モナッシュ大学人文学部日本研究科・専任講師、東京大学大学院総合文化研究科・助教授、同教授、2021年4月本学教授、世界教養学部長に就任。東京大学名誉教授。

大岩 昌子 教授 博士(学術)	●専門／ 音声学、第二言語習得 ●研究テーマ／ 言語のプロソディ習得、脳の言語機能 ●略歴／ 名古屋大学大学院国際開発研究科博士後期課程修了。岡崎国立共同研究機構生理学研究 所統合生理研究施設講師(COE 非常勤研究員)などを経て、2001年本学外国語学部フ ランス語学科助教授に就任、2013年より本学教授。言語教育開発センター副センター長。
大橋 保明 教授 修士(教育学)	●専門／ 教育学、教育社会学 ●研究テーマ／ コミュニティ・スクールの制度研究、防災教育・学習の事例研究 ●略歴／ 大阪大学大学院人間科学研究科博士後期課程単位取得退学。名古屋女子大学文学部専 任講師、いわき明星大学人文学部准教授、福岡県立大学大学院等の非常勤講師を経て、 2012年本学准教授に就任、2020年より本学教授。教職センター長。
岡田 新 教授 法学修士	●専門／ イギリス現代政治史 ●研究テーマ／ 自由党の再生と凋落 ●略歴／ 早稲田大学政治経済学部政治学科卒業。名古屋大学大学院法学研究科博士前期課程修 了。大阪外国語大学外国語学部英語専攻助手／講師／准教授。大阪大学外国語学部教授。 大阪大学大学院言語文化研究科言語社会専攻長。大阪大学大学院言語文化研究科研究 科長。名古屋外国語大学外国語学部英米語専攻専攻長。
甲斐 清高 教授 博士(文学)	●専門／ イギリス文学 ●研究テーマ／ 19世紀イギリス小説、イギリス文化、比較文学、物語論 ●略歴／ 京都大学文学部卒業(英語学英文学専攻)。京都大学大学院文学研究科修士課程修了(英 語学英米文学専攻)。英国ダラム大学英文科修了。京都大学大学院文学研究科博士後期課 程認定修了。2003年本学講師に就任、現在同大学教授。2022年3月まで教養教育推進センター 副センター長。2022年4月より同センター長。
川原 功司 教授 Ph.D. in Linguistics	●専門／ 統辞論、意味論、語用論 ●研究テーマ／ 究極的な目標は、人間言語に固有の回帰的統語演算能力の仕組みと、それがどうやって概念・ 意図システムと関わりを持つのかを比較生物学的な視点から解明すること。個別的には、原型 レキシコン仮説に基づく統辞構造や意味の分析、およびその語用論上の役割。 ●略歴／ ワシントン大学言語学科留学(文部省短期留学推進制度)終了(2001年)。大阪大学文学部 英米文学英語学専修 修了(2002年)。大阪大学大学院文学研究科文化表現論英語学専 修 博士前期課程修了(2004年)。連合王国ヨーク大学言語学科 博士課程修了(2010年)。 2013年4月本学英米語学科准教授に就任、現在教授。
木村 茂雄 教授 修士(文学)	●専門／ 英語圏文学、ポストコロニアル研究、カルチュラル・スタディーズ ●研究テーマ／ 言語文化とグローバリゼーション ●略歴／ 東京大学文学部(語学文学)卒業、東京大学大学院人文科学研究科英語英文学専門課程 修了、東京大学大学院人文科学研究科英語英文学専門課程第1種博士課程退学、大阪 大学言語文化部助手、同講師、同助教授、同教授、大阪大学大学院言語文化研究科教授、 同研究科長、大阪大学マルチリンガル教育センター長、2020年4月本学教授に就任。2021年 4月より現代英語学科長。
ドゥエイン・ キント 教授 Ph.D.(応用言語学)	●専門／ Language learning pedagogy, Classroom dynamics and materials design ●研究テーマ／ Tools for increasing proficiency in speaking, A complex systems view of course design, Increasing autonomy with recorded conversations, computer learner corpora ●略歴／ レスブリッジ大学卒業、SIT 大学院修士課程修了、パーミンガム大学大学院博士課程修了。 南山大学助手を経て、2001年本学現代国際学部講師就任。現在教授。
近藤 有美 教授 博士(学術)	●専門／ 日本語教育学 ●研究テーマ／ 実践研究、協働学習、談話分析 ●略歴／ 名古屋大学大学院国際開発研究科国際コミュニケーション専攻博士後期課程修了。啓明大 学校(韓国・大邱)国際学部日本学科招聘講師、長崎外国語大学国際コミュニケーション学 科特任講師を経て、2012年本学准教授に就任、2016年より教授。

佐藤 一嘉 教 授 Ph.D.(応用言語学)	●専 門／ 外国語教授法、教員養成 ●研究テーマ／ カリキュラム改革と教師教育、アクション・リサーチ、学習ストラテジーと第二言語習得 ●略 歴／ 名古屋大学教育学部卒業。クイーンズランド大学(オーストラリア)にて、M.A.、Ph.D.(応用言語学)を取得。クイーンズランド大学、グリフィス大学(オーストラリア)、南山大学、名古屋大学講師を経て、2000年本学助教授に就任、2008年より教授。
佐藤 都喜子 教 授 Ph.D.(学術)	●専 門／ 国際協力/国際開発、リプロダクティブヘルス、女性のエンパワメント ●研究テーマ／ 女性のエンパワメントと行動変容 ●略 歴／ 津田塾大学国際関係学科入学、ミネソタ州立大学に編入・卒業。ハワイ州立大学大学院修士・博士課程修了。学術博士。米国立東西センター人口研究所奨学生、国際協力機構国際協力専門員などを経て、2013年4月本学教授に就任、現在副学長、国際教養学科長。
鈴木 茂 教 授 (国際学修士)	●専 門／ 歴史学・ブラジル研究 ●研究テーマ／ ブラジルの黒人史、大西洋奴隷貿易、歴史教育 ●略 歴／ 東京外国語大学外国語学部卒業、東京外国語大学大学院地域研究研究科(修士課程)修了、一橋大学大学院社会学研究科博士後期課程2年中退。東京外国語大学外国語大学助手、講師、同助教授を経て教授。組織改編によって大学院国際学研究院教授。2019年3月退職(名誉教授)後、同年4月、名古屋外国語大学世界共生学部教授に就任。2021年4月より同学部長。
高梨 芳郎 教 授 教育学修士 Ed.D.(応用言語学・英語教授法)	●専 門／ 英語科教育の研究 ●研究テーマ／ 英語教育における動機づけ・学習方略と指導法・評価の研究 ●略 歴／ 東京大学大学院教育学研究科博士課程単位取得退学。英レスター大学大学院博士課程修了。福岡教育大学教授、同大学院教育学研究科教授を経て、福岡教育大学名誉教授。2013年2月より本学教授に就任。英米語学科長を経て、2022年3月まで外国語学部長。現在副学長、IR 推進本部長。
田地野 彰 教 授 Ph.D.(言語学)	●専 門／ 教育言語学、英語教育 ●研究テーマ／ 言語教育へのシステムズアプローチ(EAP、教育文法、英語教授法開発など) ●略 歴／ 連合王国ランカスター大学大学院言語学・現代英語研究科博士課程修了。Ph.D. 取得。京都大学国際学術言語教育センター教授(センター長)および大学院人間・環境学研究科教授を経て、2018年4月本学教授に就任。2022年4月より外国語学部長。京都大学名誉教授。一般社団法人大学英語教育学会(JACET)特別顧問。
長畑 明利 教 授 修士(文学)、MA	●専 門／ アメリカ文学・文化 ●研究テーマ／ エズラ・パウンド、モダニズム詩、革新的詩文学と翻訳、アメリカ文学における多文化社会の表象 ●略 歴／ 東京外国語大学外国語学部英米語科卒業。ニューヨーク州立大学オールバニー校英語学部修士課程修了。東京外国語大学外国語学研究科ゲルマン系言語専攻課程(修士課程、英語学)修了。名古屋大学総合言語センター講師、同助教授、同大学言語文化部助教授、同大学国際言語文化研究科助教授、同教授、同大学人文学研究科教授、副研究科長。2024年3月退職(名誉教授)後、同4月本学世界教養学部教授。
沼野 充義 教 授 修士(文学)	●専 門／ ロシア東欧文学、近現代日本文学、比較文学・世界文学論、翻訳論 ●研究テーマ／ 亡命文学、ユートピア文学、世界文学論 ●略 歴／ 東京大学教養学部ロシア語教室専任講師、同助教授、東京大学文学部スラヴ文学研究室助教授、ロシア国立大学アジア・アフリカ研究所客員教授、東京大学大学院人文社会系研究科教授、2020年4月本学教授、副学長、教養教育推進センター長に就任(2022年3月まで)。東京大学名誉教授。
船越 達志 教 授 博士(文学)	●専 門／ 中国文学 ●研究テーマ／ 『紅樓夢』 ●略 歴／ 広島大学大学院文学研究科中国語学中国文学専攻博士後期課程修了。博士(文学)。1999年4月本学講師に就任、現在教授。2023年4月より中国語学科長。

古村 由美子 教授 博士(比較社会文化)	●専門／ 英語教育、異文化間コミュニケーション、語用論 ●研究テーマ／ 異文化対応力測定テスト開発、異文化対応力育成教材開発 ●略歴／ 西南学院大学文学部外国語学科英語専攻卒業。福岡教育大学大学院教育学研究科修士課程英語教育専攻修了。九州大学大学院比較社会文化研究科博士後期課程国際社会文化専攻単位取得退学。2021年4月本学教授に就任。2022年4月より英語コミュニケーション専攻長。
真家 陽一 教授	●専門／ 中国経済 ●研究テーマ／ 中国のマクロ経済および産業政策、日本企業の対中ビジネス戦略 ●略歴／ 1985年青山学院大学経営学部卒業。銀行系シンクタンク等を経て、2001年日本貿易振興会(ジェトロ、現・日本貿易振興機構)入会。海外調査部中国北アジア課上席課長代理を経て、2004年4月北京事務所次長(調査担当)。2009年1月海外調査部中国北アジア課長。2014年4月より再度、調査担当次長として北京事務所に勤務。2016年9月より本学教授に就任。2022年4月より学生支援センター長。
八木 久美子 教授 Ph.D.(宗教学)	●専門／ 宗教学、イスラム研究 ●研究テーマ／ 近現代のイスラム、アラブ世界の宗教 ●略歴／ 東京外国語大学外国語学部アラビア語学科卒業、東京大学大学院人文科学研究科修士課程(宗教学宗教史学専攻)修了、ハーバード大学文理大学院(宗教学専攻)修了、博士論文提出資格取得、2001年学位取得。東京外国語大学外国語学部助手、助教授、教授、同大学大学院総合国際学研究院教授を経て、2024年4月本学教授。東京外国語大学名誉教授。
楊 紅雲 教授 博士(学術)	●専門／ 日本映画、中国映画、日中翻訳通訳 ●研究テーマ／ 日中映画産業、映像政策 ●略歴／ 西安映画撮影所(中国)合作業務担当・所長補佐。名古屋大学国際言語文化研究科国際多元文化専攻博士後期課程修了、博士(学術)。名城大学、中京大学および本学の非常勤講師を経て、2022年4月より本学中国語学科教授に就任、現在に至る。
劉 綺紋 教授 博士(言語文化学)	●専門／ 台湾語学、中国語学 ●研究テーマ／ 台湾語の認知的な研究 ●略歴／ 大阪大学大学院言語文化研究科博士後期課程修了。大阪大学、平安女学院大学、岐阜経済大学などの非常勤講師を経て、2006年より本学助教授に就任、現在教授。
林 慶雲 教授 M.B.A.	●専門／ 管理会計、国際財務管理 ●研究テーマ／ 企業結合とそれに関する財務、会計問題 ●略歴／ Dalhousie 大学(カナダ)の Business School 修了。名古屋大学大学院経済学研究科博士課程。名古屋大学経済学部助手、名古屋文理大学情報文化学部助教授を経て、2007年本学グローバルビジネス学科准教授に就任、2009年より教授。2023年4月よりグローバルビジネス学科長。
高瀬 淳一 特任教授 政治学修士	●専門／ 政治学、国際関係論 ●研究テーマ／ 政治コミュニケーション(情報政治学、首脳外交論) ●略歴／ 早稲田大学大学院政治学研究科博士課程単位取得退学、1994年本学講師に就任、准教授、教授を経て、2017年4月から2019年3月まで世界共生学部長。2019年4月から2024年3月までグローバル共生社会研究所長。
岩佐 一枝 准教授 博士(文学)	●専門／ 言語学、文献学、少数民族言語(彝語) ●研究テーマ／ 彝語現代方言の記述・分析、彝語文献の整理・解読 ●略歴／ 神戸市外国語大学大学院にて修士号、博士号取得。中国中央民族大学大学院 博士課程(彝語系)にて彝語文献学を専攻。フランス高等研究実習院客員研究員、パリ第三大学大学院博士課程(言語学科)満期退学。神戸市外国語大学非常勤講師、フランス国立科学研究センター LACITO 研究員、日本学術振興会特別研究員 PD, RPD。2020年4月より本学准教授に就任。

近藤 行人 准教授 博士(文学)	●専門／日本語教育学 ●研究テーマ／異文化間レトリック研究、日本語教育実践研究、専門日本語教育 ●略歴／中京大学文学部心理学科卒業。名古屋大学国際言語文化研究科日本言語文化専攻にて修士課程を修了、博士(文学)。主な職歴はタシケント国立東洋学大学日本語講座講師、名古屋大学特任講師(在ウズベキスタン日本法教育研究センター)、名古屋学院大学及び名古屋大学非常勤講師、名古屋学院大学留学生別科講師等。2019年4月本学国際日本学科准教授に就任。
後藤 希望 准教授 修士(マス・コミュニケーション学)	●専門／メディア論、メディア史、メディアのコンテンツ分析 ●研究テーマ／メディア・イベントとスポーツ、オリンピックとナショナリズム、3.11とメディア・コンテンツ、NHKとデジタルコンテンツ、映像と音楽、ハリウッド映画の変遷：120年の歴史と日本人、SF 宇宙映画の変遷、ディズニー映画とジェンダー。 ●略歴／ECC 外語学院入社、金山校勤務、ECC 外語学院中部管区本部、教育課勤務、株式会社中日映画社入社、制作部勤務、名古屋外国語大学 TTSS 講師、名古屋外国語大学現代国際学部非常勤講師、2013年4月より本学専任勤務講師、同准教授。
斎藤 紬 准教授 博士(国際関係)	●専門／日韓比較文化、日韓関係、歌謡研究 ●研究テーマ／韓国における民衆歌謡の伝承性、集団空間における音の機能性、韓国労働歌謡、日韓大衆文化 ●略歴／日本大学大学院国際関係研究科博士後期課程修了。博士(国際関係)。韓国・新羅大学校助教授を経て、2015年4月本学外国語学部日本語学科(現、世界教養学部国際日本語学科)助教に就任、2019年4月より准教授。
サイモン・J. ハンフリー 准教授 M.Phil.(応用言語学) M.Phil.(教育学) M.A.(TEFL)	●専門／Applied Linguistics, Educational Psychology ●研究テーマ／Sociocultural Theory with a particular focus on how the tenets of activity theory, dynamic assessment, and cognitive mediation play out through the course of dialogical interaction. ●略歴／マセイ大学卒業、バーミンガム大学大学院 TEFL 修士課程修了、ケンブリッジ大学大学院英語学応用言語学博士課程修了、ケンブリッジ大学大学院教育学博士課程修了。名古屋外国語大学招聘教員を経て、2008年本学准教授に就任。
ジェレヴィーニ・アレッシンドロ・ジョヴァンニ 准教授 Ph.D.(学術)	●専門／現代日本文学 ●研究テーマ／現代日本文学、越境文学、翻訳論、比較文化、表象文化論、外国語教育 ●略歴／イタリア・ヴェネツィア大学東洋言語・東洋文学学科(日本語・日本文学専攻)卒業後、東京大学大学院総合文化研究科超域文化科学専攻(表象文化論コース)博士課程修了。東京藝術大学助教、早稲田大学准教授等を経て、2020年本学准教授に就任、現在に至る。
高橋 直子 准教授 Ph.D.(言語学)	●専門／語彙意味論、英語教育 ●研究テーマ／動詞の意味構造、英語ライティング研究 ●略歴／ミンガン州立大学言語学科修士課程修了、M.A. 取得。ハワイ大学言語学科博士課程修了、Ph.D. 取得。ハワイ大学、本学、相山女学園大学、中部大学、中京大学などの非常勤講師を経て、2011年より本学英語教育学科(現、英米語学科英語教育専攻)専任講師に就任。2021年より准教授。
鶴本 花織 准教授 博士(社会学)	●専門／日文化社会学、メディア、ジェンダー、日本研究 ●研究テーマ／まちづくり活動、災害ボランティア、日本の近代化、University of London ●略歴／国際基督教大学教養学部社会科学科卒業、サセックス大学大学院修士課程メディア・スタディーズ専攻修了、ロンドン大学大学院博士後期課程社会学専攻修了、慶応大学環境情報学部非常勤講師、早稲田大学国際教養学部非常勤講師、名古屋外国語大学現代国際学部専任講師を経て、2009年4月より名古屋外国語大学現代国際学部准教授に就任。

中北 美千子 准教授 修士(文学) Ph.D. (コミュニケーション科学)	●専 門／ 日本語学、コミュニケーション科学 ●研究テーマ／ 話し言葉の理解課程、談話参加者のストラテジー、言語発達 ●略 歴／ 東京都立大学人文学部文学科国文学専攻卒業、日本女子大学大学院文学研究科日本語日本文学専攻博士課程後期単位取得退学、テキサス大学ダラス校大学院認知・行動科学研究科博士課程修了。国立国語研究所 PD フェロー・非常勤研究員のほか、群馬大学、明海大学、中央学院大学、東京学芸大学、北里大学などの非常勤講師を経、2017年4月より、本学国際日本語学科准教授に就任。
ヤコブ E・マルシャレンコ 准教授 博士(英語学・英語教育学)	●専 門／ 通訳翻訳論 ●研究テーマ／ 司法通訳翻訳(法廷通訳翻訳)、日英の違いによる通訳翻訳の正確性への影響、通訳者の役割 ●略 歴／ ポーランド・ワルシャワ大学大学院東洋学研究所修士課程修了(日本語日本文化専攻)。大阪大学大学院人間科学研究科修士課程修了(グローバル人間学)。名古屋外国語大学国際コミュニケーション研究科博士後期課程修了(英語学・英語教育学)。2019年4月本学世界教養学部国際日本学科専任講師に就任、2024年4月より同学科准教授。
ケビン・オットソン 講師 EdD(Educational Leadership)	●専 門／ TESOL、Intercultural Competence, Collaborative Online International Learning (COIL) ●研究テーマ／ Study Abroad, Intercultural Competence, COIL. ●略 歴／ 南山大学、名古屋女子大学講師を経て、2022年4月本学英米語学科講師に就任。He holds an MA in TESOL from Nagoya University of Foreign Studies and an EdD in Educational Leadership from the University of New England. His research interests include study abroad, intercultural competence, and COIL.

兼任講師(非常勤教員)略歴

浅野 輝子 兼任講師	●専 門／ 司法・医療通訳論、通訳教育論 ●研究テーマ／ 自治体による医療通訳者養成と活用：〈あいち医療通訳システム〉検証と全国モデル構築 ●略 歴／ 南山大学文学部英文学科卒業。ISS 同時通訳養成コース(3年)修了。フリーランス通訳として国際会議同時通訳、国賓、産業界トップの通訳を務める。名古屋地方裁判所、高等裁判所法廷通訳人。「あいち医療通訳システム」推進協議会副会長。医療通訳養成専門家会議委員。家庭裁判所調停委員を歴任。2008年度より本学助教授を経て教授就任。2019年4月より2021年3月まで本学特任教授。2018年4月より本学名誉教授。
マシュー・アップル 兼任講師 Doctor of Education	●専 門／ Curriculum, Instruction, Technology, and Education in TESOL ●研究テーマ／ L2 motivation, CALL, and intercultural communication competence ●略 歴／ Temple University (米国)にて Ed.D. 取得。姫路獨協大学常勤教師、同志社大学言語文化教育研究センター講師、国立奈良工業高等専門学校講師を経て、現在、立命館大学文学部教授。Matthew T. Apple is professor of international studies and English communication in the College of Letters, Ritsumeikan University, Kyoto, Japan. He has an MFA (Creative Writing) from the University of Notre Dame, USA, and an MEd and EdD (Curriculum, Instruction, Technology, and Education in TESOL) from Temple University, USA. His SLA research interests include L2 motivation, CALL, and intercultural communication competence.
籠宮 隆之 兼任講師 博士(学術)	●専 門／ 音声学、コーパス言語学、感性情報処理 ●研究テーマ／ プロソディ、パラ言語情報、音声科学の工学的応用 ●略 歴／ 東京都立大学大学院人文科学研究科国文学専攻修士課程修了。神戸大学大学院総合人間科学研究科コミュニケーション科学専攻博士後期課程修了。国立国語研究所特別奨励研究員、産業技術総合研究所特別研究員等を経て、現在、国立国語研究所特任助教。

ハーン・グエン 兼任講師 Ph.D, English (English Language and Linguistics)	●専門／ English Language and Linguistics ●研究テーマ／ Conversation Analysis, Interactional Competence, Classroom Discourse ●略歴／ University of Hué (ベトナム) 講師、University of Wisconsin-Madison (米国) 講師等を経て、University of Wisconsin-MadisonにてPh.D.取得。現在、Hawaii Pacific University (米国) 教授。Hanh thi Nguyen is Professor of Applied Linguistics in the TESOL Program at Hawaii Pacific University and affiliate faculty member at the Department of Second Language Studies, University of Hawaii at Manoa. She received her PhD and MA in English Language and Linguistics from the University of Wisconsin-Madison, and her BA in Teaching English as a Foreign Language from Hue University, Vietnam. Her research interests are the development of interactional competence in a second or professional language, classroom discourse, learner identities, and Vietnamese applied linguistics.
ロバート・クレインソナー 兼任講師 Ph.D.(応用言語学)	●専門／ PhD - Sociology of Teachers and Teaching, Second Language Acquisition and Teacher Education; MA - German Literature and Foreign Language Pedagogy; BA - German, Elementary Education, Secondary Education ●研究テーマ／ Second Language Teacher's Beliefs and Perceptions, Second Language Teaching and Learning ●略歴／ アリゾナ大学(アメリカ)にてMA、イリノイ大学にてPh.D取得。メンフィス大学大学院(アメリカ)准教授、クイーンズランド大学大学院(オーストラリア)講師を経て、現在アリゾナ州立大学大学院助教授。AILA Review, The Modern Language Journal, Foreign Language Annals, Teaching and Teacher Education An International Journal of Research and Studies, Teachers and Teaching : Theory and practice 等に論文を発表。
高村 美也子 兼任講師 博士(文学)	●専門／ 文化人類学、社会言語学、スワヒリ語 ●研究テーマ／ スワヒリ農村社会埋葬文化、滞日アフリカ人の死の問題 ●略歴／ 中部大学国際関係学部国際文化学科卒業、大阪外国語大学大学院言語社会研究科地域言語社会専攻修士課程修了、名古屋大学大学院文学研究科人文学専攻博士前期課程修了、名古屋大学大学院文学研究科人文学専攻博士後期課程修了、現在南山大学人類学研究所研究員。フリーランスとしてスワヒリ語の裁判所等の通訳を務める。
富安 由紀子 兼任講師 修士(芸術)	●専門／ ユーザーインターフェイスデザイン、アイデンティティデザイン ●研究テーマ／ 道具のインターフェイスデザイン、ヒューマンセンタードデザイン、集団のアイデンティティとビジョンデザイン、ウェルビーイングとデザイン ●略歴／ 愛知県立芸術大学美術学部デザイン専攻卒業。同大学院美術研究科デザイン専攻修了。株式会社 GK グラフィックス勤務後、フリーランスとして tmgrf(トミグラフ) 主宰。デザイン実務と並行して2012年より名古屋学芸大学准教授、現在同大学教授、同大学院教授。
奈良 雅美 兼任講師 博士(学術)	●専門／ 国際社会学、国際関係学、ジェンダー論、NPO 論 ●研究テーマ／ 多文化社会におけるジェンダー ●略歴／ 松蔭女子学院大学英語学科卒業、大阪大学法学部卒業、神戸大学大学院国際協力研究科博士課程修了(博士(学術))。神戸大学大学院、関西学院大学、大東文化大学などにおいて非常勤講師。実践においてはアジア女性支援のNPO 法人代表理事、中間支援組織でコーディネーター、NPO 支援など。

アリソン・ハセガワ 兼任講師 修士(TEYL)	●専門／ Teaching English to Young Learners ●研究テーマ／ Teaching English to Young Learners, Curriculum Design, Developing Social-Emotional Skills and Intercultural Awareness in Young Learners Through a Picturebook Read-Aloud. ●略歴／ 宮城教育大学・特任教授を経て、現在は立教大学・特任教授と創価大学大学院 TESOL プログラム講師。Alison holds an MA, in Teaching English to Young Learners, from the University of York, UK. From 2012-2022 she oversaw various courses designed to prepare undergraduates to become English teachers in Japanese primary schools as a Specially Appointed Professor at Miyagi University of Education in Sendai. She is now a Specially Appointed Professor at Rikkyo University, Tokyo, teaching various courses including those on using picturebooks in young learner second language education. Alison was on the development team for the MEXT materials; Let's Try 1 & 2, and You Can 1& 2, which were used in primary schools all over Japan and took part in a JICA project to create a new primary English curriculum and materials for the Myanmar Education Department.
平山 恵 兼任講師 M.A.	●専門／ 社会開発、保健政策、平和学 ●研究テーマ／ トランジション・タウン運動、健康自立 ●略歴／ School for International Training, 筑波大学人間総合科学研究科修了。世界保健機構、NGO アーユス、筑波大学社会医学系医学社会学研究室専任講師、結核研究所等勤務を経て2005年明治学院大学国際学部助教授。現在同大教授。
ダニエル・フーパー 兼任講師 Ph.D. (英語学・英語教育学)	●専門／ TESOL, Educational Psychology, Sociocultural Theory ●研究テーマ／ Group Dynamics, Communities of Practice, Learner Autonomy, Teacher and Learner Identity ●略歴／ Daniel Hooper holds a PhD in English Linguistics and English Pedagogy from Nagoya University of Foreign Studies. He is currently an associate professor in the Department of English Communication at Tokyo Kasei University. He has been teaching in Japan for 18 years in a variety of contexts including primary/secondary schools, English conversation schools, and universities. His research interests include teacher and learner identity, reflective practice, self-access learning communities, and communities of practice.
ドミニク・ヴォラ 兼任講師 Ph.D.(応用言語学)	●専門／ Learner Autonomy ●研究テーマ／ Learner Autonomy, Self-Access Language Learning, Positive Psychology ●略歴／ 神田外国語大学講師。She holds a PhD in applied linguistics, focusing on fostering learner autonomy in an EFL context (Victoria University of Wellington, New Zealand) and a Master of Education in TESOL (State University of New York at Buffalo, US). She is a co-managing editor of the Research Institute for Learner Autonomy Education's Relay Journal. She has a particular interest in learner autonomy, self-access language learning, advising in language learning, and positive psychology in education.
牧野 由美 兼任講師 修士(日本語・日本語教育学)	●専門／ 日本語教育学、日本語学 ●研究テーマ／ 日本語の発話行為 ●略歴／ 筑波大学第二学群日本語・日本文化学類卒業。名古屋外国語大学大学院博士前期課程修了。名古屋外国語大学大学院博士後期課程満期退学。2002年より本学講師。
山形 英郎 兼任講師 LL.M. 法学修士	●専門／ 国際法 ●研究テーマ／ 紛争の平和的解決、国連集団安全保障 ●略歴／ 静岡大学人文学部法学科卒業。京都大学大学院法学研究科博士課程満期退学(法学修士)。シェフィールド大学法学部修士課程修了(LL.M.)。岡山商科大学法経学部法学科講師、立命館大学国際関係学部助教授・教授を経て、名古屋大学大学院国際開発研究科教授。

コース別教員一覧

コ ー ス	職 位	氏 名
学長	教 授	亀山 郁夫
研究科長	教 授	早津 恵美子
英語・英語教育コース		
(英語教育プログラム)		
代表	教 授	古村 由美子
	教 授	上田 功
	教 授	梅垣 昌子
	教 授	岡田 新
	教 授	川原 功司
	教 授	高梨 芳郎
	教 授	田地野 彰
	准教授	サイモン・ハンフリー
(英語教授法 (TESOL) プログラム)		
代表	教 授	佐藤 一嘉
	教 授	ドゥエイン・キント
	准教授	高橋 直子
	講 師	ケビン・オットソン
日本語・日本語教育コース		
代表	准教授	近藤 行人
	教 授	エリス 俊子
	教 授	近藤 有美
	教 授	早津 恵美子
	准教授	齋藤 絢
	准教授	中北 美千子
	准教授	ヤコブ・マルシャレンコ

コ ー ス	職 位	氏 名
グローバルコミュニケーションコース		
代表	教 授	鈴木 茂
	教 授	伊藤 達也
	教 授	大岩 昌子
	教 授	大橋 保明
	教 授	甲斐 清高
	教 授	木村 茂雄
	教 授	佐藤 都喜子
	教 授	長畑 明利
	教 授	沼野 充義
	教 授	船越 達志
	教 授	真家 陽一
	教 授	八木 久美子
	教 授	楊 紅雲
	教 授	劉 綺紋
	教 授	林 慶雲
	特任教授	高瀬 淳一
	准教授	アレッサンドロ・ジェレヴィーニ
	准教授	岩佐 一枝
	准教授	後藤 希望
	准教授	鶴本 花織

※入学志願票の「希望する指導教授」欄には、志望するコース、プログラムの教員を記載すること

博士前期課程

英語・英語教育コース（英語・英語教育プログラム）、
日本語・日本語教育コース、
グローバルコミュニケーションコース

【コース共通科目】

前期課程 総合研究Ⅰ
1期 研究方法論

複数教員制

佐藤 一嘉 他

授業概要並びに到達目標

授業概要：

学術論文を書くためには、先行研究の理論や思考法を学修するだけでなく、自ら設定した研究テーマについて関連するデータを分析し論理的な構成に従って記述する力が必要である。本授業では、心得ておくべき基本的な研究姿勢、および修士論文作成の準備段階から執筆までの研究過程における基本的事項について学ぶ。

到達目標：

- ① 学術論文とは何かについて認識を深める。
- ② 研究における不正行為とは何かを理解する。
- ③ 適正な引用の仕方を会得する。
- ④ 学修した論文作成の手法を、自分の研究課題に応用することができる。

※ Google classroom に授業サイト「【院】研究方法論(2024-1 木1)」を設け、授業に関する連絡、資料や課題の提示等に使用する。初回授業の前日までに、履修登録者の nufs のメールアドレス宛に Google Classroom の招待メールを送るので、各自でアクセスして準備すること。

授業計画

1. オリエンテーション・研究計画と研究倫理概要(佐藤一嘉)(オンライン)
2. 言語教育の分野における先行研究の探索(佐藤一嘉)(オンライン)
3. 文学研究の基礎、アメリカ文学を例に(長畑明利)(対面)
4. 文学研究、詩の分析(エリス俊子)(オンライン)
5. 言語教育研究における質的研究(近藤有美)(対面)
6. 国際開発領域のフィールド調査について(佐藤都喜子)(対面)
7. 文学研究、ポストコロニアル理論(木村茂雄)(対面)
8. 国際ビジネス領域、海外事業の展開(林慶雲)(オンライン)
9. 通訳翻訳の理論と役割(浅野輝子)(対面)
10. 応用言語学研究成果発表(田地野彰)(オンライン)
11. 日本語文法研究における文法現象(中北美千子)(対面)
12. 第二言語習得について(高梨芳郎)(オンライン)
13. 言語教育研究における量的研究(近藤行人)(対面)

14. 宗教研究における基礎概念(八木久美子)(オンライン)
15. 学生の研究発表とまとめ(佐藤一嘉・近藤行人)(オンライン)

成績評価基準

○平常点65%、期末レポート35%

○期末レポート

《内容》2024年9月に行う「修士論文・課題研究の構想発表・中間発表会」の予稿集原稿に準じたもの。

《分量》構想発表をする学生はA4で2枚、中間発表をする学生はA4で4枚。

《評価基準》必ずしも自分の専門に近い人でない読み手に対して自分の研究内容を明瞭かつ興味深く伝えられているか。

教科書(参考書)

なし

前期課程 総合研究Ⅱ
1期(集中) 量的研究法

籠宮 隆之

授業概要並びに到達目標

文科系の大学院生を対象とした、統計学の基礎講座である。

統計学を理解するための最低限の数学の知識、分散や正規分布の概念、分散分析等の統計的検定について学ぶ。集中講義ではあるが、実習形式で授業を進める予定である。

日本語教育学研究Ⅶ(データ分析法)と併せて受講することが望ましい。

授業計画

以下の項目を中心に、受講者の進度に合わせて講義する。

(15コマ)

1. Σ 、 n 、変量など、統計学に必要な数学の基礎概念
2. 平均値、分散、標準偏差などの基本統計量
3. 正規分布と、その性質
4. データの標準化
5. 相関係数
6. 統計的検定の基礎
7. χ^2 乗検定
8. クロス表の χ^2 乗検定
9. 中心極限定理
10. 標準誤差と平均値の区間推定
11. 1サンプルの t 検定
12. 対応のある2サンプルの t 検定
13. 対応のない2サンプルの t 検定
14. 分散分析
15. 多重比較

また、受講者各自の研究テーマに則った実習も行う予定である。

成績評価基準

レポートおよび平常点による。

教科書(参考書)

教科書：

栗原伸一(2021)『入門 統計学(第2版)検定から多変量解析・実験計画法・ベイズ統計学まで』、オーム社
山田剛史・杉澤武俊・村井潤一郎(2008)『Rによるやさしい統計学』、オーム社

参考書：

金明哲(2007)『Rによるデータサイエンスーデータ解析の基礎から最新手法まで』、森北出版

前期課程 1期	総合研究Ⅲ 質的研究法
------------	----------------

近藤 行人

授業概要並びに到達目標

授業概要

質的研究は様々な方法で採取したことをデータとして研究が行われる。この講義では、質的研究の研究プロセスを概観する。受講生は観察、或いはインタビューにより簡単なデータを採りし、そのデータ分析を行って最終レポートを作成する。

授業計画

- 1回 質的研究のイメージとその射程
- 2回 質的研究における認識論
- 3回 リサーチクエスションを立てる
- 4回 先行研究を調べる
- 5回 観察
- 6回 インタビュー
- 7回 文献講読(1)インタビューの当事者性と他者性
インタビュー(2)データの処理文字化とトランスクリプション
- 8回 文献講読(2)フィールドワークの手法による研究論文を読む
トライアングレーション
- 9回 文献講読(3)ライフストーリーに関する研究論文を読む
質的研究と倫理
- 10回 データの分析(1)データ分析の方法
- 11回 文献講読(4)SCATを用いた研究論文を読む
- 12回 データ分析(2)演習
- 13回 質的研究を書く
- 14回 質的研究の評価
- 15回 調査の報告

成績評価基準

授業参加 20%
授業内課題 30%
最終レポート 50%

教科書(参考書)

教科書なし

参考書

太田裕子(2018)『はじめて「質的研究」を「書く」あなたへ』東京図書
大谷尚(2018)『質的研究の考え方ー研究方法論からSCATによる分析まで』名古屋大学出版会
野村康(2018)『社会科学の考え方ー認識論、リサーチ・デザイン、手法』名古屋大学出版会
他、随時講義内で指示する。

前期課程 1期	総合研究Ⅳ アカデミック・プレゼンテーション
------------	---------------------------

大岩 昌子

授業概要並びに到達目標

授業テーマ：わかりやすい研究発表をするためのスライドデザインを知る。

授業概要：

1. 発表テーマを絞り、発表内容を企画する。
2. 発表の重点ポイントなどを意識しながら、全体の流れを論理的に組み立てる。
3. 2の設計を基に、PowerPointを用いて実際の資料を作成する。この際、PowerPointの使い方も学ぶ。
4. 表現方法などを踏まえつつ、作成した資料を用いた発表を実際に行う。

到達目標：9月に学内で行われる中間発表を見据え、自分の研究内容を伝えるためのプレゼンテーション用資料を作成し、効果的に発表できる。

授業方法：教科書の内容を理解したうえで、パワーポイントなどの発表資料を作成、授業後半では、発表の訓練を行う。
ZOOMリンクなどの配布はClassroomから行うので、担当者からのメールを確認の上、自分で登録してください。

授業計画

- 第1回 オリエンテーション 「わかりやすい」スライド構成にするために
- 第2回 「わかりやすいスライド」とはどういうことか？
- 第3回 結論から全体の流れを考える
- 第4回 スライド情報を構造化する
- 第5回 スライドの情報をブラッシュアップする
- 第6回 わかりやすくするためのデザイン的手法
- 第7回 スライドを見やすくする配色の原則
- 第8回 伝えたいことを伝えるためのグラフの原則
- 第9回 伝わる表にするデザインの原則
- 第10回 図形や線を見映えよくする手法
- 第11回 伝えたいことを伝えるための写真とイラストの原則
- 第12回 「わかりやすい」スライドの評価軸
- 第13回 構造を把握できるスライドを入れる
- 第14回 意見交換(全面オンライン授業)
- 第15回 受講生による発表

成績評価基準

作成した資料と発表を総合的に評価する。

教科書(参考書)

教科書

宮野公樹『研究発表のためのスライドデザイン』講談社
各自、購入すること。

前期課程 2期 総合研究 V 比較教育社会学

大橋 保明

授業概要並びに到達目標

比較教育社会学研究は、国内および諸外国の教育制度や教育政策等の比較を通して現在の教育が内包する課題等を明らかにし、今後の教育改革の方向性を見出すことをめざしている。本授業では、「教育にかかわる比較研究」を共通テーマとして、各受講生の関心のある領域に沿って調査研究課題を設定し、最終的に研究論文を作成・提出する。また、調査研究の進め方や研究論文の書き方等についても適宜指導する。

授業計画

【日進キャンパス／全員対面方式(第14回を除く)】

本授業は、全員参加のゼミ形式で実施する。

- 講義内容の説明と計画(第1回)
 - 自己紹介(卒論概要および修論構想を含む)、シラバスの確認等
- 比較教育社会学研究の基礎(第2回～第5回)

日本および諸外国の issue(論点)を比較・検討する。

 - 学校病理(いじめ、不登校、オルタナティブ教育)
 - 学歴社会(大学入試、国際学力調査)
 - 国際化社会(諸外国における教育改革、自律的学校運営、教育の質保証)
 - 労働と教育(ジェンダー、生涯学習)など

※取り上げる issue(論点)は、受講生の関心に応じて変更する。
- 比較教育社会学研究の応用(第6回～第9回)

現代の issue(論点)を比較・検討する。

 - 災害後のコミュニティ復興と教育の役割
 - 各国の大学入試改革
 - 外国人児童生徒の教育課題
 - 諸外国におけるいじめと体罰

※取り上げる issue(論点)は、受講生の関心に応じて変更する。
- 比較教育社会学研究の実際(第10回～第14回)
 - 調査研究課題の検討・決定(発表・コメント)
 - ②～③調査研究の進捗状況報告(発表・質疑応答)
 - ④～⑤調査研究の中間発表(発表・質疑応答・コメント)

※発表資料等はすべて Google Classroom 上に提出する。
- 講義のまとめ(第15回)
 - 成果発表(プレゼンテーション・質疑応答・コメント)

※第14週の授業は、全学方針にもとづきオンライン方式となる。

初回授業の前日までに Google Classroom に招待するので、承認の上、ストリーム内の指示に従って受講すること。

成績評価基準

研究論文(16,000字程度)と成果発表プレゼンテーションを中心に、調査研究への取り組み姿勢や議論への貢献度等も勘案しながら、総合的に評価する。なお、本科目は、中学校及び高等学校教諭専修免許状(英語・国語)の取得に関わる「教育の基礎的理解に関する科目」であることを付記しておく。

教科書(参考書)

教科書：

なし(必要に応じて適宜資料を配布する)

参考書：

杉本均・南部広孝編『比較する比較教育学』東信堂、2023年
杉本均・南部広孝編『比較教育学原論』協同出版、2019年
原清治・山内乾史・杉本均編著『比較教育社会学へのイマージュ』学文社、2016年
長島啓記編『基礎から学ぶ比較教育学』学文社、2014年
二宮皓編『新版世界の学校』学事出版、2014年
日本比較教育学会編『比較教育学研究』(学術雑誌)、各年度

前期課程 2期 総合研究 VI 比較文化

八木 久美子

授業概要並びに到達目標

- ・今日、日本社会には「移民」、「ニューカマー」と呼ばれる人々が少なからず存在するが、その多くが宗教的なアイデンティティを明確に持つ人々である。イスラム(教徒)の事例を中心にいくつかの具体的な事例を見ることで、現代社会における宗教の意味について理解することを目的とする。
- ・下記の参考図書の一つの章、あるいは雑誌論文を一本、読んでいく予定である。ひとりの担当者に資料の内容について発表してもらい、そのあと全員でディスカッションを行なう。ただし、参加者の研究テーマ、関心によって、他の文献を取り上げるなど適宜、対応する。
- ・授業の前に資料を丁寧に読み、ディスカッションで提起したい点について確認しておくこと、また授業後には、自らの研究テーマに引き付けて、その日の議論のポイントを整理しておくことが必要である。

授業計画

- 1)オリエンテーション
- 2)受講者発表：研究テーマの共有
- 3)「宗教と多文化共生」研究が目指すもの(『現代日本の宗教と多文化共生』)
- 4)『現代日本』『ムスリム・コミュニティと地域社会』(『現代日本の宗教と多文化共生』)
- 5)「マスジドと地域社会」(『異教のニューカマーたち』)

- 6)「まちなか礼拝空間」(雑誌論文)
- 7)「日本に暮らすムスリム第二世代」(雑誌論文)
- 8)「イスラーム圏からの観光とハラール」(『異教のニューカマーたち』)
- 9)「現代日本における「ハラール」をめぐる諸問題」(『異教のニューカマーたち』)
- 10)「マスメディアの中の「ハラール」」(『異教のニューカマーたち』)
- 11)「フランスにおけるハラール市場」(『フランスのイスラーム／日本のイスラーム』)
- 12)「日本のムスリム教育」(雑誌論文)
- 13)「オルタナティブ教育の場としてのイスラーム学校」(『フランスのイスラーム／日本のイスラーム』)
- 14)「オンライン」研究についての個別相談
- 15)受講者発表：研究の進捗についての発表

成績評価基準

・成績は、授業での発表およびディスカッションへの貢献によって評価する。

教科書(参考書)

高橋、白波瀬、星野編著『現代日本の宗教と多文化共生：移民と地域社会の関係性を探る』明石書店、2018年
 三木英編『異教のニューカマーたち：日本における移民と宗教』森話社、2017年
 伊達聖伸編『フランスのイスラーム／日本のイスラーム』水声社、2023年

前期課程 1期	総合研究Ⅶ 情報発信のスキル
------------	-------------------

富安 由紀子

授業概要並びに到達目標

発信する情報を的確に「相手に伝える」、その情報を「相手の記憶に残す」、そして、その情報で「相手を動かす」ためには、言語の表現力、論理的な構築力に加えて、視覚伝達の技術が有効である。不特定多数の相手に情報やイメージを伝える際に効果的な、情報発信の技術を体験的に学ぶ。

講義と演習を通して、視覚伝達に特化した情報発信スキルを習得する。具体的には、伝達内容に応じたテキスト、関係性の図解、画像の取り扱いなどを体験し、リーフレットやプレゼンスライドなど伝達媒体の構成ができるようになることを目標とする。この授業では、プロフェッショナル向けのデザイン用ソフトウェアを使用し、演習テーマに沿って制作作業を体験しながら視覚伝達のスキルを獲得する。

*履修学生はAdobe社のIllustratorとPhotoshopをノートPCにインストールする必要がある。

授業計画

- 第1回 導入講義
- 第2回 ことばにイメージを与える①色と書体

- 第3回 ことばにイメージを与える②紙面とレイアウト、色彩の活用
- 第4回 関係性の可視化①図解の基本：正確な伝達
- 第5回 関係性の可視化②イラストレーターを使ったチャート作成
- 第6回 関係性の可視化③図解の応用：複数の図解で連携する
- 第7回 関係性の可視化④図解の応用：イメージを伴う伝達
- 第8回 情報の編集①話順と紙面構成のサムネイル
- 第9回 情報の編集②イラストや写真の取り扱い
- 第10回 視覚ツールの総合的な活用①パワーポイントのデザイン
- 第11回 視覚ツールの総合的な活用②時系列に沿った組み立て
- 第12回 視覚ツールの総合的な活用③レイアウトのテンプレート
- 第13回 視覚ツールの総合的な活用④ノートの活用
- 第14回 視覚ツールの総合的な活用⑤オンラインでの使用
- 第15回 最終プレゼンテーション

成績評価基準

授業への発言や質疑による貢献度、課題の取り組みを平常点として評価する。

教科書(参考書)

指定教科書は無い。各授業で適宜、資料を配布する。

前期課程 1期	外国語コミュニケーションⅠ アカデミック・イングリッシュ
------------	---------------------------------

Simon J. Humphrey

授業概要並びに到達目標

This is a content-based course in spoken and written communication. For content, this course centres around the theme of language learning--a topic familiar to all students in this department--and aims at improving students' linguistic skills. Using language learning as a theme for discussion, students will not only improve and develop their fluency in English communication (reading and speaking), but also learn the skills necessary to acquire a second or third foreign language. This course will benefit teacher trainers as well as students who wish to be more effective communicators and (language) learners.

Students should spend 180 minutes outside of class reading, summarizing, and reviewing the reading material for their next class.

This course will involve reading 8-10 pages per week as homework. Students should be prepared to take an active role in the class discussions, debating the relevant issues they have read about. Students will learn to read with a critical eye, as well as form opinions based on sound judgement. Finally, based on the notes taken in class, students will select one area of interest and write a long report about it. Guidance and assistance will be provided throughout the writing process.

授業計画

Week 1: Orientation

Weeks 2–12: Guidance for Report writing, Reading, Discussing, and Doing the 10 weekly reading worksheets

Week 13: Submit report drafts

Week 14: Edit reports, feedback, and guidance. The 14th week will be taught online.

Week 15: Submit report

成績評価基準

- ・ Ten Weekly reflection sheets: 50%
- ・ Participation during in-class discussions: 20%
- ・ Report: 30%

教科書(参考書)

The Way of the Linguist: A Language Learning Odyssey' by Steve Kaufmann.

前期課程 2期 外国語コミュニケーション II アカデミック・フレンチ

伊藤 達也

授業概要並びに到達目標

フランス語でアカデミックな文章を書く際に必要な技術を獲得する。フランス語でアカデミックなプレゼンテーション(筆記と口頭)をできるようになることが目標である。準備と復習(授業後の課題作成)に2時間必要である。

授業計画

- 第1回: 導入、アカデミックライティングとは何か? プリント配布
- 第2回: バカロレアの答案を分析する
- 第3回: アカデミックな場では何をどのように書くことを求められているのか? 3部構成の重要性について
- 第4回: なぜ3部構成が必要か(学術論文と雑誌記事の比較分析)
- 第5回: 各パートで書く内容とは何か?
- 第6回: 導入、本文、結論を意識しながら読む(ケーススタディ)
- 第7回: ビブリオグラフィーと注の役割
- 第8回: 口頭発表とは何か
- 第9回: 同じ構成だが、ビジュアル資料を用意すること
- 第10回: 自らの論文に当てはめて考える(ケーススタディ)
- 第11回: 資料の集め方、アンケートの取り方
- 第12回: 質疑応答について
- 第13回: 査読とは何か?
- 第14回: 学会発表における注意点
- 第15回: まとめ

成績評価基準

授業への参加(50%)と課題提出(50%)

教科書(参考書)

適宜授業内で指示する。

前期課程 2期 外国語コミュニケーション IV アカデミック・ジャパニーズ

牧野 由美

授業概要並びに到達目標

日本語非母語話者を対象とした4技能(読む、書く、聞く、話す)向上のための総合練習。課題レポート作成を通して、問題を発見し、資料・情報の収集、分類、検討を行い、自分の立場を明確にした上で、反論を踏まえ、論理的に文章を展開しながら論証するという過程を体験する。その過程で4技能の向上を目指す。最終目標は、院生にふさわしいレポートの作成と口頭発表である。

授業計画

各自がテーマを設定し、そのテーマについて「知る」「練る」「調べる」「絞る」「組み立てる」「書く」「推敲する」「発表する」「振り返る」というプロセスを繰り返し、最終的な課題レポート作成、口頭発表につなげる。「練る」「絞る」「推敲する」のプロセスでは、他の受講生からの質問、感想、意見を募ったり、テーマについて検討したりするピア活動も行う。

- 第1回 ガイダンスとテーマの設定
- 第2回 構想の発表と検討、資料の要約
- 第3回 先行研究紹介発表
- 第4回 分析的読解とパラグラフ・ライティング
- 第5回 レポート・論文の構成と表現
- 第6回 情報の収集と整理・要約
- 第7回 アウトラインの作成と発表・検討
- 第8回 レポート・論文の序論の構成と内容の検討
- 第9回 発表・論文の表現、発表資料の作成
- 第10回 中間発表と相互フィードバック
- 第11回 レポート・論文の結論の構成と内容の検討
- 第12回 最終口頭発表の内容の検討
- 第13回 最終口頭発表
- 第14回 レポート初稿の相互フィードバック(オンライン)
- 第15回 レポート原稿の修正とコースのまとめ

※受講者の人数および状況、既有知識、研究領域、希望などを考慮して内容を変更する可能性がある。

成績評価基準

授業への参加度および課題への取り組み(40%)、最終レポート(30%)、口頭発表(30%)

教科書(参考書)

必要に応じてプリントを配付する。

前期課程 2期	外国語コミュニケーション V 英語通訳
------------	------------------------

浅野 輝子

授業概要並びに到達目標

国際社会で活躍できる通訳 基礎知識からトレーニング法まで

- 1: このクラスは、通訳の基礎理論を習得した後、実際に簡単な同時通訳ができるまでの能力を養成することを目的とした通訳入門コースである。
- 2: 国際化が進むにつれて、異文化コミュニケーターとしての通訳の需要は年々高まってきている。

このコース終了後、学生が国際会議などのボランティア通訳、ガイド通訳、エスコート通訳として活躍できるようになる事。

基本は日進キャンパスの E 30 同時通訳室にて対面で行います
が、14 回目の授業はオンライン (Zoom) で行います。

授業計画

- | | |
|-------|--|
| 第 1 回 | 履修に関するガイダンス |
| 第 2 回 | Unit 1 アテンド・随行通訳／通訳の技術 第 1 章 通訳の仕事(通訳方式による分類) |
| 第 3 回 | Unit 2 パーティ・レセプション通訳／通訳の技術 形態による分類 |
| 第 4 回 | Unit 3 工場見学通訳／通訳の技術 第 2 章 通訳と言語 |
| 第 5 回 | Unit 4 ビジネス・商談通訳／通訳の技術 通訳と翻訳 |
| 第 6 回 | Unit 5 芸能・スポーツ通訳／通訳の技術 第 3 章 通訳の過程 |
| 第 7 回 | Unit 6 ニュースのボイスオーバー／通訳の技術 第 4 章 理解 |
| 第 8 回 | Unit 7 コミュニティー通訳(司法通訳)／通訳の技術 第 5 章 ノートのとり方 |
| 第 9 回 | Unit 8 医療通訳／通訳の技術 ノートテータキング上級編 |
| 第10回 | Unit 9 国際政治や軍事に関するトピックの通訳(会議通訳)／通訳の技術 第 6 章 再表現 |
| 第11回 | Unit 10 Interview 対談通訳／通訳の技術 第 7 章 サイト・トランスレーション |
| 第12回 | Unit 11 セミナー・講演会通訳／通訳の技術 第 8 章 同時通訳 |
| 第13回 | Unit 12 国際会議同時通訳／通訳の技術 第 9 章 英語学習への適用 |
| 第14回 | 通訳実践／通訳の技術 第10章 通訳者への道(オンライン) |
| 第15回 | まとめ |

成績評価基準

授業中の通訳訓練、テキストの練習問題及び宿題の評価を全体の40%、通訳理論の理解、通訳実技で60%とする。

教科書(参考書)

プリント教材 及び 小松達也『通訳の技術』研究社(参考書)

前期課程 1期	外国語コミュニケーション VI 英語翻訳
------------	-------------------------

Jakub E. Marszalenko

授業概要並びに到達目標

本科目では、「日本語」と「英語」という二つの言語を翻訳の対象とし、翻訳の方向(日英か英日か)によって、訳出というプロセスはどう変わるのか、それぞれの作業にはどのような注意点や難しさがあるのか、起点言語の背景にある文化、社会、歴史などが翻訳作業にどのような影響を与えうかを探って、訳出というプロセスをより深く考えます。また、履修生の第一言語(いわゆる「母語」)に関わらず、日本語と英語の両方において、言語に関する知識の向上を促す授業を目指します。なお、本科目では、さまざまなジャンルのテキストを取り扱うことになり、一般的なテキスト、文学、新聞記事、専門的な文章などの翻訳をチャレンジします。

授業計画

01. 講義内容の説明と計画
02. 翻訳とは何か? 翻訳の特徴と基礎知識
03. 一般文章の英日翻訳
04. 一般文章の日英翻訳
05. 翻訳課題 1
06. 新聞記事の英日翻訳
07. 新聞記事の日英翻訳
08. 翻訳課題 2
09. 文学の英日翻訳
10. 文学の日英翻訳
11. 翻訳課題 3
12. 専門的文章の英日翻訳
13. 専門的文章の日英翻訳
14. 翻訳課題 4 (オンライン)
15. まとめ

成績評価基準

翻訳課題: 80% (4 課題 × 20%)

振り返り(第15回の授業時): 15%

授業への参加度: 5%

教科書(参考書)

なし

前期課程
1期 言語文化研究Ⅰ
文学批評

長畑 明利

授業概要並びに到達目標

- ・文学批評の具体例を読み、そこに見られる批評(あるいは分析、コメント)の方法と、それが反映する文学観、世界観について検討する。批評理論ではなく批評の実践例を知ることが主たる目的とする。また、主として英語圏の例を取り上げる。批評が対象とする文学作品についても学ぶ。
- ・到達目標は、①文学批評の実践例を知ること、②文学批評の実践例が反映する文学観・世界観について解説ができること、③英語で書かれた批評テキストを分析し論じることができること、である。
- ・各回の授業は担当制で行う。担当者はリーディング課題の内容紹介、注、質問をまとめたハンドアウトを用意し、事前に他の受講者および教員と共有する。授業に際し、担当者はハンドアウトに基づく報告を行い、質問に答える。担当者以外の受講者はリーディング課題と担当者のハンドアウトを読んだ上で授業に出席し、議論に加わる。

授業計画

導入に続く14回の授業で以下のテキストを扱う計画である。和訳のあるものは英語テキストに加え、和訳も参考にする。

- 第1回 導入
- 第2回 T. S. Eliot, "Tradition and the Individual Talent"
- 第3回 Vladimir Propp, "Fairy Tale Transformations"
- 第4回 Cleanth Brooks, "Language of Paradox"
- 第5回 David Lodge, The Modes of Modern Writing (excerpt)
- 第6回 J. Hillis Miller, "Impossible Metaphor: Stevens's 'The Red Fern' as Example"
- 第7回 Harold Bloom, "Ezra Pound"
- 第8回 Stanley Fish, "Literature in the Reader: Affective Stylistics"
- 第9回 Fredric Jameson, The Political Unconscious (excerpt)
- 第10回 Marjorie Perloff, "Happy World"
- 第11回 Walter Benn Michaels, The Gold Standard and the Logic of Naturalism (excerpt)
- 第12回 Edward Said, Orientalism (excerpt)
- 第13回 Shoshana Felman, "Turning the Screw of interpretation"
- 第14回 Toni Morrison, Playing in the Dark (excerpt)
- 第15回 Timothy Morton, "An Object-Oriented Defense of Poetry"

(*)取り上げるテキストを変更する場合がある。

成績評価基準

授業点60%、期末レポート40%。60点以上を合格とする。5回以上欠席した場合は単位取得の意思がないものとみなす。

教科書(参考書)

教科書：自主教材

参考書：

- ・ジョナサン・カラー『批評理論』(岩波書店)
- ・大橋洋一編『現代批評理論のすべて』(新書館)
- ・その他授業中に紹介する。

前期課程
2期 言語文化研究Ⅳ
応用言語学

田地野 彰

授業概要並びに到達目標

〈授業概要〉

本授業では、学際性という特性に焦点をあてながら、応用言語学研究を俯瞰する。応用言語学研究の成果を現実の外国語教育に活かす方法について検討する。事前学習には論文のまとめなどの作業で180分以上の準備が必要です。論文リストについては授業で紹介する予定。参考文献については「教科書欄」を参照のこと。

〈到達目標〉

応用言語学が対象とする各分野についての知識の習得をめざしながら、多角的視点からそれぞれの研究テーマについて理解を深めることをめざす。

〈授業方法〉

基本的に対面にて授業を行います(第14週目の授業はオンラインで実施予定)。なお、資料の配信については Google Classroom を使う予定です。

授業計画

- 1回 The scope of applied linguistics (応用言語学の研究領域)
- 2回 Linguistics and applied linguistics (応用言語学と言語学)
- 3回 Languages in the contemporary world (現代社会における英語の地位)
- 4回 Second language acquisition 1 : individual difference (第二言語習得 / 個人差)
- 5回 Second language acquisition 2: motivation (第二言語習得 / 動機づけ)
- 6回 Language and communication (言語とコミュニケーション)
- 7回 Communicative competence (コミュニケーション能力)
- 8回 History of English language teaching (英語教育法の歴史)
- 9回 Practice of English language teaching (英語教育の実践法)
- 10回 Communicative approach (コミュニケーション・アプローチ)
- 11回 Discourse analysis (談話分析)
- 12回 Language and culture (言語と文化)
- 13回 Intercultural communication (異文化コミュニケーション)
- 14回 Bilingualism (バイリンガリズム)
- 15回 (Report Presentation 課題研究発表)

成績評価基準

授業への積極的参加と発表など(50%)、最終レポート(50%)

教科書(参考書)

〈教科書〉

山内 進(2003)『言語教育学入門 ―応用言語学を言語教育に活かす』大修館書店 978-4469244892

〈参考書〉

Johnson, K., and Johnson, H. (Eds.) (1998). *Encyclopedic Dictionary of Applied Linguistics* Oxford: Blackwell.

Tajino, A. (Ed.) (2019). *A Systems Approach to Language Pedagogy*. Singapore: Springer Nature.

【専門教育科目】

前期課程 1期	英語学研究Ⅰ 音声学・音韻論
------------	-------------------

上田 功

授業概要並びに到達目標

言語の音韻現象を記述・分析しながら、その背後に潜む規則性を考察する。音韻理論の発展を辿りながら、一見無秩序に見える言語の音韻現象は、精緻な体系に基づいていることを見てゆきたい。基本的には概説的講義であるが、随時発展的問題に言及することもある。授業は、毎回テキストの指定された部分を読んできてもらい、英語や日本語を中心とする様々な言語の音韻データを分析しながら、ディスカッションを中心とする演習形式で進めてゆく予定である。

なお、第14回目の授業は、オンライン(双方向型)で実施する。

授業計画

最初に調音声学の基本を復習した後、構造主義の音素論を経て、生成音韻論へと導入する。扱われる主たる項目は、以下の通りである。

- 1回目：音声学の位置付けと3つの下位分野
- 2回目：言語音声の生理的側面
- 3回目：言語音声の音響的側面
- 4回目：言語音声の知覚的側面
- 5回目：アメリカ構造主義音素論
- 6回目：音素論の限界と生成文法理論の台頭
- 7回目：生成音韻論の考え方
- 8回目：基底表示と音韻表示
- 9回目：動的音韻規則
- 10回目：規則の適用順序
- 11回目：有標性について
- 12回目：自然音韻論
- 13回目：音韻過程と音韻規則
- 14回目：音韻獲得、歴史的音韻変化
- 15回目：全体的なまとめと今後の課題

成績評価基準

テキストや参考文献などから、毎回かなりの量のリーディングアサインメントを課し、必ず全員がこれを読んできて、授業に参加することになる。アサインメントとして、しばしばデータを分析して提出してもらう。成績評価にあたっては、これらすべてを総合的に判断する。

教科書(参考書)

開講時に指示する。

前期課程 2期	英語学研究Ⅱ 音声学・音韻論
------------	-------------------

上田 功

授業概要並びに到達目標

言語の音韻現象を記述・分析しながら、その背後に潜む規則性を考察する。音韻理論の発展を辿りながら、一見無秩序に見える言語の音韻現象は、精緻な体系に基づいていることを見てゆきたい。英語学研究Ⅰからの継続的トピックを議論する。基本的には概説的レベルの講義であるが、随時発展的問題に言及する。授業は、毎回テキストの指定された部分を読んできてもらい、英語や日本語を中心とする様々な言語の音韻データを分析しながら、ディスカッションを中心とする演習形式で進めてゆく予定である。

なお、第14回目の授業は、オンライン(双方向型)で実施する。

授業計画

最初に音素論、初期生成音韻論の考え方を復習した後、さまざまな形の非線状の音韻論や最適性理論へと進み、さらに音韻獲得等の応用分野へと導入する。特に近年興隆の著しい最適性理論の基本的な考え方に基づいて、音韻データの分析を試みたい。1)音韻過程、2)音節やモーラなどの音韻単位、3)弁別素性のあり方、4)素性不完全指定理論、5)素性階層理論、6)語彙音韻論、7)強勢とイントネーションなどである。最後に近年興隆の著しい最適性理論の基本的な考え方を概観することにした。

- 1回目：音素論と伝統的生成音韻論の復習
- 2回目：音節とモーラ
- 3回目：語強勢
- 4回目：句や文の強勢
- 5回目：イントネーション
- 6回目：非線状音韻論
- 7回目：多元的構造の考え方
- 8回目：素性階層理論
- 9回目：素性不完全指定理論
- 10回目：語彙音韻論
- 11回目：韻律音韻論
- 12回目：最適性理論
- 13回目：最適性理論の発展
- 14回目：動的音韻変化とエレメント理論

成績評価基準

テキストや参考文献などから、毎回かなりの量のリーディングアサインメントを課し、全員がこれを読んできて、授業に参加する。アサインメントとして、しばしばデータを分析して提出してもらう。成績評価にあたっては、これらすべてを総合的に判断する。

教科書(参考書)

開講時に指示する。

前期課程 1期	英語学研究Ⅲ 統語論
------------	---------------

川原 功司

授業概要並びに到達目標

この講義は、形式統辞論の基礎を理解することで、学生がこの分野で使用される道具の使い方と基本的な考え方について身につけることを主眼とする。主に扱う話題は、構造、習得の問題、局所性、フレーズマーカー、構造変異、言語獲得、人工知能、その他の統辞現象である。

この講義では、形式統辞論の基礎を身につけるために、精密にテキストを読み、内容を把握し、批判的に分析できる基礎力を養う。そのためにチュートリアル方式を採用し、受講者は毎回の出題範囲についてハンドアウトを使用し、議論の素地を十全に準備してくることが求められる。最低でも、事前・事後学習として3時間以上の学習時間を想定している。なお、14回目はオンライン授業を予定している。

授業計画

- 第1回：イントロダクション
- 第2回：弱生成性と強生成性
- 第3回：形式言語の階層性
- 第4回：句構造を越えて
- 第5回：複雑な構造を越えて
- 第6回：構造形成
- 第7回：刺激貧困の問題の古典的議論
- 第8回：刺激貧困の問題の視点
- 第9回：ベイズ統計
- 第10回：貧困の問題が語るもの
- 第11回：構造はどこから来たか
- 第12回：局所効果
- 第13回：循環移動
- 第14回：局所性の問題
- 第15回：構造関係

成績評価基準

毎回のチュートリアルの出来100%で評価する。

教科書(参考書)

以下のテキストを使用する(ハードカバー、ペーパーバック、電子版、何でも可)。

Lasnik, Howard and Juan Uriagereka. 2022. Structure: Concepts, Consequences, Interactions. The MIT Press.

前期課程 2期	英語学研究Ⅳ 統語論
------------	---------------

川原 功司

授業概要並びに到達目標

この講義は、形式統辞論の基礎を理解することで、学生がこの分野で使用される道具の使い方と基本的な考え方について身につけることを主眼とする。主に扱う話題は、構造、習得の問題、局所性、フレーズマーカー、構造変異、言語獲得、人工知能、その他の統辞現象である。

この講義では、形式統辞論の基礎を身につけるために、精密にテキストを読み、内容を把握し、批判的に分析できる基礎力を養う。そのためにチュートリアル方式を採用し、受講者は毎回の出題範囲についてハンドアウトを使用し、議論の素地を十全に準備してくることが求められる。最低でも、事前・事後学習として3時間以上の学習時間を想定している。なお、14回目はオンライン授業を予定している。

授業計画

- 第1回：イントロダクション
- 第2回：局所性の問題
- 第3回：寄生空所、タフ移動など
- 第4回：フレーズマーカー
- 第5回：二股枝分かれ構造
- 第6回：ラベルの問題
- 第7回：依存関係と連鎖
- 第8回：構造変異
- 第9回：通言語学的問題
- 第10回：素性、類似など
- 第11回：動的構造モデル
- 第12回：見えない問題
- 第13回：統辞論が抱える問題
- 第14回：言語学と科学の関係
- 第15回：人間言語と人工知能

成績評価基準

毎回のチュートリアルの出来100%で評価する。

教科書(参考書)

以下のテキストを使用する(ハードカバー、ペーパーバック、電子版、何でも可)。

Lasnik, Howard and Juan Uriagereka. 2022. Structure: Concepts, Consequences, Interactions. The MIT Press.

前期課程 1期	英語教育法研究Ⅰ 言語習得論
------------	-------------------

高梨 芳郎

授業概要並びに到達目標

英語教育に関する研究能力と英語授業実践に関わる専門的能力を養うことを目標にする。この授業では、第二言語教授・学習における言語習得、学習者要因、伝達能力と言語技能、評価について、英語学と英語教育学の研究成果をふまえて、理論と実践の両面から研究を行う。具体的には、研究論文等を読み、内容について理解を深め、批判的に分析を行うとともに教育実践への示唆を得る。併せて、英語教育の研究法についても理解を深めるようにする。

第1回～第13回、第15回の授業は対面で行う。第14回はオンライン(Google Meetでの同時双方向型)で行う。受講登録をした受講生には大学の電子メールで授業の前日までにGoogle MeetのURLを連絡する。

授業計画

- 第1回 授業内容の説明と計画
- 第2回 研究方法(質的研究・量的研究・混合法)
- 第3回 言語習得(先行研究)
- 第4回 言語習得(研究結果)
- 第5回 言語習得(考察と課題)
- 第6回 学習者要因(先行研究)
- 第7回 学習者要因(研究結果)
- 第8回 学習者要因(考察と課題)
- 第9回 伝達能力と言語技能(先行研究)
- 第10回 伝達能力と言語技能(研究結果)
- 第11回 伝達能力と言語技能(考察と課題)
- 第12回 評価(先行研究)
- 第13回 評価(研究結果)
- 第14回 評価(考察と課題)
- 第15回 研究課題の整理と考察

成績評価基準

授業中の取り組み、課題への対応状況、レポートの成績を総合的に判断して行う。

教科書(参考書)

教科書は使用しない。資料を配付する。
参考書については初回の授業で説明する。

前期課程 2期	英語教育法研究Ⅱ 教育方法論
------------	-------------------

高梨 芳郎

授業概要並びに到達目標

英語教育に関する研究能力と英語授業実践に関わる専門的能力を養うことを目標にする。この授業では、第二言語教授・学習

における言語習得過程、指導理論と指導法、伝達能力と4技能、テスト法について、英語学と英語教育学の成果をふまえて、教育方法論の研究を行う。具体的には、内外の研究論文、教育実践の研究論文を読み、内容について理解を深め、批判的に分析を行うとともに教育実践の課題解決に向けて研究成果の活用を検討する。併せて、英語教育の研究法についても理解を深めるようにする。

第1回～第13回、第15回の授業は対面で行う。第14回はオンライン(Google Meetでの同時双方向型)で行う。受講登録をした受講生には大学の電子メールで授業の前日までにGoogle MeetのURLを連絡する。

授業計画

- 第1回 授業内容の説明と計画
- 第2回 研究方法(理論研究、実験研究、実践研究)
- 第3回 言語習得過程(先行研究)
- 第4回 言語習得過程(研究結果の分析)
- 第5回 言語習得過程(研究成果の活用)
- 第6回 指導理論と指導法(先行研究)
- 第7回 指導理論と指導法(研究結果の分析)
- 第8回 指導理論と指導法(研究成果の活用)
- 第9回 伝達能力と4技能(先行研究)
- 第10回 伝達能力と4技能(研究結果の分析)
- 第11回 伝達能力と4技能(研究成果の活用)
- 第12回 テスト法(先行研究)
- 第13回 テスト法(研究結果の分析)
- 第14回 テスト法(研究成果の活用)
- 第15回 研究課題の整理と考察

成績評価基準

授業中の取り組み、課題への対応状況、レポートの成績を総合的に判断して行う。

教科書(参考書)

教科書は使用しない。資料を配付する。

前期課程 1期	英語教育法研究Ⅲ 外国語学習理論Ⅰ
------------	----------------------

田地野 彰

授業概要並びに到達目標

〈授業概要〉

講義では第二言語習得に関与する様々な要因について考究する。第二言語習得研究についての多様な研究成果を詳細に分析、解釈することにより、日本における外国語習得の現状理解および今後の研究方法などについての理解を深めるものとする。

〈到達目標〉

第二言語習得関係の研究論文などを理論的、批判的に読むアカデミックな読解力を養成する。事前学習にはテキスト本文の内

容読解、テキスト内容への批判的思考などで180分以上が必要となる。

授業計画

- 第1回 Language, Learning, and Teaching (1) Questions about SLA
- 第2回 Language, Learning, and Teaching (2) Language and Teaching
- 第3回 Language, Learning, and Teaching (3) Three Perspectives on SLA
- 第4回 First Language Acquisition (1) Behavioral Approach
- 第5回 First Language Acquisition (2) Nativist Approach
- 第6回 First Language Acquisition (3) Functional Approach and Issues in FLA
- 第7回 Age and Acquisition (1) The Critical Period Hypothesis
- 第8回 Age and Acquisition (2) Cognitive and Affective Considerations
- 第9回 Age and Acquisition (3) Linguistic Considerations
- 第10回 Human Learning (1) Fundamental Concepts in Language Learning
- 第11回 Human Learning (2) Language Aptitude
- 第12回 Human Learning (3) Learning Theories
- 第13回 Individual Differences (1) Learning Styles
- 第14回 Individual Differences (2) Learning Strategies
- 第15回 Individual Differences (3) Strategies-Based Instruction

成績評価基準

成績評価は発表と課題など(50%)および学期末レポート(50%)で行うものとする。

教科書(参考書)

・Lightbown, P.M. & Spada, N. (2013) How Languages Are Learned. (OUP) ISBN-13: 978-0194541268

参考図書

- ・鈴木孝明・白畑知彦(2012)『ことばの習得—母語獲得と第二言語習得』(くろしお出版)ISBN978-4-87424-544-6
- ・新多 了・馬場今日子(2016)『はじめての第二言語習得論講義』(大修館)ISBN978-4-469246087

前期課程
2期

英語教育法研究Ⅳ
外国語学習理論2

田地野 彰

授業概要並びに到達目標

〈授業概要〉

本授業では外国語学習に関わる諸要因を扱った研究を概観し、外国語学習研究の全体像について考究する。外国語学習論におけるこれまでの研究の歴史や概要についてまとめた論文や専門

書を通して、基本的な概念を理解し、批判的思考力や読解力の育成をめざす。事前学習には論文の要旨作成などを含め180分以上が必要である。(参考文献は「教科書欄」に掲載。)

〈到達目標〉

英語教育・指導の観点から外国語学習に関する研究成果の活用についての理解を深める。

〈授業方法〉

基本的に対面にて授業を行います(第14週目の授業はオンラインで実施予定)。なお、資料の配信については Google Classroom を使う予定です。

授業計画

- 第1回 SLA 理論
- 第2回 SLA の研究方法
- 第3回 第二言語知識の本質
- 第4回 第二言語教室でのインタラクション
- 第5回 フォーカス・オン・フォーム
- 第6回 第二言語教室における社会文化理論
- 第7回 文法の習得
- 第8回 文法の習得(教育的示唆)
- 第9回 語彙の習得
- 第10回 発音の習得
- 第11回 語用知識の習得
- 第12回 ISLA の環境
- 第13回 個人差と ISLA
- 第14回 研究と教育実践のつながり
- 第15回 指導への示唆

成績評価基準

成績評価は、発表や課題など(50%)、および最終レポート(50%)で行うものとする。

教科書(参考書)

〈教科書〉

佐野富士子ほか(2022)『学びの場での第二言語習得論』(開拓社) ISBN978-4-7589-2362-0

〈参考図書・資料〉

Ellis, R. (2015) Understanding Second Language Acquisition. (OUP) ISBN-13 : 978-0194422048

Loewen, S. (2020) Introduction to Instructed Second Language Acquisition (2nd ed.). Routledge. ISBN: 978-1138-67178-2

前期課程
1期

英語教育法研究Ⅴ
英語教育と異文化間コミュニケーション

古村 由美子

授業概要並びに到達目標

授業概要

本授業では、外国語教育全般について世界的な視点から概観し、これまでの外国語教育の流れと異文化コミュニケーション能力の関係について考究する。具体的には、外国語教育とアイデンティティとの関連、外国語教育の目的・可能性、異文化コミュニケーション能力と外国語学習、研究方法、外国語教育におけるナショナリズムとインターナショナリズム、ヨーロッパにおける言語学習について理解を深め、批判的思考を行い議論し、問題点と今後の展望について考察する。

授業方法

第14回目は Zoom にてオンライン授業を実施。それ以外の授業は対面で行います。

事前に各回の授業内容を要約し、その内容を基に批判的思考を用いて議論します。

授業計画

- 1 オリエンテーション 批判的思考について
- 2 コンテキストの中の外国語教育(外国語教育の定義と政策)
- 3 コンテキストの中の外国語教育(外国語教育の評価と立案)
- 4 外国語教育の目的(外国語教育がもたらす恩恵)
- 5 外国語教育の目的(具体的な目的の事例)/外国語学習は学校教育の中で可能なのか(政策立案者のねらい)
- 6 外国語学習は学校教育の中で可能なのか(義務教育修了時における到達目標)
- 7 相互文化的話者(二文化併用について)
- 8 相互文化的話者(相互文化的に行動すること)
- 9 相互文化的能力と小学校における外国語学習(コンテキストと学習内容)
- 10 相互文化的能力と小学校における外国語学習(初等教育における文化の学習とカリキュラム)
- 11 分析型研究と提唱型研究(外国語教育の文化的側面についての研究)
- 12 分析型研究と提唱型研究(文化学習の方向性)/外国語におけるナショナリズムとインターナショナリズム(言語教育者と外国語教育者)
- 13 外国語におけるナショナリズムとインターナショナリズム(社会化と社会的アイデンティティ)
- 14 ヨーロッパにおける言語学習(言語とアイデンティティ)
- 15 ヨーロッパにおける言語学習(ヨーロッパ人アイデンティティと言語学習)

成績評価基準

各回の授業内容を要約(70%)、課題・議論への参加度(30%)

教科書(参考書)

教科書：『相互文化的能力を育む外国語教育—グローバル時代の市民性形成をめざして』バイラム、マイケル【著】細川 英雄【監修】/ 山田 悦子 / 古村 由美子【訳】大修館書店 3080円(税込)

参考書：From Foreign Language Education to Education for Intercultural Citizenship: Essays and Reflections

Michael Byram (著) Multilingual Matters Ltd
(図書館所蔵)

前期課程 2期 英語教育法研究 VI 英語教育と異文化間コミュニケーション

古村 由美子

授業概要並びに到達目標

本授業では、著者が提唱している「相互文化的市民性」(Intercultural Citizenship)という概念に関連づけて、言語教育の様々な側面について概観する。多様な文化の混在する社会において、他者と民主的に共生できるようになるための「市民性」の意義、その育成のための教育方法、方針、カリキュラム、評価についての著者の考えを理解し、批判的思考を用いて分析する。この「市民性」形成と異文化コミュニケーション学習を英語教育においてどう実践するかについて考察を広げる。関連する論文を読み、理解し、今後の展望について議論する。

授業方法

第14回目は Zoom にてオンライン授業を実施。それ以外の授業は対面で行う。

事前に各回の授業内容を要約し、その内容を基に批判的思考を用いて議論します。

授業計画

- 1 オリエンテーション 批判的思考について
- 2 政治行動としての外国語学習(言語教師育成教育)
- 3 政治行動としての外国語学習(教師養成指導者のための教育)
- 4 言語教育、政治教育、相互文化的市民性(クリティカルな文化意識)
- 5 言語教育、政治教育、相互文化的市民性(概念に関する相対主義と言語相対主義)
- 6 相互文化的市民性を育てる教育(政治教育と言語教育の枠組み)
- 7 相互文化的市民性を育てる教育(4つの関連する原理)
- 8 相互文化的市民性教育のための方針(市民とその共同体)
- 9 相互文化的市民性教育のための方針(国民国家を超える市民性教育)
- 10 相互文化的市民性教育のためのカリキュラム(教育における超国家的政治的活動)
- 11 相互文化的市民性教育のためのカリキュラム(相互文化的に行動する段階)
- 12 相互文化的能力と相互文化的市民性のアセスメントと評価(Assessment と Evaluation)
- 13 相互文化的能力と相互文化的市民性のアセスメントと評価(ポートフォリオとプロフィール)/英語教育における異文化コミュニケーション学習の位置づけ
- 14 論文の要約
- 15 論文の分析

成績評価基準

各回の授業内容を要約(70%)、課題・議論への参加度(30%)

教科書(参考書)

教科書：『相互文化的能力を育む外国語教育—グローバル時代の市民性形成をめざして』バイラム、マイケル【著】細川 英雄【監修】/ 山田 悦子 / 古村 由美子【訳】大修館書店 3080円(税込)

参考書：From Foreign Language Education to Education for Intercultural Citizenship: Essays and Reflections Michael Byram (著) Multilingual Matters Ltd (図書館所蔵)

前期課程 1期	英語圏文化研究Ⅰ アメリカの小説と文化
------------	------------------------

梅垣 昌子

授業概要並びに到達目標

20世紀の前半にハリウッドの脚本家としても活動していたアメリカ南部の作家ウィリアム・フォークナーは、架空の土地ヨクナパトーフアを舞台とする作品を多数執筆しノーベル文学賞を受賞した。また東西の冷戦期にアメリカ政府の文化広報活動に関わり、日本をはじめとする世界各地を訪れている。この授業では、小説家としてだけでなく、脚本家としても活躍したフォークナーの作品を精密に読み込むことにより、技術革新の時代における表現方法の可能性と多様性について考察する。また、フォークナー作品の読解にあたって重要な語りの問題に注目し、語られる内容と語られ方の関係性について考察を深める。その過程で和文および英文の文学批評を熟読し、適切な様式を用いながら先行研究を踏まえた論文作成を行う。毎回の授業のための準備として作品や資料の読解および読解内容についての考察が必須である。

授業計画

- 第1回 講義内容の説明と計画
- 第2回 アメリカ文学とナラトロジー1 (モダニズムとポストモダニズム)
- 第3回 アメリカ文学とナラトロジー2 (長編と短編)
- 第4回 アメリカ文学とナラトロジー3 (映像作品)
- 第5回 作品の読解1 (The Country) “Barn Burning”
- 第6回 作品の読解2 (The Village) “Dry September”
- 第7回 作品の読解3 (The Wilderness) “Lo!”
- 第8回 作品の読解4 (The Wasteland) “Turnabout”
- 第9回 作品の読解5 (The Middle Ground) “Mountain Victory”
- 第10回 フォークナーとアメリカ南部：作品の読解6 (Beyond) “Carcassonne”
- 第11回 フォークナーと文学批評1 伝記的アプローチ(導入)
- 第12回 フォークナーと文学批評2 伝記的アプローチ(実践)
- 第13回 フォークナーと文学批評3 作品論(導入)

第14回 フォークナーと文学批評4 作品論(実践) →この回のみオンライン(ZOOM)で遠隔授業を行います

第15回 まとめと考察：研究課題と成果の確認

成績評価基準

授業準備の成果をふまえた授業中の取り組みと考察結果の発表(40%)および期末レポートとその準備に向けた課題(60%)により総合的に評価する。

教科書(参考書)

- 1) William Faulkner. Collected Stories. Vintage 2009.
- 2) 随時資料を配布する
- 3) 参考書については授業で課題ごとに指定する

前期課程 2期	英語圏文化研究Ⅱ アメリカの小説と文化
------------	------------------------

梅垣 昌子

授業概要並びに到達目標

20世紀の前半にハリウッドの脚本家としても活動していたアメリカ南部の作家ウィリアム・フォークナーは、架空の土地ヨクナパトーフアを舞台とする作品を多数執筆しノーベル文学賞を受賞した。また東西の冷戦期にアメリカ政府の文化広報活動に関わり、日本をはじめとする世界各地を訪れている。この授業では、フォークナーおよびフォークナーの影響を受けた作家たちの作品を精密に読み込むことにより、グローバル化時代における地域性および空間と場所の概念について考察する。また、フォークナー作品の読解にあたって重要な語りの問題に注目し、語られる内容と語られ方の関係性について考察を深める。その過程で和文および英文の文学批評を熟読し、適切な様式を用いながら先行研究を踏まえた論文作成をめざす。毎回の授業のための準備として作品や資料の読解および読解内容についての考察が必須である。

授業計画

- 第1回 講義内容の説明と計画
- 第2回 物語の構造分析1 (19世紀アメリカ文学の系譜)
- 第3回 物語の構造分析2 (20世紀アメリカ文学の系譜)
- 第4回 物語の構造分析3 (モダニズムとポストモダニズム)
- 第5回 フォークナーとアメリカ南部：作品の読解1 (The Country)
- 第6回 フォークナーとアメリカ南部：作品の読解2 (The Village)
- 第7回 フォークナーとアメリカ南部：作品の読解3 (The Wilderness)
- 第8回 フォークナーとアメリカ南部：作品の読解4 (The Wasteland)
- 第9回 フォークナーとアメリカ南部：作品の読解5 (The Middle Ground)
- 第10回 フォークナーとアメリカ南部：作品の読解6 (Beyond)

- 第11回 フォークナーと文学批評1(フォークナーと日本1)
 第12回 フォークナーと文学批評2(フォークナーと日本2)
 第13回 フォークナーと文学批評3(フォークナーとラテンアメリカ)
 第14回 フォークナーと文学批評4(フォークナーとヨーロッパ) →この回のみオンライン(ZOOM)で遠隔授業を行います
 第15回 まとめと考察: 研究課題と成果の確認

成績評価基準

授業準備の成果をふまえた授業中の取り組みと考察結果の発表(40%)および3回のレポート課題(60%)により総合的に評価する。

教科書(参考書)

- 1) William Faulkner. Collected Stories. Vintage 2009.
- 2) 随時資料を配布する
- 3) 参考書については授業で課題ごとに指定する

前期課程 英語圏文化研究 III イギリス文化論

岡田 新

授業概要並びに到達目標

イギリス現代史の専門書を読み、イギリスの現代政治の形成についてディスカッションする。
 google classroom で連絡を行う。
 John Grigg Lloyd George War Leader, 1915-1918を分担して読み、訳をつくり、固有名詞などをしらべて注をつける。
 疑問点をあげ、ディスカッションを通じてイギリス現代政治の形成の諸論点について理解を深める。

授業計画

- 1 introduction 授業の仕方 ウェールズとロイド・ジョージ
- 2 Background 19世紀末から20世紀初頭のロイド・ジョージ
- 3 Background 第一次大戦とロイドジョージ
- 4 講読と討論 Extreme danger
- 5 講読と討論 War Cabinet
- 6 講読と討論 Conference at Calais
- 7 講読と討論 Crisis at Sea
- 8 講読と討論 America Comes in
- 9 講読と討論 Nivelle's Nemesis
- 10 講読と討論 Electoral Reform
- 11 講読と討論 Farming and Food
- 12 講読と討論 Honours
- 13 講読と討論 Haig gets His Way
- 14 講読と討論 New Appointment(オンライン授業)
- 15 講読と討論 Arthur Henderson and Neville Chamberlain

成績評価基準

平常点 50%

レポート 50%

教科書(参考書)

John Grigg, Lloyd George War Leader 1916-1918 プリントで配布する

前期課程 英語圏文化研究 IV イギリス文化論

岡田 新

授業概要並びに到達目標

イギリス現代史の専門書を読み、イギリスの現代政治の形成についてディスカッションする。
 google classroom で連絡を行う。
 John Grigg Lloyd George War Leader, 1915-1918を分担して読み、訳をつくり、固有名詞などをしらべて注をつける。
 疑問点をあげ、ディスカッションを通じてイギリス現代政治の形成の諸論点について理解を深める。

授業計画

- 1 introduction 第一次大戦の意義
- 2 Background 戦間期の特徴
- 3 Background ロイド・ジョージの没落
- 4 講読と討論 Lloyd George's Boswell
- 5 講読と討論 War from the Air
- 6 講読と討論 Passchendaele
- 7 講読と討論 Clemenceau
- 8 講読と討論 The House party
- 9 講読と討論 Allied Conclaves
- 10 講読と討論 The Balfour Declaration
- 11 講読と討論 Manpower
- 12 講読と討論 Speeches
- 13 講読と討論 Rhonda and Rationing
- 14 講読と討論 Robertson Goes(オンライン授業)
- 15 講読と討論 Before the Storm

成績評価基準

平常点 50%

レポート 50%

教科書(参考書)

John Grigg, Lloyd George War Leader 1916-1918 プリントで配布する

前期課程 英語圏文化研究 VI ニュージーランド文化論

Simon J. Humphrey

授業概要並びに到達目標

The focus will be on New Zealand culture. It will be divided into

three sections dealing with the History, Language, and Culture of New Zealand.

Students should spend 180 minutes outside of class reading, summarizing, and reviewing the reading material for their next class. Students will be expected to take an active participation in the weekly discussions.

授業計画

The whole course will be taught in English only. There will be an assessment every 5th week. During this course, the students will become acquainted with the History, Language, and Culture of New Zealand (See below for details). Students should be prepared to take an active role in class discussions, debating the relevant issues they have read about. Students will learn to read with a critical eye, as well as form opinions based on sound judgement. Guidance and assistance will be provided throughout the semester.

Week 1: Orientation

Weeks 2-12: Guidance for Report writing, Reading, Discussing, and Doing the weekly reading worksheets

Week 14: The 14th week will be taught online.

Week 15: Feedback

The course is divided into 3 sections with a report for each:

History:

Māori settlement

European discovery

Treaty of Waitangi

British control

Presentation/Discussion/Assignment

Language:

Māori Language revival

New Zealand English: accent

New Zealand English: vocabulary

TV, Film and literature

Presentation/Discussion/Assignment

Culture:

British influence

Māori customs

Sports

Lifestyle

Presentation/Discussion/Assignment

成績評価基準

- ・ Assignments: 75%
- ・ Participation during in-class discussions: 25%

教科書(参考書)

None: All materials will be provided by the lecturer.

前期課程 日本語学研究 I 1期 日本語学概論

早津 恵美子

授業概要並びに到達目標

- 授業概要：日本語の文法構造について概観したあと、日本語の具体的な言語現象をめぐって考察する。
- 到達目標：日本語の文法現象について「規則・きまり」を受動的に覚えるというのではなく、自らが話したり書いたり聞いたり読んだりする日本語について、その実態を内省しながら考えることによって、そこにひそむ法則的なものを見いだしていく力を身につける。
- 授業形態：第14週の授業は zoom によるオンライン(リアルタイム)、それ以外の週は対面で行う。Google classroom に授業サイト「【院】日本語学概論(2023-1 火1)」を設け、授業に関する連絡、資料や課題の提示等に使用する。初回授業の前日までに、履修登録者の nufs のメールアドレス宛に Google Classroom の招待メールを送るので、各自でアクセスして準備すること。第14週目の授業(zoom)へのアクセス方法も Google Classroom で知らせる。

授業計画

- 1) 授業の説明と計画
- 2) 単語と文
- 3) 文法とは
- 4) 文の内部構造
- 5) 品詞と文の成分
- 6) 品詞の転成
- 7) 語彙的な意味と文法的な性質—単語の語彙的な意味
- 8) 語彙的な意味と文法的な性質—単語の文法的な意味
- 9) 語彙的な意味と文法的な性質—単語のカテゴリカルな意味
- 10) 単語のもつ文法的な性質—形態論的な性質
- 11) 単語のもつ文法的な性質—形態論的なカテゴリ
- 12) 単語のもつ文法的な性質—構文論的な性質
- 13) 単語のもつ文法的な性質—構文論的なカテゴリ(命題的)
- 14) 単語のもつ文法的な性質—構文論的なカテゴリ(陳述的)
※ zoom によるオンライン授業
- 15) まとめと理解度の確認

成績評価基準

次の割合を目安に、総合的に判断する。授業への貢献(50%)、レポート(50%)。

教科書(参考書)

なし。

前期課程 日本語学研究Ⅱ 2期 日本語談話研究

近藤 有美

授業概要並びに到達目標

〈授業概要〉

談話の構造と社会構造間の関係に焦点を当て、社会に潜む矛盾や不正と向き合う「批判的談話研究」について学ぶ。そして、日本語教育の文脈において自明のもののようによびわられている「ことばの正しさ」について、批判的談話研究の立場から考察を行う。

〈準備学習〉

毎回、指定された論文を読み、課題に取り組んだ上で授業に参加する必要がある。そのため、毎週180分ほどの準備学習が必要となる。

〈授業形態等〉

第14週のみオンラインで、その他は対面形式で行う。オンラインへのリンク情報、受講生への諸連絡は、Google Classroomで行う。履修者の確認ができた時点で Google Classroom への招待を行うので、授業開始前に承諾しておくこと。履修登録しているにも関わらず、授業開始の前日になっても招待が届かない場合は、授業担当者にメールで問い合わせること。

授業計画

- 第1回 受講ガイダンス、「ことば」と「人」と「社会」について
- 第2回 批判的談話研究とは何か
- 第3回 批判的談話研究と談話分析研究
- 第4回 敬語研究のイデオロギー批判(内容理解)
- 第5回 敬語研究のイデオロギー批判(クラスディスカッション)
- 第6回 ネイティブ・スピーカー再考(内容理解)
- 第7回 ネイティブ・スピーカー再考(クラスディスカッション)
- 第8回 ブラジル日系人の言語使用(内容理解)
- 第9回 ブラジル日系人の言語使用(クラスディスカッション)
- 第10回 異文化間交流の批判的談話分析(内容理解)
- 第11回 異文化間交流の批判的談話分析(クラスディスカッション)
- 第12回 地域日本語教育に関する批判的談話研究1(内容理解)
- 第13回 地域日本語教育の批判的再検討(内容理解)
- 第14回 〈オンライン〉地域日本語教育の批判的再検討(クラスディスカッション)
- 第15回 批判的談話研究と日本語教育／まとめ

成績評価基準

- Google Classroom への投稿課題 30%
- 発表 30%
- 授業内ディスカッション 30%
- 最終課題 10%

教科書(参考書)

【テキスト】

野呂香代子・山下仁(2009)『新装版「正しさ」への問い—批判的
社会言語学の試み—』三元社

※参考文献に関しては、必要に応じて授業内で紹介する。

前期課程 日本語学研究Ⅲ 1期 日本語音声学・音韻論

中北 美千子

授業概要並びに到達目標

音声データの分析や音声を刺激とした実験に関心のある学生を対象として、音声学および音韻論の基礎知識と、実際に音声信号を分析するための基礎的な技術を身につけてもらうことを目標とする。

人間の音声産出のメカニズム、物理的な信号としての音声の特徴、日本語話者の音声知覚の特性など、日本語の話し言葉の物理的側面と心理的側面について、要点を概説する。また、音響信号分析用のソフトウェアを利用して、実際に音声を録音して分析する演習を行う。受講生は各自ノート PC 持参のこと(できるだけ Mac ではなく Windows の PC を用意すること)。

◆資料の提示や連絡のために classroom を使用するので、第1回授業までに履修登録者の NUFS メールに招待を送ります。第14週はオンライン授業で、zoom を使用します。

◆受講者の知識や関心に応じて進度や内容を調整します。

授業計画

- 第1回：受講ガイダンス
- 第2回：発声の仕組み
- 第3回：日本語の母音
- 第4回：調音の仕組みと日本語の子音
- 第5回：音声記号
- 第6回：音声と音韻
- 第7回：確認テスト1(母音と子音)
- 第8回：音声信号の特性
- 第9回：音声分析のための基礎知識(母音と子音)
- 第10回：音声分析のための基礎知識(スペクトログラム)
- 第11回：アクセントの型
- 第12回：複合語のアクセント
- 第13回：イントネーション
- 第14回：(オンライン)確認テスト2(アクセントとイントネーション)
- 第15回：まとめ

成績評価基準

- 以下の割合を目安に総合的に判定する
- 確認テスト1・2(50%)
- 授業貢献度(50%)

教科書(参考書)

講義時に必要に応じて資料を配付し、参考文献を紹介する。

授業概要並びに到達目標

日本語の文法現象や語用論的現象が話し言葉においてどのような音声の特徴をもって実現されているかを観察するための多様な視点と手法を学ぶことを目標とする。話し言葉の分析や音声刺激を使った実験に必要な技術の基礎を学び、演習や文献講読を行う。また、音響分析用のソフトウェアを利用して、実際に音声を録音して分析する演習を行うので、受講生は各自ノートPC持参のこと。

- ◆資料の提示や連絡のために classroom を使用するので、第1回授業までに履修登録者の NUFs メールに招待を送ります。第14週はオンライン授業で、zoom を使用します。
- ◆受講者の知識や関心に応じて進度や内容を調整します。

授業計画

- 第1回：受講ガイダンス
モーラと発話速度
文献購読準備
- 第2回：アクセント型と複合語のアクセント(PC持参)
- 第3回：イントネーションの山とプロミネンス(PC持参)
発話機能・文末表現・文末イントネーション
- 第4回：文献講読(アクセント・イントネーション)
- 第5回：文献講読(フィラー・感動詞・文末表現)
- 第6回：文献講読(ノイズ・非流暢性)
- 第7回：文献講読(その他)
- 第8回：話し言葉の分析演習(発話速度・ポーズ)
- 第9回：話し言葉の分析演習(アクセント・イントネーション)
- 第10回：話し言葉の分析演習(フィラー・感動詞・文末表現・ノイズ・非流暢性)
- 第11回：話し言葉の分析演習(その他)
- 第12回：分析結果発表(①さん・②さん)
- 第13回：分析結果発表(③さん・④さん)
- 第14回：(オンライン)分析結果発表(予備)
- 第15回：まとめと振り返り

成績評価基準

以下の割合を目安に総合的に判定する
分析結果発表(50%)
授業貢献度(50%)

教科書(参考書)

講義時に必要に応じて資料を配付し、参考文献を紹介する。

授業概要並びに到達目標

- 授業概要：語彙と文法(構文論と形態論)とが関わる様々な現象を確認し、語彙と文法をつなぐ要としてのカテゴリカルな意味について詳説し参加者と議論する。
- 到達目標：語彙の研究と教育においても文法の研究と教育においてもカテゴリカルな意味の理解が重要であることを具体的な現象の分析を通じて身につける。
- 授業形態：第14週の授業は zoom によるオンライン(リアルタイム)、それ以外の週は対面で行う。Google classroom に授業サイト「【院】日本語文法論(2023-1 火2)」を設け、授業に関する連絡、資料や課題の提示に使用する。初回授業の前日までに、履修登録者の nufs のメールアドレス宛に Google Classroom の招待メールを送るので、各自でアクセスして準備すること。第14週目の授業(zoom)へのアクセス方法も Google Classroom で知らせる。

授業計画

- 内容は以下のような予定である。ただし、参加者との相談によって微調整することがある。
- 1) ガイダンス：授業の説明と計画
- 2) 単語の語彙的な意味
- 3) 単語の文法的な意味
- 4) 単語のカテゴリカルな意味
- 5) 文法的な意味とカテゴリカルな意味
- 6) 構文論と形態論
- 7) 単語の形態論的な性質(命題的)とカテゴリカルな意味
- 8) 単語の形態論的な性質(陳述的)とカテゴリカルな意味
- 9) 単語の構文論的な性質とカテゴリカルな意味
- 10) 単語の多義性とカテゴリカルな意味
- 11) 語彙的な意味の多側面性とカテゴリカルな意味
- 12) 単語の類義性とカテゴリカルな意味
- 13) 単語の対義性とカテゴリカルな意味
- 14) 複合語とカテゴリカルな意味 ※ zoom によるオンライン授業
- 15) まとめと理解度の確認

成績評価基準

次の割合を目安に、総合的に判断する。授業への貢献(50%)、レポート(50%)。

教科書(参考書)

プリント・資料を配布する。

前期課程 2期 **日本語学研究Ⅷ**
日本語語彙論

早津 恵美子

授業概要並びに到達目標

- 授業概要：単語は語彙・文法的な単位であり、単語には語彙的な性質と文法的な性質がある。本授業では、主として語彙的な性質(単語の意味、意味の体系、文体的な性質、位相、語種、語構成、等)について、配布資料をもとに考察する。
- 到達目標：日本語の語彙の性質について内省力や理解力が深まる。
- 授業形態：第14週の授業は zoom によるオンライン(リアルタイム)、それ以外の週は対面で行う。Google classroom に授業サイト「【院】日本語語彙論(2023-2 火1)」を設け、授業に関する連絡、資料や課題の提示に使用する。初回授業の前日までに、履修登録者の nufs のメールアドレス宛に Google Classroom の招待メールを送るので、各自でアクセスして準備すること。第14週目の授業(zoom)へのアクセス方法も Google Classroom で知らせる。

授業計画

- 1) ガイダンス：授業の説明と計画
- 2) 語彙・文法的な単位としての単語
- 3) 単語の意味
- 4) 単語の意味の多義性と多側面性
- 5) 品詞
- 6) 品詞の転成
- 7) 単語の体系(同義語・類義語)
- 8) 単語の体系(対義語・上位/下位)
- 9) 単語の文体的特徴と位相
- 10) 語種
- 11) 語種と意味
- 12) 語構成
- 13) 語構成と意味
- 14) 慣用句の単位性 ※ zoom によるオンライン授業
※ zoom によるオンライン授業
- 15) まとめと理解度の確認

成績評価基準

次の割合を目安に、総合的に判断する。授業中の分担発表と議論への貢献(50%)、学期末のレポート(50%)。

教科書(参考書)

プリント・資料を配布する。

前期課程 1期 **日本語教育学研究Ⅰ**
第二言語習得論

近藤 行人

授業概要並びに到達目標

I 期では、認知的アプローチに基づく第二言語習得研究を概観

し、日本語教育研究者としての高度な研究能力養成を目指す。日本語教育の基礎科学として位置付けられる第二言語習得研究と日本語教育実践とのつながりについても受講生と議論して考えていく。

授業では、言語習得観、第一言語の影響、IIO モデル、個人差要因、教室習得研究について扱う。それぞれの分野における研究論文等を読み、内容について理解を深め、批判的に分析を行うとともに、研究手法や教育実践についての示唆を得る。

授業計画

- 第1回 オリエンテーション
SLA 研究の歴史意義
- 第2回 母語習得に関する2つの理論：原理とパラメーターの
アプローチと用法基盤モデル
- 第3回 SLA における第一言語の影響(1)
- 第4回 SLA における第一言語の影響(2)
- 第5回 Krashen のモニターモデルから IIO モデルへ
- 第6回 個人差要因 年齢
- 第7回 個人差要因 適性
- 第8回 個人差要因 学習スタイル、学習ストラテジー、ビリー
フ
- 第9回 個人差要因 動機づけ
- 第10回 教室における SLA (1) 文法
- 第11回 教室における SLA (2) Focus on form
- 第12回 教室における SLA (3) 語彙
- 第13回 教室における SLA (4) CBI と CLIL
- 第14回 SLA 研究の方法
- 第15回 まとめと振り返り

成績評価基準

授業参加度(30%)、授業内課題・発表(40%)、レポート(30%)

教科書(参考書)

参考書

※特定の教科書は使用しないが、以下の書籍を参考書とする。
小柳かおる(2021)『日本語教師のための新しい言語習得概論(改訂版)』スリーエーネットワーク
鈴木孝明・白畑智彦(2012)『言葉の習得：母語獲得と第二言語習得』くろしお出版
Shawn Loewen(2022)『学びの場での第二言語習得論』佐野富士子、齋藤英敏、長崎睦子他(訳)、開拓社

前期課程 2期 **日本語教育学研究Ⅱ**
第二言語習得論

近藤 行人

授業概要並びに到達目標

第二言語習得研究においては多くが「認知」的な研究である。しかし、近年は第二言語習得研究の分野でも社会的転回が提唱され、言語学習の社会的側面を捉えることができるようになった。このような流れの中で、第二言語習得においても非認知的な視

点を持った理論、実践、研究が求められている。本講義では、第二言語習得における社会的転回により台頭してきた社会文化的アプローチ、複雑系理論、アイデンティティ、生態学的アプローチなどについて理解を深め、それぞれの領域における研究の展開について議論する。

授業の一部では、論文講読を行う。講読文献の担当箇所について各自が、内容の要点と論点を提示したレジュメを作成し、各自の担当部分の説明と議論を重ねて実施する。

授業計画

第1回	オリエンテーション 第二言語習得研究における社会的転回
第2回	第二言語習得研究における社会的視点
第3回	第二言語習得と生態学的アプローチ(1)
第4回	第二言語習得と生態学的アプローチ(2)
第5回	第二言語習得と生態学的アプローチ(3)
第6回	第二言語習得と複雑系理論(1)
第7回	第二言語習得と複雑系理論(2)
第8回	第二言語習得と複雑系理論(3)
第9回	第二言語習得と社会文化的アプローチ(1)
第10回	第二言語習得と社会文化的アプローチ(2)
第11回	第二言語習得と社会文化的アプローチ(3)
第12回	第二言語習得とアイデンティティのアプローチ(1)
第13回	第二言語習得とアイデンティティのアプローチ(2)
第14回	第二言語習得とアイデンティティのアプローチ(3)
第15回	社会的転回後の第二言語習得研究

成績評価基準

授業参加(30%)、授業内課題・発表(40%)、期末レポート(30%)

教科書(参考書)

参考書

Block, D (2003) The social Turn in Second Language Acquisition
Edinburgh University press.

Atkinson, D. (Ed). (2011) Alternative approaches to second
language acquisition. Routledge.

馬場今日子・新多了(2020)『はじめての第二言語習得論講義：
英語学習への複眼的アプローチ』大修館書店

その手続きや実際の評価を通して検討し、その手法を修得する。

【到達目標】

日本語教育の評価に関する基礎的な知識を身に付け、実際の教育現場における評価を実施することができるようになる。

【準備学習】

講師から課される課題の取り組みなど、授業外でも他の履修者と協働して準備するなどの学習が求められる。

授業計画

1回	オリエンテーション 評価のイメージ
2回	教育評価についての基礎知識(1) 診断的評価、形成的評価、総括的評価、目標基準テスト・集団準拠テスト、相対的評価・絶対的評価
3回	教育評価についての基礎知識(2) コミュニケーション能力
4回	教育評価についての基礎知識(3) シラバスの役割・成績判定と報告・有用性・波及効果
5回	テストを作る(1) テスト方針の決定、テストデザイン の決定、テスト細目表、問題案の作成、問題案の検討、 実施要項作成
6回	パフォーマンステスト(1) タスク(ロールプレイとスピーチ)
7回	パフォーマンステスト(2) 評価基準
8回	言語能力の指標 CEFR・JF スタンドード
9回	関連論文講読 CEFRに関する関連論文
10回	関連論文講読 Can-do Statements に関する評価
11回	パフォーマンステストの実施と評価
12回	テストを作る(2) テストの問題例：文法・語彙・文字 のテスト
13回	テストを作る(3) テストの問題例：読解テスト・聴解 テスト
14回	関連論文講読 評価者特性による評価のずれ ※第14回の講義はZOOMによるオンライン双方向形 式で実施します。
15回	テストを作る(4) テストをテストする

成績評価基準

授業への貢献度(20%)、課題(40%)、最終レポート(40%)で行う予定である。

教科書(参考書)

教科書なし

参考書：

- ・近藤ブラウン妃美(2012)『日本語教師のための評価入門』くろしお出版
- ・村上京子他(2013)『テストを作る』スリーエーネットワーク
- ・国際交流基金(2011)『学習を評価する』国際交流基金
- ・野口裕之・大隅敦子(2014)『テストの基礎理論』研究社

授業概要並びに到達目標

【授業概要】

日本語学習を評価することは、日本語学習の成果や学習者の成長を何らかの物差しで測ることである。この授業では、教育現場の実務において必要な評価の基礎知識と評価の実践についての様々な問題を取り上げる。学習者の学びを適切に評価するための手法を学び、どうすれば有用性の高い評価ができるのか、

近藤 行人

前期課程
2期

日本語教育学研究Ⅳ
日本語教育評価法

近藤 行人

授業概要並びに到達目標**【概要】**

Ⅱ期では、対話や協働を扱う評価や社会文化的アプローチによる評価、教室を離れた評価などの様々な「新しい評価」とされる文献を講読する。講読する文献は基本的には講師が選ぶが、受講者の希望等により、取り上げる内容を調整し、興味関心に沿った論文を講読することもある。

【準備学習】

発表準備等や、取り上げる論文を読むため、毎回1～2時間程度の準備を要する。受講者が準備する資料に基づいて教室活動を行うので、分担内容に責任を持つようにすること。

授業計画

- 1回 オリエンテーション
- 2回 文献講読「アセスメントの歴史と最近の動向」
- 3回 文献講読「CEFRにおける評価とアセスメント」
- 4回 文献講読「ピアラーニングとアセスメント」
- 5回 文献講読「ポートフォリオアセスメント」(1)
- 6回 文献講読「ポートフォリオアセスメント」(2)
- 7回 文献講読「ジャーナルアプローチとアセスメント」
- 8回 文献講読「CEFR-CVにおける仲介」
- 9回 文献講読「CEFR-CVにおける仲介を扱った研究論文」
- 10回 文献講読「対話的アセスメントの実践研究」(1)
- 11回 文献講読「対話的アセスメントの実践研究」(2)
- 12回 文献講読「外国人とのやりとりの経験は日本人の言語使用の意識を変えるか」
- 13回 文献講読「学生の評価観を理解する」
- 14回 文献講読「学習につながる自己評価—「生活のための日本語」教育の可能性—」
- 15回 まとめ 各自の研究の発表(調査、結果)、相互フィードバック

成績評価基準

授業への貢献度(20%)、担当箇所の発表(40%)、最終レポート(40%)で行う予定である。

教科書(参考書)

教科書なし

参考書

- ・佐藤慎二・熊谷由里他(2010)『アセスメントと日本語教育 新し評価の理論と実践』くろしお出版
- ・宇佐美洋(編)(2015)『「評価」を持って街に出よう「教えたこと・学んだことの評価」という発想を超えて』くろしお出版

前期課程
1期

日本語教育学研究Ⅴ
日本語教育実践研究

近藤 有美

授業概要並びに到達目標

本授業では、近年教育全般で注目を集めている「対話」に焦点を当て、ことばの教育における「対話」の重要性について、その本質を理解することを目指す。そのため、本授業では、「対話」に焦点を当てた教育の論考を講読し、それらをもとにクラスでディスカッションを行う。

課題として論文を読み、Google Classroomに「疑問点」「ディスカッションしたい内容」等を授業前にアップロードしておくこと、また、他の学生がGoogle Classroomにあげた内容についても目を通し、授業でディスカッションできるよう準備しておくことが求められる。

論文講読、ディスカッション内容の検討等、180分程度の事前準備を必要とする授業である。

授業計画

(授業形態等)

第14週のみオンラインで、その他は対面形式で行う。オンラインへのリンク情報、受講生への諸連絡は、Google Classroomで行う。履修者の確認ができた時点でGoogle Classroomへの招待を行うので、授業開始前に承諾しておくこと。履修登録しているにもかかわらず、授業開始の前日になっても招待が届かない場合は、授業担当者にメールで問い合わせること。

- 第1回 コースのオリエンテーション／教育観に関するディスカッション
- 第2回 第1章：なぜ今対話なのか〈内容理解〉
- 第3回 第1章：なぜ今対話なのか〈クラスディスカッション〉
- 第4回 第1章：なぜ今対話なのか〈まとめ〉
- 第5回 第2章：対話のためのテーマとは何か〈内容理解〉
- 第6回 第2章：対話のためのテーマとは何か〈クラスディスカッション〉
- 第7回 第2章：対話のためのテーマとは何か〈まとめ〉
- 第8回 第3章：対話をデザインする〈内容理解〉
- 第9回 第3章：対話をデザインする〈クラスディスカッション〉
- 第10回 第3章：対話をデザインする〈まとめ〉
- 第11回 第4章：対話することばの市民へ〈内容理解〉
- 第12回 第4章：対話することばの市民へ〈クラスディスカッション〉
- 第13回 第4章：対話することばの市民へ〈まとめ〉
- 第14回 〈オンライン〉著者との対話セッション
- 第15回 クラスディスカッション「学習者主体と言語教育」／まとめ

成績評価基準

論文講読課題(30%)、発表(20%)、ディスカッションへの参加・貢献(30%)、レポート(20%)

教科書(参考書)

細川英雄(2019)『対話をデザインする—伝わるとはどういうこ

とか』ちくま新書

※その他、参考文献に関しては授業内で紹介する。

前期課程 日本語教育学研究 VI 2期 日本語教育実践研究

近藤 有美

授業概要並びに到達目標

〈授業概要・到達目標〉

2019年の入管法の改正、日本語教育推進に関する法律の公布・施行以降、日本語教育を取り巻く環境は大きく変化している。その後のパンデミックが国内外の日本語教育に与えた影響も大きい。また、機械翻訳など人工知能のめざましい発展は、言語教育のみならず教育全体に「学びの意義」を問いかけているようにも思われる。このような変化の中、言語教育は、「何のために教えるのか」を考える必要に迫られている。本授業では、「ことばの教育は何を目指すのか」に焦点をあてた論考を講読し、「何のために教えるのか」をクラス全体で議論する。

最終的に、各自が自分の目指す日本語教育について言語化できることを目標とする。

授業計画

〈授業形態・準備学習等〉

講読課題として論文を読み、Google Classroom に疑問点、ディスカッションしたい内容等を授業前にアップしておくこと、また、他の学生が Google Classroom にあげた内容についても目を通し、授業でのディスカッションに向けて準備しておくこと。これらに180分程度の事前準備を必要とする。

第14週のみオンラインで、その他は対面形式で行う。オンラインへのリンク情報、受講生への諸連絡は、Google Classroomで行う。履修者の確認ができた時点で Google Classroom への招待を行うので、授業開始前に承諾しておくこと。履修登録しているにも関わらず、授業開始の前日になっても招待が届かない場合は、授業担当者にメールで問い合わせること。

- 第1回 コースのオリエンテーション／これまで受けてきた言語教育の振り返り
- 第2回 第1章：ことばの教育は何をめざすか(内容理解)
- 第3回 第1章：ことばの教育は何をめざすか(クラスディスカッション)
- 第4回 第2章：「共生社会におけることばの教育」の実践としての「本質観取」(内容理解)
- 第5回 第2章：「共生社会におけることばの教育」の実践としての「本質観取」(クラスディスカッション)
- 第6回 第7章：民主的シティズンシップ教育のローカライズを考える(内容理解)
- 第7回 第7章：民主的シティズンシップ教育のローカライズを考える(クラスディスカッション)
- 第8回 第8章：人・ことば・社会のつながりを考える大学英語教育(内容理解)
- 第9回 第8章：人・ことば・社会のつながりを考える大学英語教育(クラスディスカッション)

- 第10回 第9章：評価が育てる学生、教師、日本語教育(内容理解)
- 第11回 第9章：評価が育てる学生、教師、日本語教育(クラスディスカッション)
- 第12回 第6章：共生社会で活かされる「複言語・複文化主義」的発想(内容理解)
- 第13回 第6章：共生社会で活かされる「複言語・複文化主義」的発想(クラスディスカッション)
- 第14回 〈オンライン〉著者との対話セッション
- 第15回 「共生社会におけることばの教育」ディスカッション／まとめ

成績評価基準

論文講読課題(30%)、発表(20%)、ディスカッションへの参加・貢献(30%)、レポート(20%)

教科書(参考書)

稲垣みどり・細川英雄・金泰明・杉本篤史(2022)『共生社会のためのことばの教育—自由・幸福・対話・市民性』明石書店
※参考文献に関しては、必要に応じて授業で紹介する。

前期課程 日本語教育学研究 VII 2期(集中) データ分析法

籠宮 隆之

授業概要並びに到達目標

総合研究Ⅱ(量的研究法)に引き続き、文科系の大学院生を対象とした、統計学の授業である。

本講座では、フリーの統計ソフトである「R」を用いた統計処理を学ぶ。

また、多変量解析を用いたデータ解析手法についても学ぶ。集中講義ではあるが、コンピュータを用いた実習形式で進める予定である。

なお、総合研究Ⅱ(量的研究法)と併せて受講することが望ましい。

授業計画

以下の項目について、受講者の進度と関心に合わせ、取捨選択しながら授業を進める。

(15コマ)

1. 総合研究Ⅱ(量的研究法)の復習(記述統計)
2. 総合研究Ⅱ(量的研究法)の復習(統計的検定)
3. 二元配置分散分析
4. 相関係数の有意性検定と統計的検定における効果量
5. 統計ソフト R の基本的な使い方(プログラム言語の基礎概念を含む)
6. 統計ソフト R を用いた統計的検定(t 検定)
7. 統計ソフト R を用いた統計的検定(分散分析と多重比較)
8. 回帰分析の基礎
9. 統計ソフト R を用いた回帰分析(単回帰分析、重回帰分析、変数選択)

10. 統計ソフト R を用いた様々な回帰分析(非線形回帰分析)
11. 統計ソフト R を用いた多変量解析(主成分分析)
12. 統計ソフト R を用いた多変量解析(因子分析)
13. 統計ソフト R を用いた多変量解析(判別分析)
14. 受講者自身の研究テーマに則った実習 1
15. 受講者自身の研究テーマに則った実習 2

成績評価基準

受講者各自の研究テーマに則って統計的な分析を行ったレポートにより評価する。

教科書(参考書)

教科書：

栗原伸一 (2021)『入門 統計学(第2版)検定から多変量解析・実験計画法・ベイズ統計学まで』、オーム社
山田剛史・杉澤武俊・村井潤一郎(2008)『R によるやさしい統計学』、オーム社

参考書：

金明哲(2007)『R によるデータサイエンス - データ解析の基礎から最新手法まで』、森北出版

前期課程 1 期 日本文化研究 I 日本文化論

齋藤 絢

授業概要並びに到達目標

【授業概要並びに到達目標】

本講義は国際文化論を手法とし、文化理論の基礎と理論の発展過程について学ぶことを目的とする。特に「文化接触」「文化変容」の理論については東アジア地域の文化関係を主体に社会的課題点を挙げ、日本と他の国・地域に跨る文化的諸問題について考察をおこなう。

【授業方法】

- ・ 使用ツール：Google classroom
- ・ 講義、文献購読、ディスカッションを中心として講義を進めていく。

授業計画

- 第 1 回 授業の概要説明と各週のスケジュール確認、受講者の学習背景
- 第 2 ～ 4 回 文化的諸要素に関する概念
- ①文化の概念
 - ②文化概念に関する文献講読 - 1
 - ③文化概念に関する文献後続 - 2
- 第 5 回 「ことばと文化」「言語と文化」(3)
文献紹介、ディスカッション 文化の視野を広げる
- 第 6 回 文献講読(1) 第 2 章「国際関係における文化」
国際関係における文化：平野健一郎(2000)『国際文化論』東京大学出版会
- 第 7 回 文献講読(2) 第 3 章「文化の変化」

1. 内発的变化と外発的变化
 2. 文化進化論
- 第 8 回 文献講読(3)
3. 文化変容論
- 第 4 章「文化の接触と変容—文化触変」

1. アカルチュレーション研究の登場

- 第 9 回 文献講読(4)

2. 外来文化要素の伝播と選択
3. 文化運搬者

- 第10回 講義「日本の近代化と異文化接触」

- 第11回 プレゼンテーションに向けて(1)

日本文化をテーマとし、文化触変についてプレゼンテーションをおこなう(報告+ディスカッション)
例)ことば・言語・生活文化・文化芸術活動・大衆文化・信仰/宗教など、テーマを軸にグループを組む

プレゼンテーションの趣旨：文化に対する複眼的な視野と知識を共有し、日本社会・日本文化に対する思考を深めていくためのグループ内ディスカッション、また全体のディスカッションの活性化を目指したい。

- 第12回 「主要文献の収集状況の確認、テーマの具体化」

考察ポイントについてのディスカッション

- 第13回 「PPT、配布資料の準備、質疑応答の準備」

- 第14回 「プレゼンテーション(1)」(オンライン)

報告時間：30分

論点の整理とディスカッションの準備(10分)

ディスカッション：40分

フィードバック：10分

- 第15回 「プレゼンテーション(2)」(全体のまとめ)

報告時間：30分

論点の整理とディスカッションの準備(10分)

ディスカッション：30分 フィードバック：10分

成績評価基準

課題20%、プレゼンテーション30%、レポート50%

教科書(参考書)

授業内容に応じて参考文献を紹介し、資料を配布する。

前期課程 2 期 日本文化研究 II 日本文化論

齋藤 絢

授業概要並びに到達目標

地理的に日本と朝鮮半島の歴史的関係は深く、日韓関係、日朝関係には常に変化が伴う。特に現代社会での課題の多くに近代に生じた政治的・社会的・文化的問題が関係しており、個と集団の狭間にある多様な文化的課題を解決することは容易ではない。本講義では日本と朝鮮半島を主体とする東アジアの文化関係を取り上げ、日韓の社会的課題点を捉え、考察の手法・知識を習得することを目標とする。とりわけ日韓大衆文化に関す

る両国の文化政策と文化交流の現場を中心に、どのように両国が文化的関係性を構築してきたのかを考察する。講義では日本語・韓国語文献の収集と講読をおこない、ディスカッションを通じて受講者間の考察の視点を学んでいく。

授業計画

各週学習テーマ

- 第1回 授業の概要説明と各週のスケジュール確認、受講者の学習背景
- 第2回 文化の理論、日韓文化関係
- 第3回 大衆社会と文化1—大衆文化(講義)
- 第4回 大衆社会と文化2—映像の視聴(1)
- 第5回 大衆社会と文化3—映像の視聴(2)
- 第6回 大衆文化論に関する文献講読：学習者1
文化論／異文化接触／大衆文化を中心とした学術分野のなかで学習者の研究テーマに関連した文献を選択し、文献紹介・ディスカッションのテーマ共有を中心に授業を展開する。
- 第7回 大衆文化論に関する文献講読：〃
- 第8回 大衆文化論に関する文献講読：学習者2
- 第9回 大衆文化論に関する文献講読：〃
- 第10回 大衆文化論に関する文献講読：学習者3
- 第11回 大衆文化論に関する文献講読：〃
- 第12回 大衆文化論に関する文献講読：学習者4
- 第13回 大衆文化論に関する文献講読：〃
- 第14回 日韓文化関係についてディスカッション—戦後の日韓関係と文化政策、日流・韓流(オンライン)
- 第15回 全体のまとめ

成績評価基準

各回授業参加への積極性…15%

文献講読(文献紹介、小発表の質、議論の質)…35%

レポート…50%

教科書(参考書)

講義内容に応じて参考文献を紹介し、資料を配布する。

前期課程 1期 日本文化研究Ⅲ 日本文学研究

エリス 俊子

授業概要並びに到達目標

文学の読み方、語り方

文学とは何か、文学言語と日常言語の違いはどこにあるのか、文学作品はどのようにして読めるのか、それについてどのように語り、批評することができるのかなど、文学研究をめぐる基本的な問いに立ち返り、具体的な作品を読みながら考える。隣接領域として、美術や映画などとの接続についても適宜考察の対象とする。日本の文学作品を中心とするが、関心があれば翻訳の問題にも触れる予定。

文学を専門とする人、しない人を問わず、文学に触れてみたいと思う人は大いに歓迎する。予備知識は必要ない。この授業を通して、文学の読み方になじみ、それぞれの専門領域に活かしてほしい。授業ではディスカッションを中心とする。授業計画については、参加者の関心に留意しつつ、適宜変更する。

授業は対面形式で行うが、第14週のみオンラインで行う。

授業計画

1. 導入—文学言語について
2. 近現代詩(1)
3. 近現代詩(2)
4. 近代の小説
5. 現代の小説
6. 文学と美術
7. 文学と写真
8. 文学と映画
9. 研究発表(1)
10. 研究発表(2)
11. 研究発表(3)
12. 研究発表(4)
13. 「世界文学」(1)
14. 「世界文学」(2)
15. 振り返りディスカッション

成績評価基準

授業参加 70%、レポート 30%

教科書(参考書)

適宜指示する。

前期課程 2期 日本文化研究Ⅳ 日本文学研究

エリス 俊子

授業概要並びに到達目標

文学研究

第1期に続き、文学およびその隣接領域を主テーマとして授業を行うが、今学期は、参加学生の個人研究ないし個人的な関心についても発表してもらう機会を設ける。研究関心を共有することで、お互いの研究の視野を広げ、新たな発想を得たり、自身の研究を深めるきっかけができることを願っている。

共同作業を行う回のほかは、それぞれの主要な関心について発表してもらい、参加者全員がコメントするかたちで議論を進める。授業への積極的な参加を期待する。

なお、授業計画については、参加者の関心に配慮し、適宜修正する。

授業は対面形式で行うが、第14週のみオンラインで行う。

授業計画

1. 第1期を振り返って
2. 私の研究関心 (1)
3. 私の研究関心 (2)
4. 私の研究関心 (3)
5. 共同テキスト分析—映画(小津安二郎「東京物語」あるいは他の作品)
6. 共同テキスト分析—美術
7. 共同テキスト分析—小説
8. 共同テキスト分析—詩
9. 研究発表 (1)
10. 研究発表 (2)
11. 研究発表 (3)
12. 研究の方法—さまざまな分析の仕方
13. 研究の方法—論文の書き方
14. 個別指導
15. 総合討論

成績評価基準

授業参加 70%、レポート 30%

教科書(参考書)

適宜指示する。

前期課程 1期	グローバルスタディーズ研究Ⅱ 国際マクロ経済とグローバルビジネス
------------	-------------------------------------

複数教員制

真家 陽一、林 慶雲

授業概要並びに到達目標

日本経済のグローバル化が進展する中、国際マクロ経済およびグローバルビジネスを学ぶ重要性が高まっている状況を踏まえ、マクロ・ミクロの両面から国際マクロ経済およびグローバルビジネスに関する理解を深めることを目指す。

前半の講義では、国際マクロ経済学について学んでいく。具体的には、日本経済との結びつきが強いいくつかの国・地域をピックアップし、その国の経済事情やビジネス慣行、代表的な企業のグローバル経営についてケーススタディを行う。後半の講義では、世界第2位の経済大国であり、日本との経済関係も緊密な「中国」とのビジネスを中心に、ケーススタディを行う。本講義は学生の主体的かつ積極的な参加を強く求めるため、履修前に経済・ビジネスに関する十分な知識を習得済みであることが望ましい。今年度は原則として対面による授業を実施する。ただし、第14回はオンラインとする。

授業計画

- 1回 オリエンテーション(林、真家)
- 2回 アメリカの経済事情(林)
- 3回 Southwest Airline の企業経営(林)
- 4回 Walt Disney の企業経営(林)
- 5回 Starbucks の企業経営(林)
- 6回 ASEAN の経済事情(林)

- 7回 インドの経済事情(林)
- 8回 オーストラリアの経済事情(林)
- 9回 ケーススタディ①(概論、自動車)(真家)
- 10回 ケーススタディ②(電機)(真家)
- 11回 ケーススタディ③(化学、医薬)(真家)
- 12回 ケーススタディ④(卸売・小売①スーパー・コンビニ)(真家)
- 13回 ケーススタディ⑤(卸売・小売②アパレル・生活用品)(真家)
- 14回 ケーススタディ⑥(食料品)(真家)
- 15回 課題演習と後半の授業のまとめ(真家)

成績評価基準

前半の講義は、毎回の講義で簡単な感想文を書いてもらい、前期のレポートを提出することを求める。感想文及びレポートに基づいて評価する。

後半の講義は、毎回の講義に基づく学生からと発表と討論への取り組み状況および課題演習などによって総合的に評価する。

教科書(参考書)

前後半の講義とも、教科書は使用せず、プリントを配布する。

前期課程 2期	グローバルスタディーズ研究Ⅲ 国際政治・紛争・平和構築
------------	--------------------------------

高瀬 淳一

授業概要並びに到達目標

Discuss on the theories of international relations by reading academic papers.

到達目標：現代の国際政治ならびに紛争・平和に関する理論について、英語の学術文献を読み進めながら議論する。

専門的文献を英語で読み抜く力を身につけるとともに、国家と国際関係の現状と未来について多角的に検討できる能力を養う。

なお、到達目標に鑑み、本講義の受講者には論文読解に必要な英語力、ならびに適切な日本語能力が求められる。

また、国際政治・紛争・平和問題に関する学説等の基礎知識(国家公務員試験(大卒)レベル相当)がすでにあることを受講条件とする。

大学院の講義であるので、毎回、社会科学的かつ論理的に発言することが求められる。

途中、何回か研究報告が求められる(スライド資料を利用)。

毎回の課題についての準備には120分程度の自宅学習が必要となる。

授業計画

- 1回 受講に必要な知識の確認(英語力ならびに学部レベルの国際関係論の基礎知識の有無の確認、評価する理論のについての報告)

【国際関係の現状をめぐる理論的分析】

- 2回 realism 論の有効性
- 3回 realism 論の限界(意見発表)
- 4回 regime 論の有効性
- 5回 regime 論の限界(意見発表)
- 6回 structuralism
- 7回 その他の理論
- 8回 国際政治理論の最新動向(研究報告)

【紛争と平和に関する理論的検討】

- 9回 globalism の現状(意見発表)
- 10回 peace keeping の手法
- 11回 security policy の国際比較(意見発表)
- 12回 UNSC の機能限界について
- 13回 G 7 / G 20メカニズムについて
- 14回 国際社会の将来像(研究報告と議論、オンライン実施)
- 15回 まとめ(小論文等についての指導を含む)

成績評価基準

成績は、毎回の英語文献の読解、意見発表等の授業中課題、ならびに最終研究報告(論文提出を含む)が、大学院生レベルの学修にふさわしい水準にあるかを基準として、総合的に判定する。

教科書(参考書)

講義では毎回、英語の学術論文の一部をプリントして用いる。

前期課程 グローバルスタディーズ研究 IV 1期(集中) 公共政策とガバナンス

平山 恵

授業概要並びに到達目標

公共政策の理論に関する文献購読を行いながら、学生に身近な課題についての政策策定手法の模擬演習を行う。

公共政策関連の専門知識を得るとともに、政策的思考を行うことができる能力を得ることを目的とする。

授業計画

1. 「公共政策」とは何か
2. 国際公共政策
3. 演習：理念設定
- 4～5. 政策の決定
6. 演習：現状把握
7. 課題別政策：安全保障
- 8～9. 政策の決定
10. 演習：未来予測
11. 安全保障
12. 地球環境
13. 演習：方策設定
14. 学生の発表
15. 総括

成績評価基準

輪読分担任及び討論を通じた知識理解 40%、政策手法演習 40%、政策分析発表および他の学生へのコメント 20%

教科書(参考書)

庄司真理子、宮脇昇、玉井雅隆 編著『新グローバル公共政策』晃洋書房 2021

前期課程 グローバルスタディーズ研究 V 1期(集中) 国際社会と国際法

山形 英郎

授業概要並びに到達目標

国際社会の平和と安全を維持するために国際連合が設立された。国際連合憲章は、武力行使を禁止し、集団安全保障体制を導入し、国際平和を維持する制度を構築した。しかし、現実には、国連創設以来武力行使の事例は枚挙にいとまがない。国際法の基本原則である武力行使禁止原則を中心に、国連安全保障体制について理解し、現実には生起している武力紛争について国連憲章を正しく適用することができる能力を身につける。その上で、国際法を通して国際社会の実態を分析することができるようになることを目標とする。

毎回、参加者との対話を通じて授業を進めていく。講義を行うが、受講する学生から随時質問を受け付け、回答を行う。疑問点を残さないよう授業を進めていきたい。

授業計画

01. 国際法の基礎を学び、国連集団安全保障体制を概観する。
02. 国際連盟の集団安全保障体制を理解し問題点を分析する。
03. 国際法上の基本原則である武力行使禁止原則を解剖する。
04. 武力行使禁止原則の例外である自衛権について検討する。
05. 個別的自衛権と集団的自衛権発動の要件を比較検討する。
06. 主権平等から導き出される不干渉原則を理解し運用する。
07. 国連憲章第6章における平和的紛争解決制度を概観する。
08. 国連安保理及び総会における決定手続きを十分理解する。
09. 冷戦期における安保理麻痺に対する対処方法を研究する。
10. 平和維持活動が第6章半の措置と呼ばれる理由はなにか。
11. 安全保障理事会が制裁措置を執るのはどのような場合か。
12. 安全保障理事会が軍事的強制措置を執るための要件とは。
13. 軍をもたない国連が軍事的強制措置を執るにはどうするか。
14. 非軍事的強制措置の実態を検証し法的問題点を洗い出す。
15. 以上の検討を踏まえ、国連は国際法の主体であるか否か。

成績評価基準

国際法や国連憲章に関する基礎的な知識を得ることができれば合格(C)。その知識を具体的な事例に適用することができれば(B)。国家間あるいは研究者の間で意見が相違する対立点を理解し、どうした背景からそのような相違が生じているのかを理解した上で、自己の見解を提示できれば(A)。授業での報告及びレポートから判断する。

教科書(参考書)

David Harris and Sandesh Sivakumaran ed., Cases and Materials on International Law 8th ed., Sweet & Maxwell (2015). ただし購入の必要はない。

参考書として、松井芳郎『武力行使禁止原則の歴史と現状』日本評論社(2018)、山形英郎編『国際法入門』(第3版)法律文化社(2021年)。

前期課程 2期	グローバルスタディーズ研究 VI 開発とグローバルイシュー
------------	---

佐藤 都喜子

授業概要並びに到達目標

授業概要：

「持続可能な開発」に関わるグローバル・イシューのホット・トピックを論じると共に、「国際協力」や開発論の軌跡について理学習する。国際協力の専門家として約25年間に渡って現場で働いた講師の経験を基に、臨場感ある授業を進める。オンラインではあるが、ゲスト・スピーカーとして、プラン・インターナショナルの理事長を務める池上清子氏を迎える予定である。

第14回はオンライン授業(zoom：教員が招待します)

到達目標：

「持続可能な開発」とそれに関わるグローバル・イシューについての理解を深める。

準備学習：

1. 次回の授業に関する指定資料を読んで、概要をまとめておくこと(週180分以上)
2. 授業を振り返りながら、授業のテーマに関する推薦図書を読む(週180分以上)

授業計画

- 第1回：オリエンテーション、開発のアクター(ODA・二国間援助)
- 第2回：開発のアクター(国際機関)
- 第3回：SDGsとは何か？ 政府、企業、自治体、生活者の視点からのSDGs
- 第4回：北野収(2017)『国際協力の誕生』2章、4章 プレゼン【院生担当】
- 第5回：北野収(2017)『国際協力の誕生』6章、7章 プレゼン【院生担当】
- 第6回：北野収(2017)『国際協力の誕生』8章 プレゼン【院生担当】
- 第7回：1. さまざまな開発論と戦後の開発論の変遷、2. 援助潮流の変化と今後の展望
- 第8回：トピック1：グローバリゼーションと開発(英文)輪読【院生担当】
- 第9回：事例：マレーシアの零細漁民【討議】
- 第10回：トピック2：ジェンダーと開発① 事例～バングラ

ディッシュ女性の現状【討議】

- 第11回：ジェンダーと開発②：女性のエンパワメントへの道のり
- 第12回：ジェンダーと開発③：ジェンダーと開発(英文)輪読【院生担当】
- 第13回：ジェンダーと開発④：分析手法
- 第14回：ジェンダーと開発⑤：ゲスト・スピーカー：池上清子(プラン・インターナショナル理事長)
- 第15回：ジェンダーと開発⑥：事例～ケニアの移住女性が直面する問題～【院生担当】

成績評価基準

授業姿勢(50点)

発表 (50点)

教科書(参考書)

授業内で使う書籍：

北野収(2017)『国際協力の誕生—開発の脱政治化を超えて—』創成社

参考図書：

南博、稲葉雅紀(2020)『SDGs—危機の時代の羅針盤』岩波新書
田中由美子、甲斐田きよみ、高松香奈(2017)『はじめてのジェンダーと開発』新水社

前期課程 1期	ワールドヒューマニティーズ研究 I グローバルヒストリー研究
------------	--

鈴木 茂

授業概要並びに到達目標

新しいマイノリティ論によって注目を集めている Justin Gest (ジャスティン・ゲスト) の新著、Majority Minority (New York: Oxford University Press, 2022) を輪読します。

米州(ニューヨーク、トリニダード・トバゴ)、中東(バーレーン)。インド洋(モーリシャス)、東南アジア(シンガポール)、太平洋(ハワイ)が扱われており、日本との比較を意識して、マイノリティ論のグローバルな展開を理解することが目標です。

合わせて、学術論文の形式、文体、語彙に慣れることも目標とします。

授業計画

各章ごとに担当を決め、報告と討論を行います。

- 第1回 イントリダクション
- 第2回 Part I, Chap.1
- 第3回 Part I, Chap.2
- 第4回 Part I, Chap.3
- 第5回 Part II, Chap.4
- 第6回 Part II, Chap.5
- 第7回 Part II, Chap.6
- 第8回 Part II, Chap.7
- 第9回 Part II, Chap.8
- 第10回 Part II, Chap.9

- 第11回 Part III, Chap.10
 第12回 Part III, Chap.11
 第13回 Part III, Chap.12
 第14回 Part III, Chap.13
 第15回 まとめ

成績評価基準

平常点で評価します。

教科書(参考書)

Justin Gest, Majority Minority (New York: Oxford University Press, 2022).

こちらで用意します。

参考書：ジャスティン・ゲスト『新たなマイノリティの誕生：声を奪われた白人労働者たち』弘文堂、2019年

前期課程 ワールドヒューマニティズ研究 II 1期(集中) 多言語多文化研究

奈良 雅美

授業概要並びに到達目標

グローバリゼーションの拡大と深化とともに変容を続ける世界において、多様な文化と言語の人々があるいは多様な主体が影響を及ぼし合っている。この授業では、これらの事象を重層的で動的な関係性として捉え、「多文化社会」をより深く理解できるよう、分析視点を広げる。

コースの前半は、国際文化論、国際社会論の視点から、「多文化社会」を位置付けて解説する。後半では、日本の多文化社会をジェンダーの視点から捉え、グローバリゼーションの中で、多文化共生がジェンダー平等とどう融合しうるのかを考える。

授業の目標は、第一に「多言語・多文化」に係る事象を俯瞰して理解する力を養うこと、第二に、多言語・多文化の社会の諸課題をジェンダーの視点で理解できるようになることである。

授業計画

- 1 授業の概要、進め方、授業意図のバックグラウンドの説明など
- 2 国際文化論からの考察①文化とはなにか
- 3 国際文化論からの考察②グローバル化の中の文化
- 4 国際文化論からの考察③文化の変化
- 5 国際文化論からの考察④文化の接触と変容
- 6 国際文化論からの考察⑤文化の受容と抵抗
- 7 国際文化論からの考察⑥人の国際移動
- 8 ジェンダーとはなにか
- 9 ジェンダーと多文化共生①ジェンダー平等との連関性
- 10 ジェンダーと多文化共生②対立あるいは変容
- 11 ジェンダーと多文化共生③複合差別
- 12 振り返りのディスカッション
- 13 事例：日本に住むフィリピン女性のライフヒストリーを読む
- 14 事例：マイノリティの学びの保障(映画「こんばんはⅡ」視

聴)

- 15 全体の振り返りとディスカッション

*授業の進行状況により順番を入れ替えたり、内容を変更する場合もある。

成績評価基準

平常点30%(ディスカッションでの意見、対話の状況から)

レポート70%(最終回で課題を提示する)

教科書(参考書)

教科書は指定しないが、以下を参考文献として挙げる。

適宜抜粋して授業で配布する。

平野健一郎『国際文化論』東京大学出版会、2000年

関根政美『エスニシティの政治学』名古屋大学出版会、1994年

辻村みよ子・大沢真里編『ジェンダー平等と多文化共生』東北大学出版会、2010年

前期課程 ワールドヒューマニティズ研究 III 2期 宗教・民族・エスニシティ

高村 美也子

授業概要並びに到達目標

授業概要

この授業では、エスノグラフィーおよび人類学的手法を用いて、世界の宗教、民族、エスニシティの概念を学び、アフリカおよびヨーロッパを中心とした各地域の社会の実態を学ぶ。

15回の講義を通し、世界で起こっている社会の現状と問題を発見し、それをどのように捉えていくか考察する。

受講生は、世界で起こっている民族問題について、日ごろから着目しておく。

目標達成のための授業方法

講義、ディスカッション、映像視聴、課題発表、レポート執筆を実施する。

レポートに関しては、各受講生が注目している地域の民族について執筆する。

授業計画

- 1 講義内容の説明と計画
- 2 世界の民族とエスニシティ
- 3 国家、国民、民族
- 4 世界の言語
- 5 世界の宗教 1 文明と3大宗教
- 6 世界の宗教 2 人類学で扱われる宗教
- 7 民族の土着信仰、慣習
- 8 大航海時代から現在の人の移動
- 9 ディアスポラの人びとの暮らし
- 10 宗教・民族・エスニシティ(発表) ①
- 11 宗教・民族・エスニシティ(発表) ②
- 12 宗教・民族・エスニシティ(発表) ③
- 13 宗教・民族・エスニシティ(発表) ④

- 14 移住先での宗教実践 オンライン
 15 宗教・民族・エスニシティ(発表) ⑤

成績評価基準

課題・レポート 40%

平常点(各講義課題への対応状況) 60%

教科書(参考書)

なし 随時配布

前期課程 2期	ワールドヒューマニティズ研究Ⅳ 世界文化と表象
------------	----------------------------

長畑 明利

授業概要並びに到達目標

- ・英語圏のモダニズムとその後の革新的な文学(innovative literature)に見られる翻訳と外国語の使用について考察する。
- ・到達目標は、①英語圏のモダニズムとその後の革新的な文学(innovative literature)について解説ができること、②革新的な文学に見られる翻訳と外国語使用の諸例について解説ができること、また、その意味について考えを述べるができること、③革新的文学および関連文献の英語に習熟することである。
- ・各回の授業は講義と担当者による報告および議論により進める。担当者はリーディング課題について、作品・作者紹介、翻訳と外国語使用についての考察、自分なりの論点を含む報告を行い、質問に答える。その際、必要に応じて、ハンドアウトまたはスライドを用意する。担当者以外の受講者はリーディング課題を読んだ上で授業に出席し、議論に加わる。

授業計画

- ・導入に続く14回の授業で以下のトピックとテキストを扱う計画である。和訳のあるものについては、英語テキストに加え、和訳も参考にする。

- 第1回 導入
 第2回 Modernism について
 第3回 Ezra Pound による Bertrand de Born、Bernart de Ventadorn の詩の翻訳
 第4回 Ezra Pound, Cathay
 第5回 Ezra Pound, Awoi no Uye
 第6回 Ezra Pound, "Canto I"; "Canto IV"
 第7回 T. S. Eliot, The Waste Land
 第8回 Basil Bunting, "Chomei at Toyama"
 第9回 Gary Snyder, "Miyazawa Kenji" (The Back Country)
 第10回 Kenneth Rexroth, The Love Poems of Marichiko
 第11回 Rosemarie Waldrop, A Key into the Language of America
 第12回 Caroline Bergvall, "Via"
 第13回 Theresa Hak kyung Cha, Dictee

第14回 Yoko Tawada, "St. George and the Translator"

第15回 最終発表

(*)扱うトピックまたはテキストを変更することがある。

成績評価基準

授業点60%、期末レポート40%。60点以上を合格とする。5回以上欠席した場合、単位取得の意思がないものとする。

教科書(参考書)

教科書：自主教材

参考書：

- ・Baker, Mona, ed. Critical Readings in Translation Studies. New York: Routledge, 2010.
- ・Venuti, Lawrence, ed. The Translation Studies Reader, 2nd ed. New York: Routledge, 2004.
- ・Yao, Steven G. Translation and the Languages of modernism: Gender, "Politics," Language. New York: Palgrave, 2002.
- ・その他、授業中に紹介する。

前期課程 1期	ワールドヒューマニティズ研究Ⅴ 世界文学と批評
------------	----------------------------

木村 茂雄

授業概要並びに到達目標

世界の英語文学の解釈や批評について学んでいきます。カリブ、アフリカ、インドなどの英語圏作家の短編小説を、歴史、社会、文化、ジェンダーなどのコンテキストから検討することにより、文学作品だけでなく、広い意味での文化的なテキストを解釈し、批評する力を身につけていきます。受講生は、授業で取り上げるテキストを丁寧に予習して授業に臨みます。また、各授業の発表担当者には、テキストの内容、その解釈、疑問点などを発表してもらいます。このような学習をとおして、修士論文執筆のための批評力を深めていきます。

授業計画

- 第1回 ガイダンス
 第2回 Jean Rhys, "The Day They Burned the Books"
 第3回 V.S. Naipaul, "The Baker's Story" ①
 第4回 V.S. Naipaul, "The Baker's Story" ②
 第5回 Neil Bissoondath, "Veins Invisible" ①
 第6回 Neil Bissoondath, "Veins Invisible" ②
 第7回 Neil Bissoondath, "Veins Invisible" ③
 第8回 Ngugi wa Thiong'o, "A Meeting in the Dark" ①
 第9回 Ngugi wa Thiong'o, "A Meeting in the Dark" ②
 第10回 Abioseh Nicol, "The Truly Married Man" ①
 第11回 Abioseh Nicol, "The Truly Married Man" ②
 第12回 Saadat Hasan Manto, "Toba Tek Singh" ①
 第13回 Saadat Hasan Manto, "Toba Tek Singh" ②
 第14回 (オンライン) Salman Rushdie, "The Free Radio" ①

成績評価基準

発表など授業への取り組み 60%、学期末レポート 40%

教科書(参考書)

教材はプリントで配布します。参考書は適宜授業で示します。

前期課程 ワールドヒューマニティズ研究 VI 2期 トランスレーション研究

甲斐 清高

授業概要並びに到達目標

「文芸翻訳の理論と実践」

この授業は、翻訳という行為にともなう諸問題を検討しながら、英語で書かれた文学作品を日本語に翻訳する、という実践を経験することを通して、実践的な翻訳力を身につけていくことを目的とする。単に英文を日本語で解釈するのではなく、実際の「翻訳」とはどのようなものかを意識的に考察していく。文芸翻訳の特殊性を理解するために、他のジャンルのテキストも翻訳の題材とする。授業の中、および課外で、文学作品の翻訳を進めていき、最終的にレポートを添えて翻訳作品を提出する。

受講者は、毎週与えられる翻訳課題を完成させて、次の授業にのぞまなければならない。

授業は、対面で行うが、資料の配布や課題の提出等は、Google Classroom から行う。

第14週は、Zoom を使ってオンラインでの授業となる。

授業計画

- 第1週 イン트로ダクション： 翻訳とは何か
- 第2週 直訳と意訳
- 第3週 辞書やその他のツールの活用
- 第4週 語句の意味と翻訳
- 第5週 起点テキストの種類、翻訳の目的
- 第6週 翻訳実践(省略)
- 第7週 翻訳実践(品詞の転換)
- 第8週 翻訳実践(順送りと逆送り)
- 第9週 翻訳実践(複雑な文への対応)
- 第10週 翻訳実践(話法)
- 第11週 翻訳実践(無生物主語、態)
- 第12週 翻訳実践(文化の違い)
- 第13週 翻訳実践(表記の問題)
- 第14週 翻訳実践(推敲)[オンライン]
- 第15週 まとめ

成績評価基準

授業内での取り組み40%、翻訳作品とレポート60%。

教科書(参考書)

プリント配布。

前期課程 ワールドヒューマニティズ研究 VII 1期 世界の宗教と文化

八木 久美子

授業概要並びに到達目標

・日本を含め、複数の異なる地域および宗教の事例を見ることが、宗教研究のさまざまな手法について学ぶと同時に、宗教を手掛かりにして社会の変容について考察する可能性についても理解することを目的とする。

・『現代社会を宗教文化で読み解く：比較と歴史からの接近』のなかから、毎回ひとつの章を選んで読んでいく予定である。ひとりの担当者にその内容について発表してもらい、そのあと全員でディスカッションをおこなう。ただし、参加者の研究テーマ、関心によって、他の文献を取り上げるなど適宜、対応する。

・授業の前に資料を丁寧に読み、ディスカッションで提起したい点について確認しておくこと、また授業後には、自らの研究テーマに引き付けて、その日の議論のポイントを整理しておくことが必要である。

授業計画

- 1) オリエンテーション
- 2) 受講者発表：研究テーマの共有
- 3) 一章 日本の神々はどのように描かれてきたのか
- 4) 二章 葬式仏教の時代は終わったか
- 5) 三章 宗教は性別を問わないか
- 6) 四章 宗教は自分らしさを奪うか
- 7) 五章 宗教は会社に指針を与えるか
- 8) 六章 宗教と世俗はどう共存しているか
- 9) 七章 宗教とツーリズムはなぜ結びつくのか
- 10) 八章 キリスト教は社会運動をなぜ支援するのか
- 11) 九章 カルト宗教はなにが問題なのか
- 12) 十章 宗教文化をどう捉えなおすか
- 13) 受講者発表：研究の進捗についての発表
- 14) [オンライン]研究テーマについての個別の相談
- 15) まとめ

成績評価基準

・成績は、授業での発表およびディスカッションへの貢献によって評価する。

教科書(参考書)

櫻井義秀・平藤喜久子編著『現代社会を宗教文化で読み解くー比較と歴史からの接近』ミネルヴァ書房、2022年

前期課程 情報コミュニケーション研究Ⅰ
1期 ジャーナリズム・メディア論

鶴本 花織

授業概要並びに到達目標

映画・広告・漫画などのビジュアルテキストを研究資料としてどう扱うべきかが特に20世紀後半以降に学問的に議論された。その結果として考案された分析方法を「記号学分析」と呼ぶが、この授業では、記号学分析の手法を教授するとともに、フェミニズム映画理論の中でとりわけ開発が進んだ精神分析的映画理論に特化して授業を運営する。

ビジュアルテキストを用いて研究を進めることを視野に入れている場合は、この授業を受けると良いだろう。

授業では、映画をネタにした記号学分析の実演を教員が行ったり、教員が選んだ映画をネタにグループ・ディスカッションをしたりする。また、受講生が選んだ映画を用いて個人発表を行い、学習成果を示す。

授業計画

〈導入〉

1. オリエンテーション：記号学分析とは
2. 記号学分析の基礎：ノーノー・ボーイの表象
3. 記号学分析の基礎：ティーン・フリックの表象

〈ホラー映画〉

4. ローラ・マルヴィ「視覚的快楽と物語映画」(1975)について
5. バーバラ・クリード「Horror and the Archaic Mother : Alien」
6. ブラッハ・L・エッティンガー『Matrixial Gaze』(1995)について／事例映画：『羊たちの沈黙』(1991)

〈現代家族〉

7. 『ジョーカー』2019の記号学分析
8. 『パラサイト半地下の家族』2019のディスカッション

〈戦争映画〉

9. 反戦映画に関するディスカッション／事例映画：『西部戦線異状なし』2022

〈救世主としての女性〉

10. 『プロミシング・ヤング・ウーマン』2020
11. 『ラブリー・ボーン』2009
12. 学生お薦め作品
13. 学生お薦め作品
14. 学生お薦め作品
15. 学生お薦め作品

成績評価基準

グループ・ディスカッションおよび個人発表

教科書(参考書)

クラスルームにデジタル版を挙げる

前期課程 情報コミュニケーション研究Ⅳ
2期 スピーチ・プレゼンテーション

Alessandro G. Gerevini

授業概要並びに到達目標

魅力的なスピーチやプレゼンテーションの力を身につける科目です。日本語、あるいは英語によるスピーチ・プレゼンテーションを実践的な形で指導します。話し方、姿勢、ジェスチャー、観客への視線、間の取り方、服装などのノン・バーバル・コミュニケーションと、発声・滑舌、話の速度、話の流れの中で協調すべきところなどのバーバル・コミュニケーションの両者に関するスキルアップを目指します。演劇学校などで用いられる実習も取り入れる予定ですので、学生の積極的な参加が期待されます。

準備学習時間：180分

履修者の自己紹介の指導から始まる予定ですので、初回まで数分程度のスピーチを準備してください。

授業実施方法：第1～13週間及び最終回の第15週間の授業は対面で行います。しかし第14週間はオンライン方式(リアルタイム双方向性型)で行う予定です。

授業計画

初回の後、特に優れたスピーチを例として扱いながら、重要なポイントや構成パターンを徹底的に分析します。即興のスピーチを練習する目的でも、履修者全員にウタ・ハーゲン氏の、観客への視線の大切さを学ぶ実習をしてもらう。そして各自で準備したスピーチやプレゼンテーションを発表してもらう。その内容に関しては特に決まりはなく、参加予定のスピーチコンテンツの原稿でも、他の授業中に発表する予定のプレゼンテーションでもどれでも結構です。使用言語は日本語もしくは英語、どちらでも可能です。各自のプレゼンテーションのテーマについての指導はしないものの、その内容が観客に理解されているか、また魅力的な形で届けられているかを確認します。学期末の試験では授業中で既に発表したスピーチやプレゼンテーションの「決定版」を評価します。履修者数によって、授業計画全体の微調整もあり得る。

第1回

コース・オリエンテーション、学生の自己紹介

第2回

国内外のスピーチ・プレゼンテーション観賞とその分析①

第3回

国内外のスピーチ・プレゼンテーション観賞とその分析②

第4回

ウタ・ハーゲン氏の実習①

第5回

ウタ・ハーゲン氏の実習②

第6回

インプロビゼーション(即興)の実習

第7回

ブリーフィング(グループ別指導)

第8回

学生のスピーチ・プレゼンテーション1(グループA)

第9回

学生のスピーチ・プレゼンテーション1(グループB)

第10回

学生のスピーチ・プレゼンテーション1(グループC)

第11回

ブリーフィング(個人指導)

第12回

学生のスピーチ・プレゼンテーション2(個人A)

第13回

学生のスピーチ・プレゼンテーション2(個人B)

第14回

学生のスピーチ・プレゼンテーション2(個人C)

第15回

まとめ

成績評価基準

授業参加における積極的な態度 30%

スピーチ・プレゼンテーションの練習 40%

期末試験 30%

教科書(参考書)

教科書は使用しません。

必要に応じて教員がプリントを配付します。

参考書: ウタ・ハーゲン著、シカ・マッケンジー訳『“役を生きる”
演技レッスン - リスペクト・フォー・アクティング』フィルム
ムアート社、2010

前期課程 2期 情報コミュニケーション研究 V 英語通訳スキル

浅野 輝子

授業概要並びに到達目標

国際社会で活躍できる通訳 基礎知識からトレーニング法まで

- 1: このクラスは、通訳の基礎理論を習得した後、逐次、同時通訳ができるまでの能力を養成することを目的とした通訳コースである。
- 2: 名古屋外国語大学主催で毎年開催している「全国学生通訳コンテスト」のスク립トをまとめた「通訳ワークブック」をテキストに、多文化社会の現場での逐次通訳スキルを音声教材を用いて指導する。
- 3: 国際化が進むにつれて、異文化コミュニケーションとしての通訳の需要は年々高まってきている。このコース終了後、学生が国際会議などのボランティア通訳、ガイド通訳エスコート通訳として活躍できるようになる事。

基本は日進キャンパスのE30同時通訳室にて対面で行いますが、14回目の授業はオンライン(Zoom)で行います。

授業計画

- 第1回 履修に関するガイダンス・オリエンテーション 通訳とは(通訳基礎理論)
- 第2回 用語の整理ー移民とは
- 第3回 国際移民の歴史
- 第4回 人口統計と移民
- 第5回 日本人移民史
- 第6回 移民による文化的影響とアイデンティティ
- 第7回 移民政策
- 第8回 移民と経済
- 第9回 移民と教育
- 第10回 移民と庇護希望者
- 第11回 非正規移民問題
- 第12回 移民とシティズンシップ
- 第13回 移民と国際機関
- 第14回 多文化社会としての日本(オンライン)
- 第15回 まとめ

成績評価基準

授業中の通訳訓練および態度、宿題の評価を全体の40%、通訳実技を60%とする。

教科書(参考書)

「世界のトピックで学ぶ 通訳ワークブック」浅野輝子他、名古屋外国語大学出版会

前期課程 2期 情報コミュニケーション研究 VI 中国語通訳スキル

楊 紅雲

授業概要並びに到達目標

授業概要:

本講義は、中国語通訳に必要な理論知識の習得と実践的技術、技能の養成を目的とする。具体的には、日中ビジネス、法律法規、医療医療、観光案内、健康美容、映像文芸など諸分野において担当教員が長年経験してきた通訳の事例を紹介し、解説する。講義内容に合わせて実践的通訳トレーニングを行う予定、学生には関連する専門用語の事前学習及びロールプレイ、ディスカッションへの積極的な参加を求める。

※第14週目は、大学の方針によりオンライン授業とする(Google Classroom)。

到達目標:

- (1)中国語通訳スキルの基礎知識を習得すること。
- (2)日中通訳に必要な技術、技能を訓練すること。
- (3)中国語⇔日本語の変換力を鍛えること。

授業計画

- 第1回 オリエンテーション(概説)
- 第2回 中国語通訳基礎(1): 通訳という仕事・通訳者としての教養

- 第3回 中国語通訳基礎(2): 逐次通訳・同時通訳
 第4回 通訳の技術(1): 商談(会議・セミナー)通訳
 第5回 通訳の技術(2): 工場(製造ライン・見学)通訳
 第6回 通訳の技術(3): レセプション(展示会・パーティー)通訳
 第7回 通訳の技術(4): 司法(捜査・弁護・法廷)通訳
 第8回 通訳の技術(5): 観光(案内・ショッピング)通訳
 第9回 通訳の技術(6): 医療(医薬・診療)通訳
 第10回 通訳の技術(7): 美容(コスメ・施術)通訳
 第11回 通訳の技術(8): 映像(ロケ探し・製作現場)通訳
 第12回 発表(1): 模擬通訳ロールプレイ
 第13回 発表(2): 模擬通訳ロールプレイ
 第14回 翻訳の仕事: 中国映画(ドラマ)字幕翻訳(オンライン)
 第15回 通訳者への道: まとめ(レポート)

成績評価基準

授業への貢献度(40%)、発表(30%)、レポート(30%)

教科書(参考書)

教科書: なし

参考書:

- ・高田裕子・毛燕『日中・中日通訳トレーニングブック』大修館書店
 - ・窪田守弘・楊紅雲他『映画でチャイニーズ』南雲堂フェニックス出版
 - ・楊紅雲『帝國的銀幕—十五年戦争と日本映画』中国電影出版社
- 資料: 各授業で適宜配布する。

英語・英語教育コース(英語教授法(TESOL)プログラム)

【専門教育科目】

MA 1期	英語教育法研究 I Second Language Acquisition
----------	--

佐藤 一嘉

授業概要並びに到達目標

This course aims to foster students' understanding of the principles of second language acquisition (SLA). Research findings and theoretical views help them evaluate their perspectives about language learning and teaching. Three main goals are:

- (1) to develop an understanding of the principles of SLA;
- (2) to develop the ability to think critically about research findings;
- (3) to understand the relationship between SLA research and second language classroom practice.

To prepare for each class, students are required:

- (1) to complete a reading assignment (two hours);
- (2) to write a reflection log (one hour).

授業計画

1. Language learning in early childhood (Class 1-2)
2. Explaining second language learning (Class 3-4)
3. Individual differences in second language learning (Class 5-6)
4. Mid-term test (Class 7)
5. Learner language (Class 8-9)
6. Observing learning and teaching in the second language classroom (Class 10-11)
7. Second language learning in the classroom (Class 12-13)
8. Popular ideas about language learning revisited (Class 14)
9. Summary (Class 15)

Moodle discussion and feedback are incorporated into class hours

成績評価基準

1. Participation & Self-evaluation (10%)
2. Action log (20%)
3. Reading assignment (20%)
4. Mid-term test (20%)
5. Final project (30%)

教科書(参考書)

Patsy M. Lightbown & Nina Spada. How Languages are Learned (5th Edition, 2021). Oxford University Press.

Other materials will be provided in class.

授業概要並びに到達目標

This course aims to foster students' understanding of the principles of language teaching. It is often said that teachers teach based on how they learned a foreign language. The ultimate goal of this course is to reflect on their own beliefs about language teaching and develop those so that they can be promising teachers with repertoires of teaching practice. In particular, students will learn the theoretical bases of communicative language teaching (CLT) and how to implement CLT in the classroom.

To prepare for each class, students are required:

- (1) to complete a reading assignment (two hours);
- (2) to write a reflection log (one hour).

授業計画

1. On roles and tasks (Class 1)
2. Research insights (Class 2)
3. Comprehensible input (Class 3)
4. Listening comprehension (Class 4)
5. Grammar instruction as structured input (Class 5)
6. Structured output: A focus on form in language production (Class 6)
7. Suggestions for testing grammar (Class 7)
8. Mid-term test (Class 8)
9. Spoken language and information-exchange tasks (Class 9)
10. Suggestions for evaluating spoken language (Class 10)
11. Comprehending written language (Class 11)
12. Writing and composing in a second language (Class 12)
13. Issues in testing reading and evaluating writing (Class 13)
14. Building toward a proficiency goal (Class 14)
15. Summary (Class 15)

Moodle discussion and feedback are incorporated into class hours.

成績評価基準

1. Participation and Self-evaluation (10%)
2. Action log (20%)
3. Reading assignment (20%)
4. Language learning history (20%)
5. Final project (30%)

教科書(参考書)

James F. Lee & Bill VanPatten (2nd ed.) (2003). Making Communicative Language Teaching Happen. McGraw-Hill Companies.

Other materials will be provided in class.

授業概要並びに到達目標

MDCD reviews concepts, procedures, & approaches in materials development, implementation, & evaluation with emphasis on classroom dynamics.

Modules include:

- (1) MatDev basics, (2) Perspectives on interaction & learning, (3) Recursive tools & procedures, (4) Freedom & constraints, (5) Developing materials, (6) Sharing session, & (7) Reflection report.

Participants gain experience using tools & techniques such as conversation cards, strategies, models, recursive practice, recordings, transcriptions, & follow-ups.

Online discussion & feedback is included in the class hours.

To prepare for each class, students are required to:

- (1) complete weekly reading assignments (2 hours each) & write a reflection log (1 hour).

授業計画

The MDCDs course will be delivered in a monthly session with a combination of Moodle and in-person meetings. Please note that this syllabus is tentative.

Session 1: Intro to materials development and classroom dynamics

1. Example materials series (Me & MD)
2. Considering our freedoms and constraints
3. A complex systems view of course design
4. Plans, materials, and dynamics for AR
5. Reflection assignment #1

Session 2: Understanding the field of MD

1. Review of feedback
2. Basic MD terms
3. Intro to the field of MD
4. Plans, materials, and dynamics for AR
5. Reflection assignment #2

Session 3: Recursive tools and procedures

1. Review of feedback
2. Techniques and materials
3. Plans, materials, and dynamics for the AR
4. Understanding recursive tools and procedures
5. Reflection assignment #3

Session 4: Supporting the interactive classroom

1. Review of feedback
2. Creating an interactive classroom
3. Plans, materials, and dynamics for the AR
4. Final reflection assignment

NOTE: Moodle discussion and feedback are incorporated into class hours.

成績評価基準

- (1) Assignments for four sessions (40%)
- (2) Four class reflections and reactions (40%)
- (3) Change Essay (20%)

Please note that all assignments must be completed without the aid of AI text generators.

教科書(参考書)

Not yet determined.

Print materials—including preliminary readings—will be provided by the instructor.

The course may be cancelled due to a small number of participants.

MA 1期(集中)	英語教育法研究 IV Teaching English to Young Learners
--------------	--

Alison Hasegawa

授業概要並びに到達目標

The aim of this course is to familiarize students with important principles and several current approaches to teaching young learners through self-study, lectures and discussion. It will also provide students with an opportunity to reflect on the different approaches in order to generate their own principles and consider how they can apply them to actual teaching situations.

On completing this course, the following is expected to be achieved by the students.

1. Ability to critically understand and apply theories and approaches to teaching young learners.
2. Ability to create an engaging and effective lesson plan aimed at developing young learners' skills in English.

授業計画

Session 1

1. Child development and learning a first or second language. (Class 1-2)
2. Basic Principles of TEYL. (Class 3-4)

Session 2

3. Teaching listening and speaking. (Class 5-6)
4. Teaching vocabulary and grammar. (Class 7)
5. Activity/Lesson Planning & Learning to learn. (Class 8)

Session 3

6. Teaching Reading and Writing. (Class 9-10)
7. Facilitating deep learning through picturebooks. (Class 11-12)

Session 4

8. Intercultural awareness & 21st Century Skills. (Class 13-14)
9. Materials evaluation and design. (Class 15)

Participants must order the textbook, finish reading it, AND consider the contents in relation to their own teaching experience BEFORE the start of the course. This is an intensive course over 4 days. After each day written reflections and preparation for the next day are necessary. There is no time to cover the necessary readings DURING the course.

成績評価基準

1. Participation in discussions and group or pair tasks (40%)
2. Reading/preparation (10%) & reflection log completion (20%) = (30%)
3. Post-Course Task: Develop a series of 3 lesson plans reflecting the important principles to teaching young learners. (30%)

教科書(参考書)

Teaching Young Learners English, From Theory to Practice. Kang Shin, J & Crandall, J. Boston, MA: National Geographic Learning, (2014).

It is ESSENTIAL that you order this book early AND finish reading the contents of both textbooks BEFORE the start of the course.

MA 1期	英語教育法研究 V Action Research 1
----------	--------------------------------

佐藤 一嘉

授業概要並びに到達目標

Action research is a way of steadily improving your own teaching practices through an on-going process of reflection and experimentation. You are expected to apply your newly acquired knowledge of the "theory and practice of teaching English" to your daily classroom teaching. For example, you will choose your own action research topic based on the problems you face in your classes. Then, you will modify your lesson plan with the help of the adviser. After trying out new ideas, you will report the results in the monthly meeting. Finally, you will make a mid-year presentation in August.

授業計画

1. May: Introduction (class 1, 2, 3)
2. May: Making action research plan (class 4, 5, 6)
3. June: Revising action research plan (class 7)
4. June: Monthly report (class 8)
5. July: Revising action research plan (class 9)
6. July: Monthly report (class 10)
7. August: Mid-term presentation (Class 11, 12)
8. August: Mid-term presentation (Class 13, 14, 15)

Moodle discussion and feedback are incorporated into class hours.

成績評価基準

1. Participation in Moodle discussion (20%)
2. Action research plan and monthly reports (40%)
3. Final presentation (40%)

教科書(参考書)

Anne Burns (2010). Doing action research in English language teaching. New York: Routledge.

MA 2期 英語教育法研究 VI Action Research 2

Kevin Ottoson

授業概要並びに到達目標

Following AR 1, you will continue your action research. Action research is a way of steadily improving your own teaching practices through an on-going process of reflection and experimentation. You are expected to apply your newly acquired knowledge of the “theory and practice of teaching English” to your daily classroom teaching. After trying out new ideas, you will report the results in the monthly meeting. Finally, you will make a final presentation in March.

授業計画

1. Sep: Revising action research plan (class 1)
2. Sep: Monthly report (class 2)
3. Oct: Revising action research plan (class 3)
4. Oct: Monthly report (class 4)
5. Nov: Revising action research plan (class 5)
6. Nov: Monthly report (class 6)
7. Dec: Revising action research plan (class 7)
8. Dec: Monthly report (class 8)
9. Jan: Revising action research plan (class 9)
10. Jan: Monthly report (class 10)
11. Feb: Revising action research plan (class 11)
12. Feb: Monthly report (class 12)
13. Mar: Final presentation (class 13, 14)
14. Mar: Final presentation (class 15, 16)

Moodle discussion and feedback are incorporated into class hours.

成績評価基準

1. Participation in Moodle discussion (20%)
2. Action research plan and monthly reports (40%)
3. Final presentation (40%)

教科書(参考書)

Anne Burns (2010). Doing action research in English language teaching. Routledge.

MA 1期 英語教育法研究 VII Curriculum Design 1

Duane Kindt

授業概要並びに到達目標

Following Action Research (AR) 1 & 2, you will continue your AR in Curriculum Design (CD) 1. Action research is a way of steadily improving your own teaching practices through an on-going process of reflection and experimentation. You are expected to apply your newly acquired knowledge of the “theory and practice of teaching English” to your daily classroom teaching. Moreover, you are expected to employ mixed methods research collecting both qualitative and quantitative data to increase the reliability of your research. Finally, you will make a mid-year presentation in August.

授業計画

- (1) May: Introduction (classes 1, 2, 3)
- (2) May: Making curriculum design plan (classes 4, 5, 6)
- (3) June: Revising curriculum design plan (class 7)
- (4) June: Monthly report (class 8)
- (5) July: Revising curriculum design plan (class 9)
- (6) July: Monthly report (class 10)
- (7) August: Mid-term presentation (classes 11, 12)
- (8) August: Mid-term presentation (classes 13, 14, 15)

Moodle discussion and feedback are incorporated into class hours.

成績評価基準

- (1) Participation in Moodle discussions (20%)
- (2) Action research plans (sample lesson plans) and monthly reports (40%)
- (3) Mid-year presentation & report based on mixed methods research (40%)

Please note that all assignments must be completed without the aid of AI text generators.

教科書(参考書)

Burns, A. (2010). Doing action research in English language teaching. Routledge.

MA 2期 英語教育法研究 VIII Curriculum Design 2

佐藤 一嘉

授業概要並びに到達目標

Following CD 1, you will continue your action research in Curriculum Design 1. Action research is a way of steadily improving your own teaching practices through an on-going process of reflection and experimentation. You are expected to apply your newly acquired knowledge of the “theory and practice of teaching English” to your daily classroom teaching. Moreover, you are expected to

employ mixed methods research collecting and analyzing both qualitative and quantitative data to increase the reliability of your research. Finally, you will give a final presentation in March.

授業計画

1. Sep: Revising action research plan (class 1)
2. Sep: Monthly report (class 2)
3. Oct: Revising action research plan (class 3)
4. Oct: Monthly report (class 4)
5. Nov: Revising action research plan (class 5)
6. Nov: Monthly report (class 6)
7. Dec: Revising action research plan (class 7)
8. Dec: Monthly report (class 8)
9. Jan: Revising action research plan (class 9)
10. Jan: Monthly report (class 10)
11. Feb: Revising action research plan (class 11)
12. Feb: Monthly report (class 12)
13. Mar: Final presentation (class 13, 14)
14. Mar: Final presentation (class 15, 16)

Moodle discussion and feedback are incorporated into class hours.

成績評価基準

- (1) Participation in Moodle discussions (20%)
- (2) Action research plans (sample lesson plans) and monthly reports (40%)
- (3) Mid-year presentation & report based on mixed methods research (40%)

教科書(参考書)

Burns, A. (2010). Doing action research in English language teaching. New York : Routledge.

MA	英語教育法研究 IX
1期(集中)	Learner Autonomy

Dominique Vola

授業概要並びに到達目標

This course aims to introduce participants to the importance of learner autonomy in language learning. It will provide theoretical underpinnings on learner autonomy and explore practical approaches to fostering autonomy within and beyond the classroom. After completing this course, participants should be able to:

1. understand the concept of learner autonomy and its importance in language learning
2. understand the key dimensions associated with learner autonomy
3. discuss the roles of teachers in promoting learner autonomy
4. devise practical ways to promote learner autonomy
5. know the basics of advising and how it fosters learner autonomy

授業計画

Though this course is a summer intensive course, you are required to do some readings, write your reflections (minimum 250 words) related to the readings, and respond to another student's reflection (minimum 75 words) in Moodle during the semester (4 times in the semester), which makes 25% of your grades. We will use the 4 days of classes in summer especially to discuss and to come up with practical ideas on how to promote learner autonomy in your contexts. Here is the schedule for the summer classes:

- Class 1 Introductions - Course overview - Getting to know one another
- Class 2 Characteristics of autonomous learners
- Class 3 Learner autonomy: why and how
- Class 4 Reflections and discussions on learner autonomy and your own contexts
- Class 5 Approaches to promote learner autonomy
- Class 6 More about approaches and ways to increase learners' control - Integrating the approaches to your own context
- Class 7 Promoting learner autonomy beyond the classroom - Learning strategies and resources
- Class 8 Designing an intervention / a project to promote learner autonomy in your school - Reflections
- Class 9 Interest and motivation
- Class 10 Teacher role: promoting reflection
- Class 11 Assessing learner autonomy
- Class 12 Working on the intervention / the project
- Class 13 Introduction to advising
- Class 14 Presentations of projects
- Class 15 Final activities and reflections

Note that this schedule might be slightly changed.

成績評価基準

- Online written reflections on the readings (25%)
- Written reflections after each day of class (minimum 150 words) (10%)
- Final written reflection (minimum 1500 words) (25%)
- Class participation (10%)
- Project work (30%)

教科書(参考書)

Required textbook:

Teaching and Researching Autonomy in Language Learning, 2nd ed. Authors: Benson, P.

Publisher: Pearson

Published: 2011

ISBN: 1408205017 / ISBN-13: 978-1408205013

Kevin Ottoson

授業概要並びに到達目標

This course covers major theories and concepts in cross-cultural communication.

The specific objectives are:

1. To help you to understand how different cultural values can influence everyday communication;
2. To increase your awareness concerning cultural differences;
3. To compare and contrast different culture-based verbal and nonverbal communication styles;
4. To help you to apply cross-cultural communication in your English class.

To prepare for each class, students are required:

1. to complete a reading assignment (two hours)
2. to write a reflection log (one hour)
3. to prepare a training project (three hours)

授業計画

1. Why teach intercultural communication? (Class 1)
2. What is intercultural communication competence? (Class 2)
3. What is culture? (Class 3)
4. Language and Culture (Class 4)
5. Sapir-Whorf Hypotheses (Class 5)
6. Communication style (Class 6)
7. Stereotypes (Class 7)
8. Gestures (Class 8)
9. Body Language (Class 9)
10. Value Orientation (Class 10)
11. Hofstede's Cultural Dimensions (Class 11)
12. Perceptions (Class 12)
13. Cross-cultural training project (Class 13-15)

成績評価基準

Class participation (30%)
Reading assignment (20%)
Reflection log (20%)
Cross-cultural training project (30%)

教科書(参考書)

Handouts will be provided in class.

to sociocultural theory and key concepts that tie the theory to the practice of language learning and teaching. By reading and analyzing relevant literature and reflecting upon students' own life journeys, this course is designed to encourage new perspectives and discoveries about how we both learn and teach.

To prepare for each class, students are required to:

1. Complete assigned readings (3 hours)
2. Post their reaction to the readings online (and post one response to a classmate's post) (1 hour)

授業計画

1. Course Overview, Fundamental SCT principles (Class 1)
2. Discussing our LLHs (Class 2)
3. Socio Cognitive Conflict, SCT in SLA (Class 3)
4. Zone of Proximal Development and scaffolding (Class 4)
5. Semiotic mediation and affordances (Class 5)
6. Linguaging and the place of L1 (Class 6)
7. Agency and learner identity (Class 7)
8. Private talk and social interaction/collaboration (Class 8)
9. Socialization/social constructivism (Class 9)
10. Communities of practice (Class 10)
11. Pedagogical interactions (Class 11)
12. Peer teaching and feedback (Class 12)
13. Presentations/reflections on peer teaching sessions (Class 13)
14. Evidence based and dialogic reflection (Class 14)
15. Course reflections and final assignment guidance (Class 15)

Course schedule subject to change based on class needs

Online discussion and feedback are incorporated into class hours

成績評価基準

1. Online posting on assigned readings and responses (20%)
2. Language Learning Histories and analysis (5%)
3. Article presentation and discussion leading (20%)
4. Peer teaching and reflective discussion (5%)
5. Final assignment: Reflective essay (50%)

教科書(参考書)

Merrill Swain, Penny Kinnear, & Linda Steinman. Sociocultural Theory in Second Language Education: An Introduction through Narratives (2nd Edition, 2015). Multilingual Matters.

Other materials will be provided in class.

The course might be cancelled due to a small number of participants.

Daniel Hooper

授業概要並びに到達目標

The aim of this course is to provide students with an introduction

Kevin Ottoson

授業概要並びに到達目標

Action research is a way of steadily improving your own teach-

ing practices through an on-going process of reflection and experimentation. You are expected to apply your newly acquired knowledge of the “theory and practice of teaching English” to your daily classroom teaching. For example, you will choose your own action research topic based on the problems you face in your classes. Then, you will modify your lesson plan with the help of the adviser. After trying out new ideas, you will report the results in the monthly meeting. Finally, you will make a mid-year presentation in August.

授業計画

1. May: Introduction (class 1, 2, 3)
 2. May: Making action research plan (class 4, 5, 6)
 3. June: Revising action research plan (class 7)
 4. June: Monthly report (class 8)
 5. July: Revising action research plan (class 9)
 6. July: Monthly report (class 10)
 7. August: Mid-term presentation (Class 11, 12)
 8. August: Mid-term presentation (Class 13, 14, 15)
- Moodle discussion and feedback are incorporated into class hours.

成績評価基準

1. Participation in Moodle discussion (20%)
2. Action research plan and monthly reports (40%)
3. Final presentation (40%)

Attendance rate will not be a part of the grade

教科書(参考書)

Anne Burns (2010). Doing action research in English language teaching. Routledge.

MA 1期(集中)	英語教育法研究 XIV Language Assessment
--------------	------------------------------------

Robert C. Kleinsasser

授業概要並びに到達目標

Language testing is discussed through sociocultural models of assessment. Focus includes purpose, development, and use of assessments appropriate for English Language Learners (ELLs). Test score interpretation and assessment use arguments are discussed. Course Goals: understanding the six qualities of usefulness (Construct Validity, Reliability, Authenticity, Practicality, Interactiveness, and Impact), the benefits of sociocultural approaches to assessment, critique of test scores and assessment through qualities of usefulness, and integrating assessments for classroom instruction purposes. To prepare for each class, students are required: (1) to complete a reading assignment (two hours); (2) to write a reflection log (one hour).

授業計画

Topics include—

- Day 1: Qualities of Test Usefulness, Rubrics, Multiplism;
- Day 2: Portfolios, Learning & Assessment, Classroom Assessment;
- Day 3: Dynamic Assessment, Teachers and Tests;
- Day 4: Reviews of Testing in English Languages. Students will be involved throughout the four days in discussions, lectures, workshops, cooperative learning, and portfolio development using various information processing, social, personal, and behavioural teaching models.

Graduate students will be expected to participate in class group work, at times lead either group or class discussions, and participate in test construction and assessment development workshops. Classroom interactions, assignments, and assessments seek to determine the extent students comprehend, apply, analyze, and synthesize course information.

成績評価基準

Students complete a portfolio and project: portfolio documents learning course materials and project enhances test skills by developing assessments for classroom chapter or curriculum.

教科書(参考書)

The course might be cancelled due to a small number of participants.

MA 1期	英語教育法研究 XIV Qualitative Research Methods
----------	---

Duane Kindt

授業概要並びに到達目標

Continuing from the 1st-year Intro to Action Research (AR) course, QRMs provides participants with more advanced skills for conducting AR focusing on qualitative research methods within mixed methods designs. Depending on student interest and need, instruments and procedures for gathering qual data will include, among others, (1) questionnaires, (2) interviews/learner talk, and (3) observation/journaling. The course also provides skills in data analysis and presentation in AR designs. Please note that this syllabus is tentative. To prepare for each class, participants are required to: (1) complete weekly reading assignments (two hours each) and (2) write a reflection log (one hour).

To participate fully, please complete all readings and assignments as best you can before each session. Sessions are currently scheduled to be held in person on Meieki Campus but may switch to Zoom, if necessary. Full attendance is expected. No hybrid sessions will be allowed. Although absences are at times unavoidable, missing a session can seriously limit a participant's success in the course. Please note that this syllabus is tentative and is likely to change as the course progresses. I would very much appreciate being informed of any errors or discrepancies.

授業計画

Session 1: Intros

- (1) Intro to the QRMs course
- (2) Intro to research designs (Griffiee, 2018) (Chapter 1)
- (3) Looking at RMs: Long (2017), Douglas (2015), and Kozawa (2017).
- (4) (Re)intro to AR design (Griffiee, 2018) (Chapter 5)
- (5) (Re)intro to (1) MA TESOL Ref Docs, (2) 7 steps, (3) Questionnaires, and (4) the Lit Rev, proposals, and design maps
- (6) Assignments

Session 2: Questionnaires

- (1) Sharing proposals, research design maps
- (2) Intro to Data Collection Instruments (DCI) (Griffiee, 2018) (Chapter 6)
- (3) 7 steps to writing effective questionnaires (Crocker & Kindt, 2018)
- (4) Data from questionnaires (Griffiee, 2018) (Chapter 7)
- (5) Sharing questionnaires/interview guides, sample data, and/or preliminary analyses
- (6) Sharing Lit Rev expansions, ref. AR Project Template
- (7) Intro to (1) coding data, (2) frequency, (3) thematic, & (4) CA-informed analyses, and (5) recording interactional data
- (8) Assignments

Session 3: Interviews/learner talk

- (1) Looking at RD plans/maps revisions
- (2) Data from interviews (Griffiee, 2018) (Chapter 8)
- (3) Review of coding data, frequency, and thematic analyses (E&B, 2005)
- (4) Sharing interviews/learner talk, question banks, preliminary codebooks (code lists? coding manual?) + attempts at analyses?
- (5) Brief intro CA-informed qual analysis (E&B, 2005), transcription practice: "favorite"
- (6) Looking at the Making recordings file Questions?
- (7) Sharing expansions of the LR including refs
- (8) Intro to (1) observation, (2) journaling, and (3) thematic analysis
- (9) Assignments

Session 4: Observation and journaling

- (1) Looking at research design plans/maps revisions
- (2) Data from observation (Griffiee, 2018) (Chap 9)
- (3) Data from diaries/journals (Griffiee, 2018) (Chap 10)
- (4) Deeper analyses and written presentation of qual data (including an APA-style table, figure)
- (5) Sharing data (learner talk, interviews, or text-based) + attempts at analysis
- (6) Sharing deepening of the Lit Rev + APA notes
- (7) RMs discussion
- (8) Final assignments

成績評価基準

Session assignments (Moodle) – (4 x 15) 60%

In-class participation (in person or Zoom) – (4 x 5) 20%

Reflections and reactions (Moodle) – (4 x 5) 20%

Please note that all assignments must be completed without the aid of AI text generators.

教科書(参考書)

Required:

Griffiee, D. T. (2018). An introduction to second language research methods: Design and data (2nd ed.). PDF available free at <http://www.tesl-ej.org/wordpress/books/>

Recommended:

Dörnyei, Z. (2007). Research methods in applied linguistics: Quantitative, qualitative, and mixed methodologies. Oxford UP.
Ellis, R., & Barkhuizen, G. P. (2005). Analysing learner language. Oxford UP.

MA 1期(集中)	英語教育法研究 XVIII Introduction to Language Learning Motivation
--------------	---

Matthew T. Apple

授業概要並びに到達目標

The purpose of this course is twofold: to introduce concepts related to second or foreign language learning motivation and to encourage language instructors or instructors in training to apply motivational research findings to their own language teaching and learning contexts.

Three main goals of the course are:

- (1) to develop an understanding of language learning motivation theories,
- (2) to develop the ability to critically analyze and evaluate motivational research findings, and
- (3) to connect theories of motivation to particular second or foreign language teaching contexts.

To prepare for each class session, students are required to:

- (1) to complete a reading assignment (two hours), and
- (2) to write a reflection log (one hour)

授業計画

Day 1: August 8th

Course introduction and materials explanation

Exploring motivation: Changing perspectives

Theories of motivation in psychology

Day 2: August 9th

Motivation to learn a foreign language: Social Psychology

Motivation to learn a foreign language: Cognitive theories and

classroom reality

Motivation to learn a foreign language: Focus on time, context, and vision

Review of theories and reflection exchange

Day 3: August 22nd

Discussion of midterm reports

Motivational dynamics and currents

Unconscious motivation

Motivation, multilingualism, and languages other than English (LOTEs)

Day 4: August 23rd

Motivation in context: Demotivating influences

Fixed/growth mindsets and the broader sociocultural context

Teacher motivation and student motivation interplay

Presentation of preliminary individual language learning motivation project ideas

Moodle discussion and feedback are incorporated into class hours

成績評価基準

1. Action log - online summaries of reading assignments and responses (40%)
2. Midterm report - literature review of a particular motivational theory or model (30%)
3. Final project - design of a motivational intervention lesson plan or a motivational research study plan (30%)

教科書(参考書)

Zoltán Dörnyei and Ema Ushioda. (2021). Teaching and researching motivation (3rd Ed.). Routledge. ISBN 978-1-138-54346-1

Other materials will be provided via Moodle.

The course may be canceled in the event of a small number of participants.

MA
2期

英語学研究 II
Morphology & Syntax

高橋 直子

授業概要並びに到達目標

The aim of this course is to provide students with a general understanding of linguistics; students will obtain basic knowledge of how languages are described. Basically this course will cover two major fields in linguistics, morphology and semantics. Students are expected to master major concepts and tools in these fields and be able to use them in analyzing and understanding languages. In order to succeed in this course, assigned readings (two hours) must be completed before corresponding lectures, and homework

assignments (one hour) and a project must be turned in on time. Materials and assignments will be given using Moodle. If necessary, discussions will be held using Moodle or Zoom.

授業計画

Day 1

1. Introduction (1) Course Objectives / Languages in the World
2. Introduction (2) "Good" Language? / Arbitrariness in Language / Subfields in Linguistics
3. Morphology (1) Words and Word Formation / Exercises in Identifying Morphemes

Day 2

1. Morphology (2) The Hierarchical Structure of Derived Words / Morphological Processes
2. Morphology (3) How to Solve Morphological Exercises / Morphological Exercises

Day 3

1. Syntax (1) Linear Order, Hierarchical Structure, and Ambiguity
2. Syntax (2) Lexical Categories
3. Syntax (3) Phrasal Categories

Day 4

1. Syntax (4) Phrase Structure Rules
2. Syntax (5) Transformation
3. Course Review

成績評価基準

Homework assignments 30%, Participation 20%, and Final project 50%

教科書(参考書)

Language Files: Materials for an Introduction to Languages and Linguistics. 8th edition. 2001. Department of Linguistics. Columbus: The Ohio State University Press.

(*Additional readings will be provided by the instructor.)

名古屋外国語大学

Nagoya University of Foreign Studies

〒470-0197 愛知県日進市岩崎町竹ノ山57
TEL/FAX 0561-75-1740（大学院事務室）
E-mail: injimu_gg@nufs.ac.jp
URL <http://www.nufs.ac.jp/>

